

あしらの詩あしたの詩



詩人の詩



一般社団法人日本作詩家協会年刊詩謡集

2011年版

巻頭言

会長 湯川 れい子

今年、平成二十三年、西暦二〇一一年は、私たち日本人にとって、忘れることの出来ない年となりました。

これから五年後、十年後。被災地には新しく家が建ち、人々は笑顔を取り戻しているでしょうか。大船渡や気仙沼などは、また活きの良い魚の水揚げで賑っているでしょうか。原発事故は忘れ去られ、内部被曝を心配されている子供たちは、立派に元気な大人となって、楽しく恋の歌を唄っているでしょうか。

何があっても、そうあって欲しいと祈るばかりです。

あの東日本大震災から八ヶ月がたった今は、残念ながらまだまだ威勢のいい鈍音は聞こえて来ませんけれど、歌声は確実に戻ってきています。そして逆に、こんな時代にだからこそ！と、被災地に歌声を届ける運動も盛んに行われています。

わが日本作詩家協会は、会員の皆さまから寄せられた被災地支援の善意のお金で、AMとFMが聞けるラジオを三百台購入。被災地の方々にお届けしました。

さあ、今度はこの詩謡集から、被災地で喜んで聞いて頂ける歌が産まれますように……。

巻頭言	会長 湯川 れい子	一
月下美人	藍 慶子	一六
東京ベイ	A U N	一七
愛のセレナーデ	青木 圭介	一八
迎え送り火	青木 勇一	一九
空きかんたちのレクイエム	明石 真帆	二〇
くまちゃん	赤坂 佳津子	二一
愛の青春譜	茜 まさお	二二
大川四季ごよみ	秋 篠さと	二三
若い季節の頃	秋 原美眞	二四
センチメンタル ヨコハマ	麻 こよみ	二五
俺の海峡	麻 木夢子	二六
リュウジ二月十四日	浅野 淑恵	二七
雨降りに	飛鳥 美勇樹	二八
午前一時の男と女	東 正明	二九
ふるさとへ帰りたい	アベ・イチロー	三〇
指の詩	阿部 則夫	三一
未練雨	天達 美代子	三二
『ゴメンネ』	彩	三三
寿出舟	荒川 利夫	三四
笛吹き紋蔵	荒木 都与雪	三五
はまなす情話	安藤 美津子	三六
一本勝負	井口 けいじ	三七
瀬戸内旅情	生駒 かつゆき	三八

俺にまかせろ	勇	福子	三九
加越能えれじ	イザワ	マサミ	四〇
衣替え(ころもがえ)	石原	信一	四一
別の心でプカリプカリ	石原	弘見	四二
かたり酒	泉	美子	四三
幸せの花の舟をさがそう	市川	武志	四四
夜の川	一森	さとし	四五
朝はくるくる 朝が来る	伊藤	あい	四六
むねびこ	いとう	彩	四七
月待ちの滝	伊藤	勝雄	四八
ああ 浅間焼け	伊藤	彰二	四九
にげみず	伊東	ひろし	五〇
愛しい余韻	伊能	絵巻	五一
愛海ちゃん	井上	裕允	五二
団塊ロマン	井上	ゆうき	五三
さくらの花が咲くように	伊武	トーマ	五四
朝露の宿	入来	英一	五五
光善寺…血脈桜	岩白	かつこ	五六
夫婦人生夢街道	岩間	佳子	五七
人生一途	植村	正	五八
人の言葉に	鶴水	いさお	五九
愛の香り	笛吹	とみ子	六〇
望郷景色	梅垣	政之	六一
酔心	榮次	郎	六二
男の念い酒	えんどう	要	六三
罪の華	及川	莉代	六四
写真機	大賀	たかし	六五

しろつめ草	大原 愛	六六
好きでいたい	大前裕子	六七
恋はかけ引き	大宮一郎	六八
人生いろ色(カラーの心)	丘 まり子	六九
おもいで北千住	岡 みゆき	七〇
北国一人旅	小川 豊	七一
秋が来る	奥 雪義	七二
翌檜坂	小口 幸重	七三
涙色の雪	小山内 圭	七四
北ひとり	おさべ あさ	七五
涙の花	織田 まり	七六
「情熱の嵐」ジューテーム	織田 右京	七七
奥方『異本・鍵の権三重帷子』 <small>おくがた やり こんかみえなび</small> 近松門左衛門より	甲斐 新	七八
パープルタンゴ	開 まこ	七九
涼・貴船川	加 乙 梁	八〇
いつから ふたり	KASUMI	八一
哀しみの渚	片桐 和子	八二
心の火つけ人	勝田 守	八三
孤 舟	加藤 けい子	八四
あすの夢浜頓別	かとう 通流	八五
北のエレジー	金井 ゆきお	八六
男 花	金谷 怜沙	八七
紫の太陽	神里 美和子	八八
鬼 瓦	川 英雄	八九
青いあさがお	かわいだ けんいち	九〇
ジブラルタルの最後の夜	川 島 条	九一
別れ酒	川村 一希	九二

シルクロード幻想	神崎陽一	九三
かたかごの花	芳三知余	九四
晩秋海峡	岸田のぶや	九五
かずら橋	北村けいこ	九六
どこ行くの	北村直之	九七
テレビの前から旅に出る	北吉伸伍	九八
回文ふるさと歌の駅伝	貴船たぐし	九九
下田恋情話	木村賢司	一〇〇
お遍路の旅路	京光恵	一〇一
十八鳴浜	霧野ゆう	一〇二
銀鱗酒場	工藤通昭	一〇三
一葉十三夜	久仁京介	一〇四
風の盆有情	くに多樹夫	一〇五
凍京	國枝星志	一〇六
人生カタカタ	カタツムリ	一〇七
男の夢	倉卓也	一〇八
親子漁師船	倉藤有道	一〇九
母恋い新盆さま	栗原保夫	一一〇
哀愁の角館	黒皮羽生	一一一
マグロ船	黒川良人	一一二
男は育つ	黒崎慶子	一一三
八丈船祝い	小泉金三	一一四
ONDO・八木節	高坂のぼる	一一五
99歳花	小串波夫	一一六
ディナーショー	小島香澄	一一七
ああ汽笛に泣かされて	小嶋高志	一一八
ネモフィラの風	古田土恵子	一一九

津和野路の君へ	小宮 えり	一一〇
天	小宮 正人	一一一
親父(おやじ)	小雪 めぐみ	一一二
しばらく。	近藤 英子	一一三
雪が降る夜の	紺野 あずさ	一二四
かくれ湯けむり	斉藤 清人	一二五
冬の船	さいとう 大三	一二六
面影橋 II	齋藤 力	一二七
蕺草の花	斉藤 葉月	一二八
残 月	斉藤 向恵	一二九
警女哀歌	五月女 正人	一三〇
命の絆	坂口 君代	一三一
パパって甘えていいですか?	坂本 寿美子	一三二
とびの涙	佐倉 陽子	一三三
恋 蛩	さくら 龍	一三四
都心を少し 一寸だけ	櫻井 馨	一三五
日本昔話より つる女房	佐々木 ひさこ	一三六
路地の雨	笹森 とおる	一三七
無名の外野手	佐東 たどる	一三八
人生マーチ	佐野 源左衛門一文	一三九
まつしぐら	澤田 芳生	一四〇
裏 窓	山 吾 充 六	一四一
戻ってきてよ	椎名 英威子	一四二
ムーンライト カフェロワイヤル	汐 咲 まどか	一四三
逢いたくて	紫 香 賢 治	一四四
薄紅の恋	しば ともなり	一四五
鷺羽山慕情	島 勝 興	一四六

哀しみの渚	島	馨子	一四七
越前未練町	島	洗一	一四八
蓮如抄	嶋	八郎	一四九
櫓太鼓	清水	たかし	一五〇
レンゲのブランコ	下野	登美子	一五一
乙女心巻き戻し	白石	明仁	一五二
愛のいろ	白簾	慶子	一五三
だから…お願い	城岡	れい	一五四
寝屋子の島	城山	正志	一五五
川越城下町	菅野	政義	一五六
坂の道	助田	ひさお	一五七
風の子守唄	鈴川	信也	一五八
なみだ橋	鈴木	紀代	一五九
人生ほどほど	鈴木	信子	一六〇
ハートマークはピンクです	鈴木	はるか	一六一
宝くじだよ人生は	鈴木	康正	一六二
なにわトンボ	須田	厚子	一六三
歌…その愛	捨	大吉	一六四
俺の道	首藤	隆充	一六五
洗い屋	砂川	風子	一六六
ひまわりの花	春原	茂幸	一六七
七丁目のおんな	せを	はやみ	一六八
ピストンパンチ	関	東西	一六九
こころ歌	関	口義明	一七〇
この先急に雨が降る	瀬端	健次郎	一七一
かっぱうぎ	仙	孝緒	一七二
望郷情歌	曾我	幸義	一七三

それが母の愛なのか	田浦泰	一七四
花ぼうろ　　～霧氷の宿～	たかたかし	一七五
親	高丘よしと	一七六
女浜唄：わかれ唄	高城のぼる	一七七
夜想曲	高田れい子	一七八
夢遍路	高塚和美	一七九
海鳴りの町	高橋耕作	一八〇
おやじ酒	高橋敏夫	一八一
アカシアが泣いている	高島 じゅん子	一八二
渚の鎮魂歌 <small>なみさきのレクイエム</small>	多岐川 大介	一八三
紫陽花の歌	たきの えいじ	一八四
たとえゴーストでも	たくわん	一八五
九頭竜川	たけ 美	一八六
よされ津軽の俺 <small>わだ</small> の里	田沢庄 笹	一八七
岬のマリア様	田島隆 夫	一八八
愛をありがとう	建石 一	一八九
あなたとならば	田中 いぶき	一九〇
つれそい坂	田中なるみ	一九一
哀愁しぐれ	たなか ゆきを	一九二
麗良の湖	谷口文彦	一九三
みちのくの青空 <small>そら</small>	たにはら 伸	一九四
雲	多野 亮	一九五
東京スカイツリーの詩	玉利 要	一九六
遠花火 <small>とほはなび</small>	田村忠雄	一九七
むさし野暮色	千秋かな	一九八
ふたたびの男	千草三紀	一九九
わたし脇役　はまり役	ちくし 次郎	二〇〇

あきらめながら	辻	正司	二〇一
微笑 <small>ほほえ</small> み	つじ	伸一	二〇二
能登 <small>ののと</small> の浜唄 <small>はまうた</small>	津田	雅道	二〇三
恋 <small>こひ</small> の華 <small>はな</small>	つのかわ	圭介	二〇四
絆 <small>きずな</small> 船 <small>ふね</small>	つわの	光路	二〇五
万葉 <small>まんやふ</small> 忘れ路 <small>じ</small> の旅 <small>たび</small>	出口	タツ香	二〇六
恋時雨	てしがはら	じろう	二〇七
双 <small>さむ</small> 振り	寺島	幸生	二〇八
酒と前金	天馬	良	二〇九
ツルの希望 <small>ゆめ</small>	戸川	智砂子	二一〇
送り火	飛田	多恵子	二一一
獅子 <small>しし</small> の鬘 <small>たてがみ</small>	富岡	慶信	二一二
詩 <small>うた</small> 魂 <small>こころ</small>	富松	正義	二一三
好きやねん大阪	外山 <small>とやま</small>	尚 <small>ひさ</small> 子 <small>こ</small>	二一四
今はこのまま	鳥羽	貞子	二一五
感 <small>かん</small> 謝 <small>しゃ</small>	長澤	あきら	二一六
星 <small>ほし</small> になりたいブルース	ながた	恵秋	二一七
薩摩 <small>さつま</small> 杜 <small>とう</small> 氏 <small>じ</small>	ながた	じょうじ	二一八
京 <small>きやう</small> の夏	長塚	京子	二一九
おふくろ波止場	中村	勲	二二〇
門 <small>かど</small> 出 <small>で</small>	那須野	巖	二二一
人生舟	仁井谷	俊也	二二二
前 <small>まへ</small> を向 <small>む</small> いて歩 <small>あ</small> こう	西井戸	学	二二三
昭和 <small>しやわ</small> の女	西田	ただすけ	二二四
ころろ花	西平	としこ	二二五
今夜 <small>こんや</small> の君 <small>きみ</small> は帰 <small>かえ</small> りたくな	西村	忠一	二二六
なでしこ夢花 <small>(応援歌)</small>	西山	和風	二二七

天の恋	西脇 求	二三八
私の子守歌(妻に捧げる歌……)	沼田 落葉	二二九
養老桜	NO MOSS	二三〇
鍵 靴音	野沢 冬子	二三一
女の別れ旅	のべひろし	二三二
秋のしらべ	羽澤 文子	二三三
望郷演歌	橋本 和郎	二三四
美術館の庭	橋本 真寿美	二三五
独 路	ハチャン・K	二三六
花の舞妓はん	華木 かおる	二三七
幸福とんぼ	羽場 新一郎	二三八
津軽瞽女	林 伸	二三九
OKINAWA	林 利紀	二四〇
甌島郷土串良移住	原 伸二	二四一
愛・まだ途中	原 文彦	二四二
愛さずにいられない	美山 明葉	二四三
命 ありがとう	平井 歩果	二四四
恋の花々	平井 健一	二四五
清姫・狂恋	平山 貴容子	二四六
La la la love in you	弘 せりえ	二四七
おんな 春団治	廣 澤孝彦	二四八
下根性いっぽん	風 雅也	二四九
恋は陽炎	福山 しゅん	二五〇
円通寺 音頭	藤 浦 讓	二五一
爺々のなみだ	藤岡 和子	二五二
夜汽車	藤崎 光	二五三
大阪の女やもん	藤本 純幸	二五四

恋のライセンス	藤本尚子	二五五
手紙	藤安五月男	二五六
芸人ぐらし	平誠三朗	二五七
女の舞台	星合節子	二五八
千島海峡	星川成一	二五九
きつと誰かが	堀内和香	二六〇
幸せさがし	堀江重吉	二六一
恋便り	梵天丸	二六二
良寛さん晩年の恋物語り	本間正成	二六三
まんまる	槇映二	二六四
ちいさな白い花	牧野おさみ	二六五
冬物語	松井眞佐子	二六六
ふりだしの街	松尾江里也	二六七
人生音頭	松尾博之	二六八
ふたりの福寿草	松尾ゆきを	二六九
あなたのふるさと	松野捷夫	二七〇
雪つり橋	松原かおり	二七一
はつ恋	松原高久	二七二
お前を探して札幌へ	松本撰子	二七三
いそしぎ	円恵介	二七四
出会いの中で	真矢とし子	二七五
こころの始発駅	丸山八留男	二七六
ほれほれ浮かれ節	まんだあつこ	二七七
涙の地平線	三浦康照	二七八
親父	美貴裕子	二七九
時雨の酒場	三木政和	二八〇
平成説教節	美貴史明子	二八一

ナミダのメモリー	三	岬	みこ	二八二
諸行無常	三	岬	坊真明	二八三
おんな恋挽歌	三	里	こうじ	二八四
スペイン坂のマリア	水	木	れいじ	二八五
西国観音まいり	水	嶋	彩木	二八六
風が止んだら	水	野	鮎子	二八七
北切符	み	ずみ	隆	二八八
酒は お前と	美	手	けんじ	二八九
絆は永遠に	南		早苗	二九〇
相模の夜よ	み	ね	隆	二九一
伊那路の旅	峰		八朗	二九二
恋悪魔	み	ね	ゆきと	二九三
おんなの歳月	峰		よしを	二九四
ふたつのバトン	峰	崎	林二郎	二九五
三陸エレジー	宮	崎	のぶを	二九六
義兄弟かもめ	み	やの	舞	二九七
生きものたちの愛	宮	原	哲夫	二九八
菫が峠	美	山	香	二九九
神代桜	深	山	大仁	三〇〇
新たな絆を育んで	武	笠	和夫	三〇一
寒 椿	村	上	文恵	三〇二
ゆりかもめ	茂	木	けんじ	三〇三
紅葉宿	本	橋	夏蘭	三〇四
白い鉛筆	森	下	かおり	三〇五
懐旧「仙台湾」	諸	江	一朗	三〇六
伝えたい願いーアキナへメッセージー	矢	坂	秀司	三〇七
焦がれて相模川	山	上	はるお	三〇八

ふたりの人生五十年(金婚祝記念)……………	八卷	功……………	三〇九
愛娘「あき」……………	山	里幸平……………	三一〇
月の港……………	山	田孝雄……………	三一〇
ありがとう友よ……………	山	田那津子……………	三一〇
しぐれ宿……………	山	田博康……………	三一三
故郷よ……………	大	和正雄……………	三一四
大阪の夜……………	山	本ユリエ……………	三一五
僕だけの宝物……………	Y	u k a……………	三一六
月桃の花……………	湯	川れい子……………	三一七
手をつなごう 前を向いて歩ごう……………	ゆ	きちかげ……………	三一八
おんな…湯の里 かじか橋……………	ゆ	ら悦子……………	三一八
あしたは晴れる……………	由	梨恵子……………	三二〇
サンセット ラブ……………	横	森葉子……………	三二一
電話帳……………	吉	川徳子……………	三二二
ふたりの旅路……………	吉	田静江……………	三二三
おんな川……………	連	達人……………	三二四
土の華……………	若	松かつ子……………	三二五
母さんの手のひら……………	綿	木義昭……………	三二六
淡墨桜……………	渡	辺 螢雪……………	三二七
ちよつと ちよつと……………	渡	辺 久士……………	三二八
東京新宿なみだ街……………	わ	たなべ 泰彦……………	三二九

題 字

星 野 哲 郎

表紙絵

湯 川 れい子

あしたの詩
あしたの詩

月下美人 げつかびじん

藍 慶子

儂ほがない運命さだめの 哀かなしき揺ゆれる

二度とは咲かない あゝ花に似て

月のあかりに 匂におう肌

燃えたあの夜の 情なさけは夢か

美し過ぎた 美し過ぎた

愛しいお前は 幻の花

一と夜の逢あ瀬せに いのちをかける

男の心を あゝ今もなを

せめる優やさしさ いじらしさ

白いうなじが ふるえていたね

美し過ぎた 美し過ぎた

愛しいお前は 幻の花

逢あえない女ひとゆえ なおさら恋し

この胸香かれよ あゝ艶あでやかに

幾いくよ夜待まちわび 狂くるおしく

便とり途とだえた 面影探あやみす

美し過ぎた 美し過ぎた

愛しいお前は 幻の花

東京ベイ

A
U
N

波間にぼっかり無重力

浮いてる男と女が二人

男と女が二人なら

しめて三人無重力

いくら好きでも抱くときゃ一人

座れる椅子は一つだけ

なにを語るか東京ベイで

三角定規の角と角

女房になった女には

世間体という意地がある

女房になれない女には

世間を見返す意地がある

どちらの意地も波の上

ゆらりゆらりとさだまらず

沖ゆく船をながめつつ

男の顔をぬすみ見る

東京ベイの出口は一つ

一緒に出るしか道はない

愛のセレナーデ

青木圭介

I love you

広い世界に ただひとり
ふたり初めて 出会った夜は
苔生すレンガの スナックだった
そつと優しい ほほ笑みくれた
貴女きみに捧げる 愛のセレナーデ

I need you

何があるうと 離さない
辛い悲しい 昨日の恋は
真夏のスコール 忘れてほしい
貴女きみが涙を 流した胸に
虹を架けるよ 愛のセレナーデ

I want you

衿の小さな ほくろさえ
街の灯りも もう眠るのに
さよなら言えない ふたつの心
肩を抱きしめ 見上げる空で
星も唄うよ 愛のセレナーデ

迎え送り火

青木勇一

あの日を迎^{むか}へ 故郷^{ふるさと}に
浴衣^{ゆかた}すがたの 子供たち
線香花火に はしゃぐのは
星のきれいな 盆の夜
叱^{しか}つてくれた 父ちゃんの
拳^{こぶし}が今では 懐^{なつ}かしい
涙一粒 夏の夜^{よる}
父ちゃん 灯火^{ともしび} つけようか

夏の夜空を 飾^{かざ}るのは
彩^{いろど}り染まる 大花火
あの日の父ちゃん 肩^{かたぐるま}車
あれは八月 盆踊り
夜店で綿あめ つまんでは
大きくなれよと 抱^かき上げた
揺^よれるろうそく 夏の夜^よに
父ちゃん 天から ささやいた

しかってくれた 父ちゃんの
拳^{こぶし}が今でも 懐^{なつ}かしい
涙^{なみだ}で出会う 夏の夜^{よる}
父ちゃん送り火 つけようか

空きかんたちのレクイエム

明石真帆

哀しい知らせが　ボクらの耳に
入ったその日は　七五三

散歩のかたわら　ポイ捨て空きかん
拾ってくれてた先生が　天に召された

ありがとう　ありがとう　やすらかに
我が子をはさんで　宮参り

遠いこの日を　夢見つゝ
永久とわの旅立ち　なさったのでしよう

先生　空から　見えるでしょうか
小金井公園　散歩道

コーヒーかん太と　オレンジかん子を
再び逢わせた思い出の　四季の公園
待ってます　待ってます　樹々たちも

恋しい足音　今もなお
蝶や小鳥に　姿変え
時に遊びに　来てくださいね

返り咲く　返り咲く　天国で
見えても届かぬ　かすみ草
けれど今度は　神様が
胸に抱かせて　くださるでしょう

くまちゃん

赤坂 佳津子

くまちゃん
なつかしい くまちゃん 会いたいね
あなたは今 風になつて
吹き渡つて いるかしら
それとも夜空の 星になつて
輝いてくれて いるかしら
もういちど 会いたいよ

くまちゃん
なつかしい くまちゃん 会いたいね
あの頃ふと 思い出して
大声で 呼んでみる
互いの希望など 語り合つて
気がつけば 朝が来ていたっけ
夢でいい 会いたいよ

数多の苦勞を嘸氣にも出さず
三人の子供は、それぞれ医師に・・・
京都、東山時代・・・青春の日々
貴女に会えた幸運に感謝し
友として誇りに思い
限らない愛と尊敬を捧げます

(旧姓熊谷 故高村悦子さんに捧ぐ)

愛の青春譜

茜
まさお

あの空の下 故郷ふるさと偲べば
よみがえる 愛がある
今…青春 いつまでも青春
新しい旅立ちは これから
あたしは あなたのもの
あなたは あなたのもの
果てない 人生を歌えば
虹色の 花咲く空は

愛の青春譜

あの雲えがく 母の似顔絵に
花びらが 風に舞う
今…青春 いつまでも青春
巣立ちする鳥たちは これから
誰にも すがらないで
翼を 広げて翔ぶ
どんなに 辛くても歌って
あの海の 故郷めざす

愛の青春譜

あたしは あなたのもの
あなたは あなたのもの
手を取り たずさえて歌えば
幸せの 湧き立つ空に

愛の青春譜

大川四季ごよみ

秋篠さと

岸の桜は 娘の笑顔
ほんのり恥らう 紅の肌
土手の賑わい ふとすれ違う
様子いい人 どの誰
追って行きたい エー
春の言問 気をもめる

浴衣たもとに 涼風入れて
駒下駄鳴らして 向島
粹な姐さん ほのかに残す
忘れられない その香り
簾が邪魔する エー
夏は屋根舟 宵あかり

そぞろ歩きは 永代こえて
両手を合わせる 神社
三味の音色が 流れる路地で
いなせ若い衆 酔い気嫌
男冥利の エー
秋の深川 月見酒

橋の欄干 人差指で
いとしい名を書く 雪化粧
思い出します 隅田の風に
初春の芝居の 直次郎
恋の三千歳 エー
冬の入谷は あのあたり

若い季節の頃

秋
原
美
眞

蒼い時代には 星に願って
未だの眩しさを 眺めていたな
不安や悩み 背負っていても
何とか成ると 何時も思ってた
若い季節は 友の助けで

都会の風は 馴染み辛くて
冷たい声に 逃げてみたな
ひとつの夢が 生きてく糧で
挫折乍らも 人生を辿った
若い季節は 母のお蔭で
涙が虹を 虹を架けてた

青年の盛りは 命知らずで
無茶な勇気で 大怪我したな
酒場の嬢に ぞっこん惚れて
失恋た夜は 死にたくなった
若い季節は 父の支えで
涙の空は 空は晴れてた

遠退く青春は 色鮮やかで
まるで昨日の 事のようにだな
古い下宿に 名残り惜しめば
昭和の歌謡が 胸を過ぎった
若い季節は 人の情けで
涙で花が 花が咲いてた

センチメンタル ヨコハマ

麻 こよみ

港の灯りが にじんで揺れて

胸の寂しさ 写し出す

あなたの優しさ 退屈ですと

傷つけ別れて きた私…

センチメンタル ヨコハマ 公園通り

幸せを あの頃 気づかぬままで

想い出ばかりが あふれる街を

逃げることさえ できなくて

あなたの笑顔に 包まれながら

腕組み歩いた 赤レンガ

センチメンタル ヨコハマ 大栈橋よ

浜風が 吹き抜け あふれる涙

あなたの心の どこかにどうぞ

今も私が 居て欲しい

あなたに出会える はずもないのに

似たよな背中を 探す夜…

センチメンタル ヨコハマ 関内あたり

幸せを あの頃 気づかぬままで

俺の海峡

麻木夢子

恋の混乱カオスよ なぜ抱いだく

蒼ざめた 時代遅れの純情を…

性懲りもなく なぜ欲しいしょうこ

羽毛はねのような 女ごころの気まぐれを…

ああ言ってくれ 奴隷どれいになれと

誇りプライドは とつくに捨てた

遠すぎる あの女人ひとは

夜もざわめく 俺の海峡

夢の愛人アマンよ なぜ微笑わらう

ヒロインの 芝居がかった流し眸めで…

手招きながら なぜ逃げる

弄あそばれる 男ごころを知らないで…

ああ言ってくれ 好きなら好きと

それだけで 權オールドが漕こげる

遠すぎる あの女人ひとは

迷い舟曳ひく 俺の海峡

ああ言ってくれ 好きなら好きと

それだけで 權オールドが漕こげる

遠すぎる あの女人ひとは

春の幻影まぼろし 俺の海峡

リュウジ二月十四日

浅野 淑恵

切り通しの 長い坂道を

ふわふわふわり 白い雪んこが

寿司屋の屋根 古びたスナック

ふわふわふわり うすい雪んこが

渡せない リボンのチョコをかかえて

思い出つまった 店 // 宝さく // へ

レモンサワーが 胸にすっばいよ

仲間たちや ファアンに愛されて

育つていくね 若い三代目

もしもいつか 辛い日きたなら

包んであげよ そつと遠くから

私なぜ 女に生まれたんだろ

男に生まれて くればよかった

お酒いっしょに 飲んで酔えるもの

私なぜ 女に生まれたんだろ

男に生まれて くればよかった

カルアミルクが 今日ほしよっぱいよ

「マスター お願い！」

もう一度リュウジをうたつて…

三代目Jソールブラザーズにかんぱーい」

雨降りに

飛鳥 美勇樹

雨降りに……

迎えの無い子の 淋しさを

思い出します お母さん

傘越しに 見返れば

校舎にもたれて うつぶいていた

雨降りに……

あの日の あの子に 会えました

空高く……

さえざる雲雀が 降りてきて

麦の畑の 巣に入る

ぴーぴーと 麦笛を

鳴らして道草 学校帰り

ランドセル……

小さな 肩にも 慣れた頃

雨の日の……

手作りパンの 美味しさは

骨身惜しまぬ 母の味

畑仕事 お休みの

温もりいたたく 雨の日でした

雨降りに……

あの日の あの子に 会えました

午前一時の男と女

東 正明

女が泣いた 夜でした

静かに抱いた やさしさに

夜の女が 遊びでも

うれしかったの あのしぐさ

午前一時の 男と女

も一度抱いて ほしかった

二人の明日は ないものを

夜の女の 夢でした

そうよ女の 夢でした

午前一時の 男と女

二人で描いた 浮世絵に

別れの雪が 降っている

やさし過ぎたの にくいほど

やるせないのよ その想い

午前一時の 男と女

ふるさとへ帰りたい

アベ・イチロー

夕焼け雲を 見た日には

たまらなく ふるさとへ帰りたい

あの人この人 すれ違っても

都会は 人間の心が通わないから

「生きる事に 疲れた時は

いつでも 帰っておいでよ」

お袋が 田圃で呼ぶ声きこえるよ

夕焼け雲を 見た日には

たまらなく ふるさとへ帰りたい

渡り鳥を 見た日には

意地を捨て ふるさとへ帰りたい

お下髪のある娘と 別れた駅で

誓った 男の夢はかなわないけど

「堪え切れず 泣きたい時は

わたしの膝で 泣けばいい」

あの娘が 川原で呼ぶ声きこえるよ

渡り鳥を 見た日には

意地を捨て ふるさとへ帰りたい

「明日の灯り 見えない時は

我が家で休んで 出直せ」

親父が 炉端で呼ぶ声きこえるよ

流れ星を見た夜は

たまらなく ふるさとへ帰りたい

たまらなく ふるさとへ帰りたい

指ゆびの詩うた

阿部則夫

親の恩知る 親指に

人の情けの 人差し指よ

夫婦めおとの中持つ 中指に

病やまいの時の 薬指

恋の始まり 絡める小指

揃い踏みだね 五本の指よ

一日一度は 手を合わせ

願う幸せ 十二支じゅうにの月日

主役演じる 親指に

まとめ役なら 人差し指よ

仲間を束ねる 中指に

傷口ふさぐ 薬指

遊び心の 可愛い小指

握る拳に 力がこもる

掴んで見せるぞ 大きな夢を

上げる両手に 希望が見える

指の詩うただよ 五本の指の

鬼になるのか ジャンケン遊び

大人も子供も 笑顔がいいね

元氣百倍 この指とまれ

未練雨

天 達 美代子

涙のしづく 手のひらに
残るあなたの 映し絵が
消しても消しても ついてくる
深い想い出 握りしめ
逢いたいよ 今一度いまいちど
願う女の 未練雨

せめて晴れ間の ひと時に
虹を渡れば 逢えますか
女心のおんなこころ せつなさを
解らないでしよ 貴方あなたには
逢いたいよ もう一度
祈る女の 未練雨

浮雲に乗り 何処どこまでも
私の心 届わたしけたい
あなたの残り香 この部屋に
偲しのぶ想いは 幻まぼろしか
逢いたいよ 今一度いまいちど
すぎる女の 未練雨

『ゴメンネ』

彩

一、 涙こぼれる 夜ふけには

探して回る 想い出

終わった恋も 捨てた愛も

たぐり寄せて 悪ふざけ 『ゴメンネ』

ひとり部屋で 笑って

幸せごっこ したいの

愛してる？

愛してるよ

流れて落ちる 淋しさ

二、 泣き明かした 夜明け前

隠して回る 想い出

未練の恋も ひきずる愛も

みんな忘れて ちぎって 『ゴメンネ』

ひとり部屋で 笑って

強がりながら いたいの

愛してる？

愛してるよ

流れて落ちる 悲しさ

こころをき
寿出船

荒川利夫

今日の僖よき日を 祝いわつてくれる

空はまぶしい 日本晴れ

寿港の 拍手の波が

終ることなく まだ続く

幸せの…その中を

ヨイシヨ ヨイシヨイ 愛しあつての

旅ごよみ

なにながあろうと これから先を

繋つなぐ命の 助け愛

寿港の 想い出連れて

旅を始める 武者震い

大海の…波しぶき

ヨイシヨ ヨイシヨイ 浴びて行く身に

虹が立つ

男ひとりか 枯れるか咲くか

それは内助の 匙さじ加減かげん

寿港の 良い風受けて

祝うかもめが 群れて跳ぶ

浮雲を…友達に

ヨイシヨ ヨイシヨイ 腕を組んでの

旅ごよみ

笛吹き紋蔵

荒木 都与雪

切った男に 恨みは無いが

かかる火の粉は 払って生きる

男、紋蔵 血煙ぬぐい

笛に手を添え 夕焼け空へ

念仏代わりに 小諸追分

静かに上る 浅間の煙

若い頃から あて物上手

宰さいの目を読み 名前が知れる

男、紋蔵 お江戸を離れ

秋の信濃路 脇差ひとつ

さびしさまぎれに 笛吹き込めば

千曲の流れ 音色に合わす

日照り続きの 年月としつき続き

人の心も 世間も荒れる

男、紋蔵 月夜に向けて

鳴らす笛ねの音 すすきを揺らす

涙で聞き入る 参る人々

いつかは晴れる 忘れた夜明け

はまなす情話

安藤美津子

海を見つめて 泣いてます

紅いはまなす 恋の花

嵐にのまれて 帰らぬ人を

荒波かぶって 呼んでいる

強く 強く 咲いてても

夫婦めおとのイカ船 恨めしい

夢を失くして 三年忌

紅いはまなす なみだ花

哀しみ纏って 愛した人の

名前を書いても 波が消す

風に 風に よろけても

浜辺に掴まり 咲いてます

季節いくたび めぐつても

紅いはまなす いちぢず花

群れ飛ぶかもめよ 伝えておくれ

あなたにひといろ一色 この想い

星が 星が 見えぬ夜も

命を燃やして 耐えてゆく

一本勝負

井口けいじ

怒涛逆巻く 日本海

挑むところが また燃える

オンボロ船で 七難八苦

血筋受け継ぐ 意地がある

男一匹 玄海灘で

勝つも負けるも 大あばれ

血気盛んな この俺も

惚れた女房にや 勝てやせぬ

切り火に賭けた 女の思い

しかと受け止め 天下獲り

漁師一筋 九州男児

西へ東へ 夢を追う

親にもらった この命

無駄にするかと 空を見る

晒しに巻いた 初孫写真

ぐっと握って 糸を引く

男度胸の 一本勝負

今日も大漁 夢を見て

瀬戸内旅情

生駒 かつゆき

夢を見ましよう 貴男とともに

金波・銀波の さざ波うけて

寄り添うふたりを カモメが祝う

親もゆるさぬ この恋だけど

明日へ旅立つ 瀬戸内旅情

人の出会いは 不思議なものね

一目見たとき 芽生えた恋に

心のそこまで とことん炎える

愛のゆくえを まさぐりながら

波にゆられて 瀬戸内旅情

生命重ねる 絆の糸は

辛いときほど 我慢に耐えて

浮き世の荒波 乗り越えましよう

岬 灯台 幸せ灯かり

抱いた望みも 瀬戸内旅情

俺にまかせろ

勇 福子

表面かざるな 男の人生を

なにも恐れる ものではない

黙にして通す 誠の道を

意地を守るさ

一意専心 おれにまかせろ

骨のずいまで 男であれと

他人のいたみが わかるおれ

命の道の 足跡のこす

難行苦行

一写千里 おれにまかせろ

心すてるな 夢にかけよう

運を開くも おれの手で

まわり道せず 一本道を

歴史つくるさ

一騎当千 おれにまかせろ

加越能えれじ

イザワ マサミ

初な恋です やまぬ夜は

月も惑う もがい橋

死ぬほど惚れて なぜ抱けぬ

もどかツバメの まだあげそめし

粹かえろに濡れます 加越能えれじ

繭なになるまで 添しない寝して

夢ゆめに悶もえた 姿しなのひと

交まじわす命いのちは 男おとこ波なみ乞こい

よがれツバメの まだあげそめし

思おもい染しめます 加越能えれじ

恋こひの山路やまぢは 気色きしきばむ

たけて思おもいが はせぬなら

いっそあの世よで 現ま身に

乾ひら涸かツバメの まだあげそめし

秘ひめて巡めぐらす 加越能えれじ

衣替え（ころもがえ）

石原信一

梅雨の晴れ間の　こんな日は
箆箭の着物　入れ替えましょう
床に広げた　紺飛白
そろいで二人　仕立てた浴衣
衣替え　衣替え
まぶしい季節が　暦に來ても
花火をながめた　あなたはいない

庭のあじさい　一枝を
かんざしだよと　あなたはくれた
そんな静かな　幸せに
甘えたままで　暮らしていたわ
衣替え　衣替え
いつかは季節が　心を変えて
別れが來るとは　知らずにいたの

少し涙を　溜めながら
去年の浴衣　片袖通す
急に鏡の　向こう側
あなたの影が　映ったような
衣替え　衣替え
ふたたび季節が　訪れるなら
あなたは夏の日　戻るでしょうか

別の心で プカリプカリ

石原弘見

ふるさとを 手を取りあつて

二人で でたときは

虹はすぐに つかめそうで

つかめなかった

ビルの谷間を さまよい歩けば

俺という 数千人

お前という 数千人

別々の心が 流れてゆく プカリプカリ

別の心で プカリ

不器用で 生き方かえて

二人がみた夢は

舟の上に おいたままで

すててしまった

誰か名前を 呼ぶ声さがして

俺という 漂流者

お前という 漂流者

別々の心が 泳いでゆく プカリプカリ

別の心で プカリ

ふるさとに 花咲きほこり

岸辺になつかしき

顔をみれば 手を取りあい

涙あふれる

友よゆるせよ としつきはなれて

俺という 数千人

お前という 数千人

別々の心が 帰ってゆく プカリプカリ

別の心で プカリ

かたり酒

泉 美子

飲ませてよ 思いきり

夢の欠片に 騙されて

そんな私が 馬鹿でした

思いのままに 別かれましょう

悔しさだけの 愚かなわたし

今夜はお酒に 酔い知れたいの

酔わせてよ 思いきり

嘘を承知で 騙されて

そんな私が 馬鹿でした

忘れたいのよ 過去の面影

飲むわ酔わせて 悲しい酒を

今夜はお酒に 酔い知れたいの

酔いたいよ 思いきり

悔いを残さず 捨てました

そんな私が 馬鹿でした

酔って忘れて 夢が有る

時間が貴男の 思い出だけが

今夜もお酒に 酔い知れたいの

幸せの花の舟をさがそう

市川武志

二人で腕を 組みながら

花を摘みます バラの道

恋のトンネル 潜り抜け

私の愛は あなたに

あなたの愛は 私に

幸せの 花の舟を さがそう

紋白蝶の 恋の舞

風に吹かれて 何処へ行く

夢の雫の 落ちるとき

私の愛は あなたに

あなたの愛は 私に

幸せの 花の舟を さがそう

夜空の星を 数えては

秋の夜長を 堪えています

いつかあなたの 胸の中

私の愛は あなたに

あなたの愛は 私に

幸せの 花の舟を さがそう

夜の川

一 森 さとし

冬の寒さに 身をすくめ
広瀬川の川辺に 降り立てば
ヒユウ、ヒユウ、ヒユル、ル・風がなき
おんなの未練 また募る
愛したあの日の 温もりを
あああ…少し返して…夜の川

いつか逢える日 夢見ても
空しい月日が 流れてく
ヒユウ、ヒユウ、ヒユル、ル・風がなき
恋しさ増して 悶え泣く
貴方がなぞった 指あとを
あああ…思い出させる…夜の川

めぐりあわせの ふたりなら
離れることなど あるまいに
ヒユウ、ヒユウ、ヒユル、ル・風がなき
真の愛も ちぎれ飛ぶ
背中で送った あの日から
あああ…悔いと涙の…夜の川

朝はくるくる 朝が来る

伊藤 あい

歌を唄おう 夕陽の中で
踏まれた草でも 芽吹く春の日に
好きな道なら 茨の径でも
いいさいいのさ 辛くない
光きらきら 希望をつれて
朝はくるくる 朝が来る

幼な頃から 大きな声で
唄うが大好き 夢のかけらさえ
いつか婆ちゃん やんやの手拍子
忘れられない 思い出も
光きらきら 夢などつれて
朝はくるくる 朝が来る

石につまづき ころろの傷も
未来あしたを生きてく糧に 糧になる
おつなものだよ 谷間に咲く花
そして身の丈 知ったなら
光きらきら 幸せつれて
朝はくるくる 朝が来る

むねびこ

いとう 彩

山に響くのが やまびこなら
胸に響くのは むねびこ

「元気でいろよ 頑張れよ」
別離の言葉は ただポツリ
今でも私の

それは むねびこ…

人の別れなら もう慣れたよ
なみだ枯れるほど 泣いたよ

「元気でいろよ 頑張れよ」
あれから何年 たったのか
今でも私の

それは むねびこ…

むねびこよ むねびこよ
もしも遠くへ 帰るなら

伝えておくれ あのひとに
私はまだまだ 元気だと
家族に囲まれ

幸せになったと…

月待ちの滝

伊藤勝雄

山背は時雨しぐれか 奥久慈の
逢瀬おうせをしのぶ 滝もみじ
もみじ恋の葉 花いちもんめ
はぐれて三年 たずね宿やど
愛があと追う 想いで川は
影を手さぐる 女の未練
わたし旅人：月待ちの滝

紅色みだれる もみじ苑
月待ち滝は 晩秋ときめいて
きしむ水車すいしゃの 水音かなし
羽根にからんだ いのち水
押し下さい 嵯峨草水車さががらみ
くずれそうです ひとりの夜は
月のしずくか：月待ちの滝

嵯峨草そば打ち 水車小屋
心をゆする 落とし水
愛が積荷なませの 生瀬なませの川で
一緒に着きたい 貴方ひとがいる
蔦つたをからませ ぐぐりを抜けて
情けひと色 奥久慈情話
森の白糸しろいと：月待ちの滝

あ あ 浅間焼け

伊藤彰二

(セリフ)

天明三年浅間焼けと言う、浅間山の大噴火がありました…。

オラをおろして お啓は逃げる

背で母様 又わびる

目指す鎌原 観音堂へ

命結んだ 背負い紐

天明三年

母娘絆に ああ浅間焼け

逃げろ叫びも かき消す噴火

空に黒煙 駆けのぼる

谷間集落 鎌原襲う

ドドドワチワチ 火砕流

上州孀恋

母娘目にする ああ地獄絵図

お父助けて 助けて菩薩

迫る熱風 息詰まる

やつと石段 煙の中に

あえぐ一步に 灰が降る

観音菩薩よ

母娘命に ああ灰が降る

にげみず

伊 東 ひろし

夏の陽射しの 激しさに

強いあなたの 面影を

追って掴めぬ にげみずの

幸せくれた 男ひとだから

どこまでも どこまでも 追いかける

届いてほしい わたしの わたしのこころ

追えば追うほど にげみずの

強いあなたは 先を行く

道の長さに 挫けずに

幸せさがす 女です

いつまでも いつまでも 追いかける

届かぬ愛の わたしの わたしの運命さだめ

愛がはげしく 燃え上がる

道の陽炎 夏が行く

募るおもいは 増すばかり

恋に堕ちてく 運命さだめなら

どこまでも どこまでも 追いかける

愛しき人よ わたしの わたしのあなた

愛いとしい余韻よゐん：

伊能 絵巻

人さし指で 鼻をつぶして

道化おどけてみせる 優しいあなた

顔をしかめて やぶにらみして

笑わせようと 追いまわされて

誰にもだれにも ゆずれない幸せ

あの日の海に 奪われました

* 過去の「うた」の字に 丸は付けない

せめて点々：みつつの後に

愛しい余韻 のこさせて *

そうよ貴方は 死にはしないわ

海のもくずに なる男おとこじゃない

さあ笑わせて また笑わせて

鼻をつぶして 顔をしかめて

優しく優しく 抱きしめてもう一度

貴方は生きる 私の胸に

ゝ (くり返し)

まなみ
愛海ちゃん

井上裕允

愛海ちゃんは今日もまた
ひとり入り江を見つめては
行方不明になっている
パパ ママ 妹 三人の
家族の帰りを待っています

家族が津波にさらわれて
波の飲まれて行った時
愛海ちゃんだけ偶然に
背中のリュックが魚獲る
網に引っかかりました

内陸部に住むばあちゃんが
うちおいでと言うけれど
「ママを待つの」と愛海ちゃん
決して海辺を離れずに
毎日入り江を見つめます

避難先では愛海ちゃん
覚えたばかりの平仮名で
「おげんきですか いきてると
いいね ままへ」とお手紙を
書きかけ眠っておりました

愛海ちゃんは今日もまた
ひとり入り江を見つめます
「パパから電話くるかな」と
携帯電話を握り締め
ひとり入り江を見つめます

団塊ロマン

井上 ゆうき

目覚時計めざましに飛び起きて ひとり苦笑い
どうしたの… 早いよね…

まぶしいような エプロン姿

忘れていたよ 何もない朝を

庭に咲く あゝ花さえも

川沿いのコスモスが 風にたわむれる

立ちどまり… 振りかえり…

子供のような おまえの笑顔

行き交う人の 誰よりもずっと

かがやきに あゝ染まる頬

定年これからに乾杯を すこし照れるけど

ありがとう… うれしいよ…

出逢いの頃が ワインに揺れる

覚えているよ はじめてのキスを

酔うほどに あゝあざやかに

さくらの花が咲くように

伊 武 トーマ

さくらの花が 咲くように
意味より思い つたえたい
風に向かって 咲くように
弱さを強さに 変えて――
この痛みが 悲しみが
いつか微笑みと なりますよう
いのちといのち つなぎたい

さくらの花が 散るように
真っ直ぐ前を 向いていたい
ひとりしずかに 散るように
素直なところ 忘れずに――
この瞬間を 大切に
ふたたび花が 咲きますよう
いのちのかぎり 輝きたい

花のいのちは 短くて
春はあまりに 切なくて
一期の風に はらはらと
散る花びらに 涙して――
いまここにいる 生きている
あなたへ思い とどけたい
さくらの花が 咲くように

朝露の宿

入来英一

ひと夜抱かれた やさしさに

女の仕合せ 知りました

こころ燃えます 弾じけそう

なさけ重ねた 夜だもの

忘れられない 朝露の宿

いっそこのまま つゆの宿

二人で寄りそう 秋しぐれ

遠く聞える 露の音が

なぜか切なく さみしくて

夢も濡れます 朝露の宿

朝の明りが 眩しくて

何にも言えない 私なの

そつと貴方に 身をまかせ

別れまつね かなしいね

肌が冷たい 朝露の宿

光善寺…血脈桜

岩白 かづこ

口上台詞

昔、むかしそのまたむかし、遙かに遠い江戸の時代

北の城下町松前松城、光善寺の庭に植えられた一本の桜

平成の世の今なお咲きつぐ血脈桜の物がたり…

夢かうつつか枕辺に 桜模様の衣の女人

(和尚さま明日私は伐られる命、どうか私に血脈を下さいな血脈を…)

(そうか そなたは明日伐られるはずの老桜か寺の改修と云えど

むききよのーこのお札をもってゆきなされー)

すがる女人の目に涙…

胸に血脈のお札を抱え もろ手を合わせ 和尚さまあー

桜化身の女人 ま夜の闇路に消えてゆく…

朝の光りの寺の庭 お札に埋もれたひと本の桜

(皆の衆みましたかお札が桜樹に あれは血脈のお札ですぞー)

(皆の衆この桜は仏縁か 若しくは戦乱の世の明日に咲き継ぐ命の花

まさに血脈桜よのう)

息のむほどにゆらめいて…

庭師の胸も早鐘の如く 伐るのをやめて なむあみだぶつ

血脈桜の女人よ 永久のいのちを光善寺に…

巡りめぐりて陽を透いて うす紅いろの花びらを零す

(時代は流れて三百余年の光善寺の庭 美しい桜じやのー)

(平成の今もなお 尋ねくるあまたな人を和ませて

次の世もその又次の世も 咲いてくださいよー)

いのちの桜よ永久に咲け…

時空を超えきて今も風にまう いとしき花よ 血脈桜よ

※幾千年のいのち 永久にあれなと祈ります…

() 台詞 ※くりかえし

夫婦人生夢街道

岩間佳子

ひとりひとりは 弱いけど

力合わせりや 強くなる

浮世の苦勞を 一緒に耐えて

夢を増やした すこしずつ

お宝子宝 家宝いえ

夫婦人生 宝船

所詮女の 倅せは

男次第で 決まるもの

自分で選んだ 人なのだから

ぐちや悪口 云い合って

山あり谷あり 九十九坂つくも

夫婦人生 長い道

つらい思い出 あればこそ

明日あすに希望のぞみが 見えてくる

浮世の雨風 一緒に受けて

お前と二人 夢街道

ひと花ふた花 宝花

夫婦人生 花が咲く

人生一途

植村 正

男おとこと生まれて 来たからは
何なんと言いわれようが 一花夢ひとばなを
たった一度の 人生ならば
幾多の苦難に ものともせず
奮うらい起たたせて 奮うらい起たせて
遠とほい俤しあわせ今も 人生一途

泣なきごとひとつも 吐つかないで
肝かんに命いのちじて 咲さかせてみせる
悔くいのないよに 命いのちのかぎり
為なさねばこの胸 男おとこがすたる
明あ日を夢ゆめみて 明あ日を夢ゆめみて
辿たどるこの道みち今も 人生一途

只ただだひたすら 明日あしたに生き
希のぞ望みたやさず この身みにかけて
こころ行くまで 一途いちずにずっと
生きてる限りは でっかい夢ゆめを
命いのち尽つくまで 命いのち尽つくまで
明日あしたに繋つなげて今も 人生一途

人の言葉に

鶺鴒 水 いさお

雲の流れる向こうに

人は幸せも求めて生きてゆく

どんなに辛い出来事も

背中を丸めず伸ばして

関わり会った人の言葉に

励まされ 励まされ 励まされ

有難う 有難う 有り難う

ふさぐ日々が続くとも

時は刻々流れて往き去って

涙が愁いを解してゆく

荒波もいつか凧となり

関わり会った人の言葉に

癒され 癒され 癒され

有り難う 有難う 有り難う

真っ当に生きていれば

目映い朝日が射してくる

生かされる喜びしみじみ

前に向かって 前に向かって

関わり会った人の言葉に

満たされ 満たされ 満たされ

有難う 有難う 有難う

愛の香り

笛吹 とみ子

あなたと過ごした幾年月が

ドラマの中のヒロインのように

甘い生活に満たされていた私でした

二年が過ぎた秋別れを告げ家を出たあなた

愛の日々が砂山のように崩れた今、知った

あなたの愛を求められるだけの馬鹿な私に

信じ過ぎた愛は幻と消えて

※琥珀色のワイン酔うあの人の写真：

あの時のままの笑顔が 何も無かったように

愛の香りを残して：

季節の移りを 愛しむように

幸せだった日々を振り返る今

私の我儘を笑って聞いてくれたわ

陽だまりの様なあなたとの愛が恋しくて

想い出のかげら抱きしめ涙枯れるまで泣いて

尽くす事とを忘れ甘えるだけの馬鹿な私に

信じ過ぎた愛は幻と消えて

琥珀色のワイン酔うあの人の写真：

あの時のままの笑顔が 何も無かったように

愛の香りをのこして：

望郷景色
ほうきょうげしき

梅垣政之

この海は
故郷に続く海
灼けた前浜 小走りに
はしゃいで泳いだ 水戸口あたり
指折り待った 浦嶋神社の
祭りの太鼓が 耳もとに
ひびく気がする 望郷景色

この風は
故郷へ微ぐ風
本庄田圃は 黄金色
ねきには一筋 布引きの滝
山路を行けば 木通が熟れて
椎の実拾った 日暮れ道
鐘が聞こえる 麓の寺の

あの雲は
故郷へ向う雲
外は裏西 鉛色
霧が来そうな 鰯起こし鳴る
冬山駈けて 兎を追えば
かじかむ手足が凍みてくる
眠る山並 望郷景色

この花は
故郷を偲ぶ花
そこで見ていた 何もかも
今年も咲いたか 幾山桜
ふる里離れて 幾年月が
慕情を募らす この頃は
夢にまで見る 望郷景色

酔^{すい} 心^{しん}

榮 次郎

呑んで 〱 涙する

お酒よお前は 無情^{むじやう}の水か

遠い過去^{むかし}の 心の傷を

チクリ チクチク 呼び起こさせる

そして今夜も お酒^{おまえ}と一緒に

酔って 〱 あー又 涙する

呑んで 〱 呑み明かしや

電信柱^{でんしんばしら}の カラスが嘲笑^{わら}う

どうせ儚^{はかな}い 人生だから

チビリ チビチビ 酔いしりたいよ

だから朝まで お酒^{おまえ}と一緒に

酔って 〱 あー又 はしご酒

呑んで 〱 夢の中

たまにや笑って あ^この女の夢を

そんなお酒を 吞ませておくれ

ゆらり ゆらゆら 面影浮かぶ

今日もみちづれ お酒^{おまえ}と一緒に

酔って 〱 あー又 夢に舞う

男の念おもい酒

えんどう

要

なんで好このんで おまえを捨てよう

しあわせ祈いのった 仕打ちじゃないか

胸をさすのさ はやりの唄が

俺の心を 歌うよで

誰たれが知ろうか 誰たれが知ろうか 男おとこの念おもい酒

今もおまえが 死ぬほど好きさ

一緒にいたんじゃ 不幸になるさ

好きな女が できただなんて

辛い嘘まで ついたのさ

誰たれが知ろうか 誰たれが知ろうか 男おとこの念おもい酒

うぶなおまえにや 笑顔が似合う

染そめたくないのさ 世間の垢かで

泣なっているだろ 恨うらんでるだろ

酔よえばグラスに 浮かぶ影

誰たれが知ろうか 誰たれが知ろうか 男おとこの念おもい酒

罪の華

及川莉代

この両手に 抱えきれない

咲かせた花は 罪の華

人に紛れて 宿で落ち合う

あれは鞍馬の 火祭りの夜

※燃えさかる焰 それより緋あかい

情念の花 また 一輪

終りのない 愛を信じて

咲かせた花は 罪の華

寄せ合う肌が なぜか淋しく

残り火揺れて 別れの予感

※あなたという花 どこに飾ろう

実らぬ愛が また一輪

※くり返し

写真機

大賀 たかし

カメラ屋さんの 飾り窓

眩しく輝く 二眼レフ

母さん内緒で ごめんねと

新聞積んで 自転車漕いだ

配達帰りに いつも寄る

カメラに街の灯 滲んでた

内職疲れ 母さんに

言い出せないまま 迷ってた

小学校^{がっこう}帰りに 店に寄り

新聞積んで 自転車漕いだ

ようやく手にした 年の暮れ

笑顔の母さん 撮影^{うっつ}したよ

母さん空から 見えるだろ

可愛い顔した 子供達

無邪気にはしゃいで 膝の上

新聞積んで 自転車漕いだ

あれから何十年^{なんねん} この写真機^{カメラ}

家族の幸せ 見つめてる

しろつめ草

大原 愛

白く可愛い しろつめ草に

あの日の弟 あの姿

思い出させる そよ風が

幼いあの声 ねえちゃんと

生きていたなら 今も呼ぶ

遠くに聞こえる 汽車の音

土に汚れた 小さい指で

わたしに作った くび飾り

汗をぬぐって 花を摘む

飾ってくれたの 忘れない

道のはしにも 春に咲く

遠くに浮んだ 雲ふたつ

今は野原は もうないけれど

この目とじれば その中に

いつもあの日が よみがえる

遊んでつかれて おんぶした

生きていたなら 逢えるのに

遠くに聞こえる 汽車の音

好きでいたい

大前裕子

お店に来るたび やさしくされて

甘い涙が にじんでくる

グラス合わせて 酔いしれながら

あなたに寄り添い 夢をみる

わたしらしく 死ぬほど尽くしたい

あなたが人生 聞かせてくれる

うれし涙も ふいてくれる

弱いわたしの 心の傷が

ぬくもり感じて 夢をみる

わたしらしく 死ぬほど尽くしたい

力をかしてね わたしにあなた

苦い涙は 忘れたいの

愛の深さが 笑顔でわかる

あなたを信じて 夢をみる

わたしらしく 死ぬほど尽くしたい

恋はかけ引き

大宮一郎

男はドアを 締めるとき

なんでコートの襟立てる

こころの奥の 浮気ぐせ

隠しきれない こぼれ花

季節はずれの 〱 黒揚羽くろあげは

着物の襟を かけ合わせ

髪かみを手櫛てしで 整ととのえて

男をとかす その肌で

道を狂くるわす やさしさで

待つひとよの一夜ひとよの 〱 月見草

男は未練 引きずって

竹たけを女をは ぱつと割り

おみくじ結むすぶ 朱しゆの鳥居

恋こひのかけ引き 一二三いちふたみ

二人弾ひじける 〱 鳳仙花

人生いろ色（カラーの心）

丘 まり子

赤の好きな人は 熱い言葉を かける人
バラのような 愛に燃えて あなたを追いかける

青の好きな人は 知性の海に 泳ぐ人
空のような 未知の世界 時には逃避行

黄色好きな人は 無邪気な鳥に 変る人
レモンみたい すっぱい刺激 求めて戯れる

紫好きな人は キレイな自分 好きな人
藤の誘い 高い心 不思議な感を持つ

人生色々 いろいろな人

白の好きな人は 素直なうえに お人好し
雪のような 清い愛で 汚れを隠すのよ

ピンク好きな人は 愛されたいと 願う人
開花しても 三日坊主 咲いてはいられない

黒の好きな人は 言うこと聞かぬ 強い人
闇のような 見えぬ世界 自ら飛び込むの

オレンジ好きな人は 晴ればれひとり 騒ぐ人
灯りみたい 笑顔光る みんなの人気者

人生色々 いろいろな人

おもいで北千住

岡
みゆき

路地にこぼれる 赤い灯が

想い出映す 北千住

放せばすぐにも はぐれそな

あなたの背中 つかんでいたわ

心があの日を 待ち続けてる

ひとりのわたし 夜風が誘う

千住新橋 荒川で

おまえが好きと 云ったひと

指先静かに 胸にふれ

忘れられない 女にしたわ

わたしでよけりゃと つくしもしたわ

別れるなんて 知りもしないで

蔵や銭湯 まだ残る

離れられない 北千住

むかしの姿 変えながら

一途な夢も 消すのでしょうか

夏から秋へと 陽が傾いて

想い出たどる お酒になるの

北国一人旅

小川 豊

あなたのために 身を引くと
ゆがんだ文字の 置き手紙
にじむ涙の 跡を見て
俺は心に 決めたんだ
おまえをさがす 一人旅

おまえのここが ふるさとか
函館山は 雪化粧
二人一緒に 帰る日を
夢に見たのに なぜ消えた
おまえをさがす 一人旅

うわさの糸も 切れそうな
釧路の町は 霧の中
酒場づとめを してるとか
待っていてくれ 逢えるまで
おまえをさがす 一人旅

流水とけぬ オホーツク
宗谷の春は まだ遠い
寒くないかい さいはては
抱いてやりたい 今すぐ
おまえをさがす 一人旅

秋が来る

奥　　雪　　義

あわす両手の　花びらに

花が人の手　似ていると

秋が来たって　いいじゃない

みやま
深山高原　色変り

季節風吹く　流れ風

心いやしに　秋が来る

白い花咲く　みちのくに

地震津波に　なくなられ

青いコンテナ　船流れ

人も逆流　のまれてく

あわす両手に　涙散る

心やすらか　眠ってね

もみじ楓も　茜色

夏のあつさに　おとなしく

耐えた身体に　やさしさと

秋が心を　つつみ込む

忘れさせたら　愛が来る

心大きく　秋が来る

翫あす檜なろ坂ざか

小口幸重

子供の頃に 描いた夢は
追えば叶うと 人は言う
命を賭けても 叶えたい
俺のころの 翫あす檜なろ坂ざかを
いつになったら 越えられるだろ
涙をばねに がんばり抜こう

俺の生き方 笑ったやつに
見せてやりたい 意地がある
弱音を吐くなよ 挫けるな
急がずあせらず 力をためろ
今日がだめでも 明日があるさ
根雪の下で 耐え抜く心

いつか世に出て 檜ひのきになるぞ
決めたこの道 まっしぐら
最後に笑える 人になれ
俺を励ます 翫あす檜なろ坂ざかは
人の誠を 咲かせる春が
片目を開けて 待ってる坂だ

涙色の雪

小山内 圭

深々と深々と 降る雪よ

なんと哀しい 景色でしょう

まるでわたしの 心のように

結べぬ糸に 身を縛り

信じた愛ゆえ もどかしく

涙色した 雪が雪が

雪がつもります

深々と深々と 降る雪の

白い簾に 月おぼろ

衣の乱れに 吐息もみだれ

静寂の中で 夢に酔う

夜も蒼褪め 気兼ねすりや

涙色した 雪が雪が

雪がつもります

深々と深々と 降る雪が

赤い糸なら 泣きません

見えぬ明日に 情念も揺れて

手櫛で梳いた みだれ髪

あなたの優しさ 怨みます

涙色した 雪が雪が

雪がつもります

北ひとり

おさへ
あさ

七日降らせて えぞ梅雨あけて

釧路に咲いた 檜扇ヒナウサアヤメ

愛をなくして 未練に泣けば

濡れるこの胸 さす傘もない

そぞろ歩きの 北ひとり

夢を信じて 一途に走り

添えない人に なおさら燃えた

燃えて女の 命もあげて

あとに戻れぬ この恋ひとつ

さだめ はかない 北ひとり

西の山の端は 茜あかねに暮れる

卯うの花くたし 終った富良野

なのに晴れない 心の中の

忘れられない あなたをつれて

明日をさがそう 北ひとり

涙の花

織田まり

夢を失くした わたしです
望みかなわぬ わたしです
生きるとは つらいけど
生きていかなきゃ なりません
下を向かずに 上だけ向いて
いつか 涙の花よ 咲け

いつも折れそな ころろです
泣いてばかりの ころろです
運がないと 嘆くけど
運を活かせぬ 自分です
泥にまみれて 汗水たらし
いつか 涙の花よ 咲け

たったひとつの いのちです
親にもらった いのちです
癒えぬ傷も あるけれど
癒せなくても 歩きます
雨にうたれて 嵐をぬけて
いつか 涙の花よ 咲け

「情熱の嵐」 ジュテーム

織田 右京

ジュテーム・ジュテーム・わたしのすべてを

ジュテーム・ジュテーム・抱きしめて

枯れ葉舞う夜の舗道には 情熱の熱い砂漠の嵐

二人して 夢の奥深く 溶けてゆく赤い薔薇ゆれて

* 耳もとで囁く 愛の詩

何故かしら なみだ溢れる

ジュテーム・ジュテーム わたしのすべてを

ジュテーム・ジュテーム 抱きしめて

酔いしれてふたり行く旅は 情熱の甘い砂漠の世界よ

二人きり毎夜愛し合う 染めてゆく赤い薔薇ひとつ

耳もとで囁く 愛の詩

幸せに 私を酔わす

ジュテーム・ジュテーム わたしのすべてを

ジュテーム・ジュテーム 抱きしめて

* くりかえし

奥方 『異本・鍵の権三重帷子』 近松門左衛門より

甲斐 新

雨の 明け方 武家屋敷

哀れ おさめは 座敷牢

『お助け致すぞ 奥方 すぐに…』

『権三 そなたも 危ういに…』

不義の 疑惑を 掛けられたまま

元禄 出雲を逃れる 影ふたつ…

俄か 夫婦に 身を窶し

よると 崩れて 寂れ宿

『辛抱下され 奥方 暫し…』

『権三 あたしを 抱いとくれ…』

此処で 契れば 鬼畜と墮ちる

屏風仕切れば 悶々 夜が白む…

何処へ 逃げても 妻敵と

追手 ひとひた 身に迫る

『そのお身体では 奥方 とても…』

『権三 討たれて 死にましよう…』

京の 雪降る 伏見の橋に

遙かな 出雲を 見返りや 雁帰る…

パープルタンゴ

開
ま
こ

紫の薔薇 闇に香らせ

今夜も来ない 貴男を想えば

虚しくひびく 誘惑のタンゴ

夢でもいいの 踊り狂いたい

燃えてくくタンゴ パープルタンゴ

熱いこの身を 闇に溶かして

燃えてくくタンゴ 切ないタンゴ

この深い想い 貴男だけに

貴男の好きな シヤネルの香り

たとえば愛が よみがえるように

わかれの予感 ふきとばすタンゴ

激しく堕ちた 想い出胸に

燃えてくくタンゴ パープルタンゴ

心は闇でも 踊れば溶けます

燃えてくくタンゴ 刹那のタンゴ

この深い想い 貴男だけに

燃えてくくタンゴ パープルタンゴ

熱いこの身を 闇に溶かして

燃えてくくタンゴ 切ないタンゴ

この深い想い 貴男だけに

涼・貴船川

加
乙
梁

赤い提灯 火が灯りや

川のせせらぎ 良く似合う

川床料理の 涼しさに

旅の疲れも 流れゆく

想いの宿の 貴船川

表参道 灯籠の

ゆらゆら灯火に 迎えられ

つないだ手と手の ぬくもりが

胸の心を 熱くする

二人を撮^うす 貴船川

白く吹き出る 龍水は

人の心を 清めます

貴船神社の 水占^{うら}み

水に浮べて 吉を待つ

想い出乗せた 貴船川

いつから ふたり

K A S U M I

いつからだろう どうしてだろう

このごろの ふたり

髪を切ったの 香水変えた

口紅も 変えて みたのに

あなたの瞳に 映らない

なにより 寂しいのはね あなた

もう夢を語る ふたりがない

いつからだろう どうしてだろう

このごろの ふたり

夢を追いかけて 走った日々が

恋しくて 訊いて みたのに

あなたの耳には 届かない

なにより 悲しいのはね あなた

もう愛がほしい ふたりがない

なにより 寂しいのはね あなた

もう夢を語る ふたりがない

哀しみの渚

片桐和子

ハイヒールを 脱ぎ捨てて
いきなり駆けた 子供の様に
頬の涙を 見せたくなって
胸の鼓動が 苦し過ぎる

君は後から 追いかけて
振り向きざまに 抱き締められた
何も言葉で 伝えられない
風が一瞬 全てを止めた

※愛しても愛しても まだ足りない
愛しても愛しても 結べぬ運命
哀しみは哀しみは 海に流して
哀しみは哀しみは 白い貝になる

これが最後 ドライブも
振り出した雨 歩道を濡らす
二人の夢を 消しさる様に
絡めた指に 愛が流れ

海沿いの町 遠ざかる
車を止めて 最後のキスを
何も言葉で 伝えられない
時も世界も 全てをとめて

※くり返し

心の火つけ人びと

勝田 守

湯あがり化粧 ほんのりと

ゆらゆら燃える 心です

今宵こよい貴方あなたと 二人だけ

愛いとしく強く 抱きしめて

貴方あなた心の 火つけ人びと

私の心 火がついて

ゆらゆら燃える 女の火

今宵も消して 下さいね

愛いとしく強く 抱きしめて

貴方心の 火つけ人

紅肌べにはだは映えて 爪つめ立てて

情じじょうの深さは 愛いとしさよ

今宵波うつ 灯ともしびを

強く優しく 抱きしめて

貴方心の 火つけ人

孤舟こしゆう

加藤 けい子

数え切れない まわり道
他人行儀の ひとひらを
素肌にまとう 折節おりふしは
孤舟こしゆうせん詮無せんい 独り寝ねの
歳月重ねた 意地いぢが嘆なく
切ない見栄を 裏返す

初めて出で会あった 街角の
すずらん灯が 暮れなずむ
互たがひいの境遇みちは ちがつても
胸むねの内蔵うちくら 同じ彩色いろ
片手を挙げて 速足の
うしろ姿が 消えた夜

広いふところ 思い遣やり
やっとなつに 為なれたのに
影も残さず 逝なつたひと
孤舟こしゆうは迷まよう 泪川なみだ
輪廻の契りは ゴールドの
形見に誓い 生きて行く

あすの夢浜頓別

かとう 通流

岸辺を離れ 海原に
漂う流水 春まだ遠い
子育て終えた 白鳥の
北へ旅立つ その日は近い
ここは最果て 荒波しぶき
海明け間近 舟人たちの
こころ高鳴る 浜頓別よ

いにしえびとの 砂金掘り
昔を偲ばす 石垣のあと
原生花園 目を覚まし
咲くはすぐらん 黒百合の花
海はそよ風 おくれ毛ゆれて
クローバーの丘 希望の鐘は
恋にやさしい 浜頓別よ

大沼小沼 手をつなぎ
夕日に輝く クツチャロ湖畔
カムイ岬の 風の中
ひとり佇み 夢見るあした
時は流れて 戻らぬけれど
豊かな恵み 溢れるいのち
あすの夢呼ぶ 浜頓別よ

北のエレジー

金井 ゆきお

津軽海峡 ひとり行く

恋が切ない 女の旅路

海猫が啼いてる 甲板に立てば

あなたの面影 波間に浮かぶ

潮風も身にしむ ああ 北の海

薄い縁と 諦めて

添えぬ宿命の 儂い恋は

忘れなさいと チャペルの鐘が

やさしく響くよ 侘しい胸に

ここは函館 ああ 港町

つらい涙も 漂泊も

今日で終りの 私の旅路

北の大地よ マリモの湖よ

さよならエルムよ 札幌の街

明日は明るく ああ 生きてゆく

男 花

金 谷 怜 沙

風にあおられ 散るようじや

咲けはしないさ 春の花

夢と根性 根っこにためて

いつか大きな 花になる

咲かせてみようか この蕾

夢という名の 男花

後ろ振り向きや 遠くまで

めげず、くじけず 来たものだ

シーソゲームの 世の中さ

俺が昇れば 誰かが沈む

咲かせてみようか この蕾

夢という名の 男花

我慢辛抱 諦めず

花の咲く日を じっと待つ

ままにならない 浮世だけれど

力、下さい この俺に

咲かせてみようか この蕾

夢という名の 男花

紫の太陽りら ていだ

神里美和子

名残りも惜しそに 暮れゆく空の

はにかみ顔の 紫の太陽りら ていだ

雲から雲へ かくれんぼ

おもわず私 声ははずませ

空に向かって Vサインフイ

シャッターチャンスを のがしはしない

海面の浮雲みなも 朱々とあかあか

染まりしそばの 紫の太陽

はずかしそうに 横むいた

いつもと違う 君に出会えて

踊る心で Vサイン

シャッターチャンスを のがしはしない

東の空に 月灯り

西空見れば 紫の太陽

彩どり添えし 浮雲の

ときおり描くえが 舞は華麗でまい かれい

私おもわず Vサイン

シャッターチャンスを のがしはしない

鬼 おに

瓦 がわら

川 英雄

嘯 かみ付きそうな 顔 かほしてさ

夜空見上げる 鬼瓦

爺 おやちゃん婆 ばあちゃん 探 たづせるか

父 ちちちゃん母 ははちゃん 見 みつけたか

篠 しの付 けく雨 あめを 飲 のみ込んで

季節 きせつはめぐり 冬 ふゆ隣

ぎよろ目の涙 なみだ もらい泣 なき

じつと我慢 ごまんの 角 つの出 でして

爺 おやちゃん婆 ばあちゃん 聞 きこえるか

父 ちちちゃん母 ははちゃん 見 みえるかい

息子 こゝろと嫁 よめの傑 たけ作 さくが

今 いまでは俺 おれの 宝 たから物

眉 まゆ間の瘤 こぶに 赤 あかとんぼ

つがい止 とどまれば 笑 わらい顔

爺 おやちゃん婆 ばあちゃん 建 たて増 まして

父 ちちちゃん母 ははちゃん 暮 くらしてた

大 だい正 せい昭和 平 へい成 と

我 われが家 いへを守る 鬼 おに瓦

青いあさがお

かわいだ けんいち

ここには赤い　そこには白い
花を咲かせる夢でした
二人で借りたアパートの
二人でつくる朝顔の棚
出かける前の水かけが
とても　とても　とても
楽しかったわ　春の朝

ここには赤い　そこには白い
花が咲いてるはずでした
つぼみをつけたあさがおの
花は　すべてが青い色
顔を見合す私たち
笑い　笑い　笑い　笑い
笑い転げた　夏の朝

ここにも青い　そこにも青い
花が咲いてた朝でした
どこか不安な胸騒ぎ
夏にあらしが来ることは
ずっと前から感じてた
なぜか　なぜか　なぜか
悲しかったわ　秋の朝

ここには私　そこには貴方
愛のもつれた夢の跡
いまは一人で暮らす部屋
いつか貴方の思い出を
私　笑顔で話します
春が　春が　春が　春が
きつと来るわと　冬の朝

ジブラルタルの最後の夜

川島 条

届いた訃報握りしめ

夜霧をついて訪れる

シレネの白い優しさよ

テラスに凭れ 歌いだす

爪弾く夫を 肩越しに

美しそれは「冬の旅」

ジブラルタルの最後の夜（ル）

貨物の耳の耳飾り

そろそろシヨも跳ねるだろう

真赤な沓に履き替えて

再びひとり歌いだす

乱れる髪を搔きあげて

菩提樹遠く思いだす

ジブラルタルの最後の夜（ル）

ジブラルタルの最後の夜（ル）

ジブラルタルの最後の夜（ル）

別れ酒

川村一希

死んでも一緒と 愛されて
いたわり歩いた 道なのに
何故です無情に 解けていく
明日の幸せ 見たいから
どこにいるのよ 帰ってよ
酒よ お前と ふたりでさ
飲むだけ飲んで 叫びたい

綺麗に咲いてる 花にさえ
無情の雨風 なぜ叩く
青空 陸なら 尋ねたい
愛はいずこで 彷徨うの
今日もあなたは 帰らない
酒よ お前と ふたりでさ
泣くだけ泣いて 唄おうよ

後振り向かない 生き方に
待っても帰らぬ 偲び夜は
儂い夢よと 諦めて
今度何処かで 出逢っても
運命 月過ぎ 旅の人
酒よ お前と ふたりでさ
最後の涙 別れ酒

シルクロード幻想

神崎陽一

緑酒に月を 映しつつ
ぐっと呑みほす 夜光の杯
月のしずくの なみだ酒
二度と逢えない 離別た友と
風が哭き 砂も舞う
幾たりか 人の歩んだ絹の道
人骨のみが 道しるべ……

西域の旅 馬上杯
紅き血の酒 珍蛇の酒
天にしずくを 弾こうも
知る人もなし 胡笳の音
月に語り 風が聴く
幾たりか 人の歩んだ絹の道
砂に埋もれた 夢街道

雪の崑崙 瑠璃の空
栄枯盛衰 刹那の露
はるかいにしえ 夢の中
砂塵蹴散らす 汗血の馬
時を駆け 空を跳び
幾たりか 人の歩んだ絹の道
イキゾチズムと 死の香り……

かたかごの花

芳かんほし

三知余ちよ

春と云うのに 雪が舞う
山の斜面に ひっそりと
小首かshげて 寒むそうに
咲いてうっすら 紅色べいごそまる
誰を想って 咲くのでしょうか
春告げ草の かたかごの花

紅べいの色さえ 儂ぼんくて
なぜに哀しく 散り急ぐ
焦がれ焦がれた 人なのに
知っているのに 知らない素振そぶり
誰を恨んで 泣くのでしょうか
春告げ草の かたかごの花

風に優しく そよぐ花
揺れる想いも 今日限り
待っているのに 来こない人
泣いて忘れる この恋悲し
誰に別れを 告げるでしょうか
春告げ草の かたかごの花

※かたかごの花

かたくりの花の別名です

晩秋海峡

岸田のぶや

船の汽笛は 海峡越えて
夢に私を 呼びにくる

あなた あなたね… あなた
手さぐりすれば

忘れられない 愛しい人の
声がおんなの 身体をゆする
泪 泪 泪の 晩秋海峡

肌を凍てつく 夜更けの海は
彩も藍染め 冬 曆

どこに いるのよ… どこに
あなたの船は
港うわさを 鷗に尋ね

夢に夜汽車で あと追うのです
飛沫 飛沫 飛沫の 晩秋海峡

ひとつ寝床に 枕をふたつ
そつとならべて 夢をみる

あなた あなたね… あなた
せめてもひと夜

いつも待たせて ごめんと行って
抱いてほしいの 男の胸に
吹雪 吹雪 吹雪の 晩秋海峡

かずら橋

北村 けいこ

ばかだなしっかり掴つかまれと
言われてあなたにしがみつく
不思議ねこんなに細い木が
みんなを支えているなんて
ユラリゆらゆら 奥おく祖い谷やの
揺れてやさしい かずら橋

早瀬を歩いて渡るよな
人生でしたね若い日は
一息ついてもいいですか
ご褒ほう美びみたいな紅もみじ葉じです
ユラリゆらゆら 祖い谷や川の
水も染まってる あかね色

どんなに苦しい時だって
あなたがいたから頑張れた
まだまだ頼たのむっていいですね
年輪重ねて生きましよう
ユラリゆらゆら 奥おく祖い谷やの
絆絆嬉しい かずら橋

どこ行くの

北村直之

微笑^{ほほえ}み顔で肯いて

切りたい髪を縊^よってます

何かを得ることは何かを失うこと

わたし片手の花ですか

捨てない言い訳まき散らし

あなたは帰る怯^{おび}えた背^{せま}で どこ行くの

いつまで待たすつもりなの

遅咲^{けし}き芥子^{けし}は深恨^{おん}み

何かを得ることは何かを失うこと

黒い花粉は好きですか

陰花咲かせた夜なのに

あなたは帰る振り向きもせず どこ行くの

あの女性^{ひと}どうかしないなら

埋^うもれ火すねて弾^{はじ}けます

何かを得ることは何かを失うこと

しびれきらした明^あくる間は

名乗って出る影知らぬげに

慾^{おぼ}ばりあなた今夜も帰る どこ行くの

テレビの前から旅に出る

北吉伸伍

刑事ドラマの 悪役ワルで

テレビの中を あなたは走る

夢を叶えて 良かったと

つくづく私 そう思う

※もう…あの酒場みせで あの駅で

そう…この東京まちで この部屋で

あなたを待つことは ないでしょう

だから私は 勇気をもって

テレビの前から 旅に出る

あなたらしいわ その役は

五年も待った 女を捨てる

辛い場面も 良かったと

つくづく今は そう思う

もう…あの笑顔 あの仕事

そう…この写真 このパジャマ

あなたの想い出は 過去のもの

だから私は 勇気をもって

テレビの前から 立ち上がる

※くり返し

テレビの前から 旅に出る

回文かいぶんふるさと歌の駅伝

貴船きふね たゞし

〈スタート〉北海道

積丹しきだん 尻しり やし 二セコにせこ (五色温泉背せに)
函館はこだて 尻しり は 戸井とゐ の糸いと
利尻りしり 振り尻ふりしり 富良野ふらの 裸婦はだかめ
釧路くしろ 宜よろ しく 日ひ の出で の陽ひ
養老ようろう (牛温泉うしのおんせん 売う ろうよ 羅臼らうす (温泉おんせん 己うぢ)
銀婚ぎんこん (湯ゆ 婚儀こんぎ 湯本ゆもと (温泉おんせん 燃ゆも)
湯ゆ の川がわ (温泉おんせん 香か の湯ゆ 川湯かわゆ (温泉おんせん 和歌わか)
カルルス (温泉おんせん 縷る 縷る か ウトロうとろ (温泉おんせん 問とう)

幸福こうふく 風子ふうこ いこい 乞こ い
静内しずない 鱒ます 寿司すし 美瑛びえい 海老えび
昆布こんぶ 手文庫てぶんこ 泉随いずみずい
東雲しののめ の熨斗のし 幸さい さ
森町もりまち マリモ 天塩てんしお して
後静しりしず 知りし 清見きよみ よき
樽川たるがわ 歌留多かると 恵庭えにわ に絵え
当麻とうま で舞ま うと 江差えさし 冴さ え

〈ゴール〉沖縄県

注…全国47都道府県の〃回文ふるさと〃作詩完成

「まさかさかさま」回文かえりは、上下どちらから読んでも同じ言葉。
北海道から沖縄まで全国47都道府県の地名・温泉名を回文で歌い継ぐ。

下田恋情話

木村賢司

唐人お吉の 一生を

運命さだめ辿たどつて 日が暮れる

生い立ち知るほど 哀かなしくて

心が感動うごく ひとり旅

下田みなどは 涙雨

海風いざなう 散歩道

歴史浪漫が 生きている

ふたりに歩けば もたれ道

人情ばなし 恋ばなし

心ゆらゆら 出来るのに

白砂青松 寄せる波

流す涙が 海になる

恋してふたたび 訪ずれて

ふたりの花を 咲かせたい

下田みなどは いつも春

お遍路の旅路

京 光 恵

白い衣装に 身を包み

何を思うて お遍路道を

険しい岩場 登り来て

只ひたすらに 只ひたすらに

光輝く大師の御跡を 慕いつつ

南無大師 遍照金剛

お遍路の旅路 同行二人

瀬戸の夕陽に 頬染めて

四恩十善 祈りの道を

行者の身おぼ 岩陰で

そつと見守られ そつと見守られ

光輝く大師の御跡を 慕いつつ

南無大師 遍照金剛

お遍路の旅路 同行二人

肩に舞い散る 春の雪

心悩みを 捨てにと来てと

連絡船が 行き通う

只ひたすらに 只ひたすらに

光輝く大師の御跡を 慕いつつ

南無大師 遍照金剛

お遍路の旅路 同行二人

くぐなりはま
十八鳴浜

霧野ゆう

風が鳴く 海が鳴く

十八鳴浜の 砂が鳴く

女心を 憐れむように

キユキユキユ キユキユキユと 嘆き唄

あの人は 波の果て

私を置いて 旅立った

待っても戻らぬ 人だから

カモメ心を 連れてつて

ヒュールル ヒュールル 悲しさが

恋しいあの人 追って飛ぶ

恋が散る 夢が散る

十八鳴浜に 明日が散る

女心に ひっそり咲いて

涙枯らした 嘆き花

あの人を 呼んでいる

闇より深い 波の果て

愛され愛した ふたりです

早くおいでと 呼んでいる

ヒュールル ヒュールル 悲しさが

恋しいあの人 追って飛ぶ

銀鱗酒場

工藤通昭

銀のうろこを たどっておいで

そこがうわさの 銀鱗酒場ぎんりん

旬の漁りたてと

あなたの好み

路地に根ざした

暮らしです

時に大皿 今日まな板に

流木デコラの 銀鱗酒場

笑顔 ほろ酔い

包丁さばき

かくす女の

昔です

港 汐風 酒量も増えた

良くまー持つなの 銀鱗酒場

しわも しみも

女将の権利おかみ

相棒いらすの

舞台です

一葉十三夜

久仁京介

向島から 浅草あたり

桜吹雪の 隅田川

浮かれにぎわう 花見のひとに

嫉妬まじりの 貧乏な鬼が

おほほおほほと 笑って泣かす

一葉かなしや 闇桜

弱いおんなど にらんで見たか

わたし妾に なれという

野暮なくどきに ぐらつきながら

ぐつとこらえりや あふれる涙

好きな人には 目もくれられず

一葉せつなや たけくらべ

夢と暮らしの 追いかけてごっこ

負けぬつもりが 痛む胸

筆をはこべば 病もすすむ

日暮れ間近に 言問橋を

わたる鐘の音 泣くなど叱る

一葉かなしや 十三夜

風の盆有情

く
に
多樹夫

尾根が連なる 坂の町

挿^さし木哀しい 酔芙蓉

添^そえぬ運命^{さだめ}と 知りながら

清流^{みず}を鏡に 口紅^{べに}を引く

二百十日を お出迎え

ああ、風の盆 ひめやかに…

帯に隠した 煩惱^{ぼんのう}を

説いて聞かせる おわら節

そよぐ芒^{すすき}の 身のこなし

しなる指先 鮎^{あし}の舞い

紅いぼんぼり 影も泣く

ああ、風の盆 しなやかに…

三味も胡弓も 土に染み

旅のお方も 手が揃^{そろ}う

口をつぐんで 編笠^{かさ}の群れ

夜に流れる 影法師

恋も鎮める 祈り歌

ああ、風の盆 おごそかに…

凍とらう京きやう

國枝星志

あんたのぬくもり 恋しくて

面影染みてる 服を抱く

私残して 死んだ人

ポツケのほころび 切なさ誘う

東京の二月は 淋しいの

ビル風ヒユルヒユル 空で哭く

あんたの茶碗に 酒を注ぎ

一口飲み干し 空を見る

私見守り 微笑んで

タワーの彼方で 眺めてるのね

東京の二月は 淋しいの

夢でもいいから 会いに来て

あんたの言葉に 明日を見て

二人で飛び乗る ゆりかもめ

二つ揃えた 枕から

あの頃見た夢 浮かんでくるわ

東京の二月は 淋しいの

一人の寢床じゃ 眠れない

人生カタカタ カタツムリ

国 武 浩 之

一步二歩でも 進もうよ

人生遠い 道だから

幼い頃に 見た夢を

叶える遠い 道だから

人生カタカタ カタツムリ

人生カタカタ カタツムリ

頑張ろう 頑張ろう

何が何でも 頑張ろう

遠い遥かな 道のりに

嵐の後は 凧も来る

四季折々の 旅路には

愛する人と 手をつなぎ

人生カタカタ カタツムリ

人生カタカタ カタツムリ

歩こうよ 歩こうよ

空を見上げて 歩こうよ

人の命の 大切さ

スクラム組んで 守ろうよ

故郷離れて 行く人も

故郷に残る 人達も

人生カタカタ カタツムリ

人生カタカタ カタツムリ

生きて行こう 生きて行こう

歯を食いしばり 生きて行こう

男の夢

倉 卓也

思い通りに この世の中を
渡つてみたいと 思うもの
山あり谷あり 荒波さえも
越える力が あればこそ
光明あかりが見える
男の夢が

希望ゆめは絶やさず 次から次へ
作る努力ちからが あれば良い
笑顔がかならず 幸せ呼ぶよ
生きる喜び 得るうるものを
光明あかりが見える
男の夢が

生きる、それさえ たやすくないが
たまにやつまずく こともある
それも一つの 試練しれんで有れば
休む努力ちからを 作りやいい
光明あかりが見える
男の夢が

親子漁師船

倉藤有道

マグロが跳ねるぞ 面舵をとれ

仕掛け投げ入れ ようす見る

糸を手繰って 銚を打込む

長さ六尺 でっかい獲物

狙う伴に 親父の声が

意地と度胸を 教えこむ

漁師になるとも 云わずに海へ

餓鬼の時から 船に乗り

母をなくした 不憫な我が子

よくぞ覚えた 漁師の心技

わしが漁船に 乗れなくなれば

船をお前に くれてやる

荒波逆巻く 海は魔者ぞ

儂が死んでも あなどるな

親に教わる 逆潮見分け

うねる飛沫に 恐れはしない

強い伴に 育ってくれた

父の笑顔に 涙つゆ

母恋い新盆さま

栗原保夫

遠い 遠い国から 先祖さまは

帰っておいでに なるのよと

子供の私に 教えてくれた 母さんが

笹竹 鬼灯 盂蘭盆会

棚の上です 笑顔して

菅の 菅の笠つけ 踊った盆が

昨日のようです 懐かしく

子供の私に 教えてくれた 母さんの

手拍子 歌声 足運び

踊りましょうね 孫たちと

今が 今があるのは 先祖さまの

尊いお陰よ 感謝よと

子供の私に 教えてくれた 母さんが

送り火 夕空 遠い国

去ってゆきます 笑顔して

あいにゆう かくのただて
哀愁の角館

黒皮羽生

今もひとりで待つてると
風の噂は北国の城下町
こんな俺よりいいひとを
みつけりゃいいのに純な奴
みちのくに遅い花咲く
枝垂れ桜の 枝垂れ桜の
……愛しさ

川面みつめて肩寄せた
葉陰せつない哀愁の角館
そつと重ねた唇よ
忘れられない白い肌
みちのくに名残り尽きない
木洩れ陽ゆれて 木洩れ陽ゆれて
……散る花よ

今では遠いしあわせを
抱いて儚ない面影の城下町
すすり泣くよな街の灯に
今も消えないぬくもりよ
みちのくに早い木枯らし
みぞれ雪舞う みぞれ雪舞ふ
……この胸に

マグロ船

黒川良人

津軽海峡 夜明け前

酒で清めて 気持ちを締める

漁場は大間崎おおまの 三キロ辺り

師走の荒波 ぶつかる潮目

群れが渦巻きや 血が滾る

熱い飛沫の マグロ船

マグロ追いかけて 四十年

たった一人の 一本釣りだ

秘伝の仕掛けは 父親仕込み

食いつく大物 死闘の勝負

急所外さぬ 仕留め技

男冥利の マグロ船

一攫千金 夢に見て

努力重ねて 孤独に耐える

貫く信念 家族のためさ

修羅の危機から 守ってくれる

釣りの神様 ご先祖に

祈る感謝の マグロ船

男は育つそだ

黒崎慶子

口先くちさきばかりじゃ 男がすたる

背中に背負った 命の重さ

世間の世渡り 苦勞の汗で

人生勝負は 毎日だから

試練の数だけ 男は育つ

涙を拭いたか 化粧のくずれ

振り向くお前の 笑顔がいいよ

心にかかえた 昔の傷を

一人で背負うな 明日のために

試練にもまれて お前も育つ

口では言えない 心の傷を

何度も味わう 世間の尺度しゅうど

苦勞の苦くの字を お前とならば

この世に生れて 出逢った運命さだめ

試練の数だけ 男は育つ

八丈船祝い

小泉金三

今日は正月めでたい船祝い

大漁願ぶじかけ安全祈る

浜の若衆も酔いしれて

叩く太鼓の祝い酒

明日の出船に生命をかけて

舵を取る手に血が騒ぐ

燃える男のカジキ漁

冬の八丈海うみ原荒れて

大漁夢見て沖目指す

さかまく怒涛の波しぶき

可愛いあの娘が目に浮かぶ

男涙に生命いのちをかけて

舵を取る手に血が騒ぐ

燃える男のカジキ漁

春の八丈黒潮うみ荒れて

大漁夢見て沖目指す

八丈富士を背にうけて

可愛いあの娘が目に浮かぶ

荒れる怒涛に生命いのちをかけて

舵を取る手に血が騒ぐ

燃える男のマグロ漁

ONDO・八木節

高坂のぼる

ハアー

サアサ 一座の皆様方へ

お聞きください れい子が唄う

元氣印の この歌を

どこの誰より 祭りが好きで

じゃじゃ馬小町と 言われるあたし

男勝りに 音頭取りや

今日も ソーレ ソレ 元氣印の 血が騒ぐ

サアサ 一座の皆様方よ

くよくよしていちゃ 世の中は

何も出来ない はじまらぬ

あたし口説いて 横笛吹いた

あの人いまごろ どうしていてか

男勝りに 見えてもおんな

たまにや ソーレ ソレ 恋に燃えたい 時もある

サアサ 一座の皆様方よ

くよくよしないで 憂き晴らし

飲んで氣負いの 祭り酒

今日も明日も 祭りを歩き

八木節一途の きの字の女

男勝りに 氣合を入れて

行くぞ ソーレ ソレ 元氣印の 樽・鼓

サアサ 一座の皆様方よ

くよくよしたって つまらない

踊る阿呆に なるがいい

99く 歳く 花はな

小串波夫

死んだら弁当 喰くえないし
死んだらお酒も 飲めないね
ア……生きてて 良かったと
どんなに辛つらい 事だつて
いつか芽も出る 花はなも咲く
くじけずに < <
九十九歳で花はなを咲かせましょう

元気で生きてりや いい事も
きつと来ますね 誰だれだつて
ア……弱音よわねを 吐はいちやだめ
昔はいい事 あつたとか
今が駄目なら それも駄目
前向いて < <
九十九歳で花はなを咲かせましょう

人生誰でも チャンスある
その日が来るまで がまんして
ア……毎日 心がけ
自分の体からだを 鍛きたえましょ
年を取るほど かたくなる
ほぐしましょう < <
九十九歳で花はなを咲かせましょう

デイナーショー

小島香澄

紙ナプキンに リクエストソング
なつかしい文字 なつかしい歌
ふと見渡せば 隅のテーブル
背広姿の あなたがいた

何もいらぬ 何もかも捨て
まっすぐあなたに 駆けていきたい
とまどいながら ときめきながら
今夜は思い切り 愛を歌います

踏切そばの 小さなアパート
ギターに合わせ 歌っていたわ
あなたの曲が 好きだった
それが私の 始まりです

何もなくても 何もないから
まっすぐあなたを 愛していたの
月日の長さ 飛び越すように
今夜は思い切り 愛を歌います

あの日のままの あのいとしさを
まっすぐあなたに ぶっつけてみたい
グラス片手に 聞いてください
今夜は思い切り 愛を歌います

ああ汽笛に泣かされて

小嶋高志

春が 来たのに ツバメも 来たに
あなたは いつの日 戻るのか
花の咲く頃 迎えに来ると
言って 別れて それっきり…

港で 恋して 港で 別れ

港で 暮らして 待ってる わたし

ああ 汽笛きてきに 泣かされて

あんな 男と 言わずに おくれ
かもめよ お前も 待つ身なら
甘い囁き その手の温ぬくみ
のこる 面影 抱きしめる…

あなたを 夢みて あなたに 溺れ

あなたに 生きてる 未練な わたし

ああ 汽笛きてきに 泣かされて

雲が 流れる 思い出 追えば

日暮れが 涙を 連れにくる

赤い夕焼け 静かな海に

遠く ぼつちり 船がゆく…

港で 恋して 港で 別れ

港で 暮らして 待ってる わたし

ああ 汽笛きてきに 泣かされて

ネモフィラの風

古田土 恵子

あのひとに誘われた どこかへ行こうと

車は走るの 海沿いの道

いくつもの丘を 埋めつくすように

えもいえぬ青は ネモフィラの花

手をつなぎ はしゃいで 丘をのぼった

みはらしの鐘を ふたりに鳴らした

空の青 海の青 ネモフィラの青

ハッピー ブルー ブルー ブルー

春がすむ朝だけど 電車にのってた

今なら行けそう おもいで丘

一年を待って ネモフィラは咲いて

サヨナラも告げず 散ってった恋

ひとりきり うなだれ 丘をのぼるの

足元の青が ハートにしみるよ

空の青 海の青 ネモフィラの青

ティアカラー ブルー ブルー ブルー

泣かないと決めるの 強く生きるの

丘をゆく風の ささやき聴こえた

空の青 海の青 ネモフィラの青

ハッピー ブルー ブルー ブルー

津和野路の君へ

小宮えり

津和野のページを 折ってある

旅行ガイドを 夕陽が照らす

「行きたかったわ あなたとふたり」

わかれの時の 涙声

殿町通り 堀割で

見てるだろうか 花菖蒲

待っているなら すぐにも行くよ

胸の鼓動が 忘れえぬ君へ

心のページを めくったら

何故か楽しい 想い出ばかり

こんな気持ちも 伝えもせずに

哀しませたね 迷わせた

城跡ひとり のぼる背に

名前呼びたい もう一度

きつと今度は 受け止めるから

恋にたたずむ いとおしい君へ

ふたりで歩く 石畳

明日の夢へと 辿りたい

さつき届いた 絵葉書持って

逢いに行くから 津和野路の君へ

天^{てん}

小宮 正人

人に備^{そな}わる 尊^{とうと}さは

夢を絶^たやさぬ 心意^{こころ}気

暑^{あつ}さ寒^ふさに 大地^{ちがひ}や海^{うみ}は

耐^たえてやがては 糧^{かて}を呼^よぶ

天^{てん}のもたらす 試^し練^{れん}があれど

流^{なが}した汗^{あせ}で 越^こえゆく人^{ひと}生^なだ

受^うけた励^{げん}まし 温^ぬもりは

いつか返^{かへ}せる こと^{こと}がある

巡^{めぐ}る春^{はる}秋^{あき} 陽^ひざしを^を受^うけて

花^{はな}はそれぞれ 咲^さき誇^{こほ}る

天^{あま}が刻^{とき}んだ 時^{とき}節^{ふし}と共^{とも}に

転^{ころ}べば起^おきて 触^ふれ合^あう人^{ひと}生^なだ

誠^{まこと}ひとすじ 筋^{すじ}金^{かね}が

錆^{さび}びず曲^まがらず 胸^{むね}にある

追^おえば願^{ねが}いは 遙^{とほ}かな星^{ほし}か

きつと掴^{つか}むと ゆく浮^う世^よ

天^{あま}に誓^{ちか}って 挫^{くじ}けぬ歩^{あゆ}み

弛^{なほ}まず明^あ日^すへ 希^き望^{ぼう}の人^{ひと}生^なだ

親父（おやじ）

小雪めぐみ

いたご一枚 地ごくの足場
海の仲間がささえてくれる
大漁ばたの 旗にこめ
一本釣りのこち良さ
親父の強さが今になり
しみじみ想う 沖の海
母の背中で聞いていた
なぜか淋しい子守唄
海に消えた親父の事を
何も知らずに育った俺が
同じ荒海友にして
今日もカモメと波に飛ぶ
荒波こらえて 舵をとる
親父の残した 手ほどきに
海の男の 心が燃える
一本釣りに命をかけて
今日も糸ひくその先に
銀の鱗が舞い上る

しばらく。

近藤英子

まるでタクシードライバーに

行き先を 告げるみたい

しばらく会うのは やめようなんて

わたしの顔も見ないで 言うのね

わたしたちの ウワサだったら

知ってるわ

あなたがわたしのこと

ただの飲み友だちと 言ってるのも

しばらくとさよならは 同じ言葉ね

さよならはわたしからと 決めていたのに

いつか別れる時が来ると

分かっては いたけれども

しばらく会うのは やめようなんて

突然すぎて 泣けないじゃない

もしも生まれ 変わったらって

言わないで

あなたと一日でも

長く一緒にいたい わたしなのに

しばらくはやさしくてずるい言葉ね

さよならはわたしからと 決めていたから

さよならはわたしからと 決めていたのに

雪が降る夜の…

紺野 あずさ

ねえマスター 少し話していいかしら
ここに来たのは 二度目だけれど
ほっとするのよ この店は
グラス拭く手を 止めないで
むかし話と 聞きながしてね
いつつ年下の 売れない歌手が
ギター抱えて 出ていったのは
今夜みたいな 雪の夜

ねえマスター 赤いワインを奢らせて
シャツの着方も 指の形も
似てるあなたに 乾杯を！
酔えば得意の テネシーワルツ
歌いはじめる 人だった
愛に疲れて 傷つけあつた
遠いあの日の 苦しい恋を
思い出させる 夜だから

人を愛して 愛された日を
忘れたふりして 泣けずにいたの
ここであなたに 会うまでは

愛に疲れて 傷つけあつた
雪が降る夜の 別れのキスを
思い出させる 夜だから

ねえマスター 少し一緒に飲ませてね
ここに来たのは 二度目だけれど
ほっとするのよ この店は

かくれ湯けむり

齊藤清人

どんと白波 岩間をたたく

しけのない時 青い海

岩に伸びてる 二本の松が

夕日照らすか 堂ヶ島

かくれ湯けむり あああ・身まで燃える

沖のしずけさ 岸にむかつて

白くまい飛ぶ しぶき水

たたく岩の音 夫婦の岩が

かたい絆も 堂ヶ島

かくれ湯けむり あああ・肌までほてる

汐の香りが なごりが惜しい

真綿みたいな 波の花

番い仮寝の 稲鳥の宿

濡らす枕も 堂ヶ島

かくれ湯けむり あああ・悦ぶ灯り

冬の船

さいとう 大三

海を渡れば 幸せに
きつと二人は なれるのに
船が無いのよ 船が無い
冬の港に 雪が降る
鴟 鳴かないで 鳴かないで
鳴けば 心が凍りつく
ああ 逃げて来たのよ 二人して

海を見つめて 港宿
息を殺して 身を寄せる
これでいいのね これがいい
戻れないのよ あの街に
鴟 鳴かないで 鳴かないで
鳴けば 無口になるばかり
ああ 逃げてここまで 来た二人

海が今夜も 泣いている
両手握って 眠るだけ
待てばいいのよ 待てばいい
きつと明日は 船が来る
鴟 鳴かないで 鳴かないで
鳴けば 二人の夢が散る
ああ 逃げて行くのよ 遠い国

面影橋 II

齋藤力

出会あひひの様に 愛いとおしく

川つづみ沿堤の櫻さくら蕾らが 咲あきました

今いまでは遠とほい 逢あえない今いまも

彼あひひ男おと追想おもう 面影橋めんかげはしは

わたしを濡ぬらす 情念雨こころ…

都電てんしやの行く音 聴きいてます

逢瀬あひひの彼私ふたり 鬼子母神

肩寄かたよせ仰あいだ 大銀杏おほぎんぎやう（樹齡七百年）

今いまでは独ひとりり 偲おもんで今いまも

巡たど迎むかれば落涙なみだ 面影橋めんかげはしは

※ 於おと戸ひめ姫あわれ悲哀 花命いのち断つつ…

苦運くるしみばかり…と 伝説つたえます

（※於戸姫^上面影橋由来の古昔伝説の悲姫）

惜別あひひの様に 遺瀨いせなく

川な面流がに櫻片さくらが 散ちつてます

今いまでは何処どこに 逢あいたい今いまも

彼あひひ男おと夜想おもう 面影橋めんかげはしは

おんなを哭なかす 慕情雨なまけ…

添そえない身の胸 抱かいてます

葎草ドクダミの花ハナ

齊藤葉月

綺麗きれいに生きても けなされて

たよれぬ森で 咲いている

ドクダミの花に 心をかた向けたとき

たそがれの空が 美しくよみがえる

花びらを染める 白い花はあなた

風だけが知っている あなた

旅路の果てまで 来てしまい

なみだで捨てる 恋ごころ

ドクダミの花に 心を奪うばわれたとき

燃えさかる夢が 真白く消えてゆく

花びらに香る 白い花はあなた

風だけが知っている あなた

自然はいのちの 支えです

だまっけていても 読みとれ

ドクダミの花に 心がよみがえるとき

ふしだらな愛を 踏みつけて忘れたい

花びらを揺ゆらす 白い花はあなた

風だけが知っている あなた

残 月

齊 藤 向 恵

登る朝日が 隔てる朝と夜
白い残月 ポツリと光る
夕べあなたの 別れの言葉
胸にいだいて 生きてゆく……

ああー 男なんてさ

嘘つき ずるい

でも結んだ絆を ほどいておいて
幸せ掴めと 優しく笑う

嘘と嘘とが ぶつかる夜の街
孤独いやして 暖めあった
二度と会えない あなたと私
タバコ吸ったら 出てく男……

ああー 男なんてさ

嘘つき ずるい

でもわかってほしいの も一度抱いて
愛を軀に 刻んでほしい

ああー 男なんてさ

嘘つき ずるい

でも結んだ絆を ほどいておいて
幸せ掴めと 優しく笑う

瞽女哀歌

五月女 正人

手引きに連いて 踏み出す踵が
海水浸く砂に 草鞋を囚られ
瞽女の歩みを 惑わせる
今日も門付け ままならず
冷い仕打ち 涙で逃げて
今宵は何辺の 情け宿

痛々しくも 割れ皮膚深く
腫れて血を嘔く 手足の創傷が
瞽女の哀しみ 偲ばせる
弦弾くことも ままならず
凍みる指先 息吹きかけて
生き抜く為に 門口にたつ

何時かは知らず 手足の指が
意の儘ならず 離れてくれず
拉けた指で 太棹を
爪弾きならず 叩き打つ
瞽女の謡うは 血を吐く叫び
北の飛沫を 合いの手に

流れ伝わる津軽の地では じよんがら節と世間は呼ぶ

命の絆

坂口君代

肩にやさしく手をまわし

匂いでわかるの幸せが

目をつむればこぼれる涙

ぬぐってくれた手の温かさ

苦勞思い出せつない胸に

笑顔見つめて二つの心

時は過ぎても思いは巡る

影絵のように浮かぶだけ

大切な人 好きな人

いとこばかりありすぎて

命を重ねた人生に

はなさないでと命火もやす

パパって甘えていいですか？

坂本 寿美子

アモーレ ジュテーム アイラブユー
テレビドラマの 見すぎじゃないヨ
子供のふりは もうあきちゃった

とっくに私 大人の女

笑ってないで 本気で聞いて

パパって甘えて いいですか？

アモーレ ジュテーム アイラブユー
年の差なんて 気にしてないヨ
私がゆっくり 生まれて来てさ

パパがいそいで 生まれただけよ

皆んなにナイシヨ 約束するわ

パパって甘えて いいですか？

アモーレ ジュテーム アイラブユー
歌に出て来る 言葉じゃないの
本当に好きで 爆発しそう

パパはおとなし すぎるじゃない

ムードを出して 甘えて云うよ

パパって呼んで いいですか

パパって甘えて いいですか？

とびの涙

佐倉陽子

暮れかけたまま 暮れもせず
見渡す限り 夕陽は染める
一羽のとびが くるくると
その身焦がして 円わを描いて消えた
それは叶わぬ恋 それは倫ならぬ
優しいだけじゃあなた 涙は拭えない
強い翼で 燃える海
今すぐに… 私追って来て

あなたも同じ 空を見て
私の影を 探して欲しい
別れの風が ざわざわと
襟を冷たく すりぬけていても
そっと名前を呼び そっと耐えてきた
月日を捨てるなんて 涙は茜色
強い翼で 赤い谷
どこまでも… ふたり行きたいの

愛は形も無く 愛は見えなくて
も一度言ってみせて お前を離さない
強い翼で 熱い胸
永遠に… 抱いて包んでよ

恋 蛍

さくら 龍

男やもめの夜に降る

愛し恋しい 未練雨

泣かせた女房 置き手紙

バカな男を映し出す

飛んで逃げてく 恋蛍

星に重ねて 手酌酒

意気のいいときや 午前様

お前手料理 冷めきって

寝顔に残る 涙路

愁う女の足跡が

飛んで逃げてく 恋蛍

肴あてにぬか漬け 手酌酒

お前が漬けた ぬか漬けが

残り僅かと 手を振って

あなたの好みに漬けたよと

暮らし始めの 幸せが

飛んで逃げてく 恋蛍

涙塩舐め 手酌酒

都心を少し 一寸だけ

櫻井 馨

都心としんを少し 一寸ちよつとだけ

離れた場所です この町は

墨すみ絵えほかに 暮なれ泥どろむ

運河うんがの辺へどり 佇たたずんで

昔の恋など 偲しのびます

海風うみかぜですか 潮の香かが

仄ほかに漂ひらう 船溜ふなだまり

たまの寄り道 廻り道

買物次かひものついでの 逍遙しょうようは

浮き浮き半分 淋しみしさも

オフィスビルの 狭間はざまなの

宵待よいまちホテルって どんな宿

せめて一ひト夜よと 思おもうけど

叶かなわぬ夢ね 絵空事

家族や家庭が ある身には

日本昔話より つる女房

佐々木 ひさこ

耳をすませば 春のうた

七時雨山 百千鳥

朝星夜星 鍬打つ背中

擦りましょう あたためましょう

添い寝であなたを 寝かしつけ

トンカラトントン 機場に籠もり

命、命なげ打つ つる女房

花弁はなのようでも 花弁はなじゃない

七時雨山 仕舞雪

一羽根まい二羽根 ぬいては紡ぐ

化身わたくしの姿 覗いたあなた

今宵が最後の 千羽織り

トンカラトントン 未練に軋む

涙、涙湿りの おさの音

女ごころの 胸に降る

七時雨山 絹の雨

しあわせ紡ぎ あなたに着せて

死ぬまで傍で 暮らしたかった

この身はやせても やせぬ恋

トンカラトントン 風切り羽根で

想い、想いたちきり 茜空

路地の雨

笹森とおる

裏町小路の 止まり木で

酔わなきゃ切ない 夜がくる

私の心に 降り続く

別れたあの日も こんな雨

忘れさせてよ・路地の雨

たとえばあなたが 忘れても

私の心に 染み込んだ

あなたの香りは 消えません

今夜は泣きたい 酔いたい

忘れさせてよ・路地の雨

酔い街酒場で あの頃は

あなたと二人で 飲んだ酒

グラスに想い出 注ぎ足せば

悲しい涙が また落ちる

忘れさせてよ・路地の雨

無名の外野手

佐 東 たどる

親父おやじに教おそわり 楽たのしんだ
キャッチボールが 始はじまりさ
学生時代がくせいじだいは 甲子園こうしえん
目指めざして練習れんしゅう 汗あせまみれ
仲間なかと元氣げんきに 声こゑを出だし
打うって守まもって 走はしったなあ
雨あめでも休やすまず 素振すぶりする
粘ねばりと根性こんじやう 身みに付つけた

田舎いなかのちいさな 高こう校こうは
一ひとつ勝かつのも 難むずかしい
予選よせんの初戦しよせんで 負まけたけど
心こゝろは爽さわやか 悔くいはない
持もつてる力ちからを 出だし尽つくす
熱あついよろこび 味あじわった
あの日ひの夏空なつぞら 白しろい雲くも
想おもい出い一生いっしやう 忘わすれない

無名むめいの外野手がいやしゆ だっただけど
野球魂やきうたましい 不滅ふめつだぞ
今いまでは世間せけんを グランドに
希望きぼうと名なの ボール追おう
人生じんせい厳げんしく 長ながいけど
けして勝負しやうぶは 諦あきらめん
家族かぞくの声援せいえん 受うけながら
フェアプレーの 毎まい日にちさ

人生マーチ

佐野 源左衛門一文

歩きたいけど 真っ直に
歩けないから 曲がり道
前に向いてる 目を開き
悩んで一歩 努力で一歩
涙こらえて 進むだけ
※元気が一番 笑顔が二番
一二 一二だ 人生は

泣けといわれて 大笑い
笑うつもりが 泣いていた
胸に無限の 夢抱いて
強気で一歩 根気で一歩
右を出したら 次左り

※繰り返し

地図も磁石も 持っていない
産まれながらの 迷い道
未知の不安も 恐がらず
悔んで一歩 勇気で一歩
信じた道を さあー行こう

※繰り返し

まつしぐら

澤田芳生

浮かれ祭りの フィナーレ飾る

三尺玉の 花しづく

夜を焦がして 天から大地へ

神の火の粉が 明日へ注ぐ

稔りの秋へと まつしぐら

二百十日も 無事のり越えて

稲穂が俺に お辞儀する

春に嫁いで くる娘の夢は

四季を彩る 草花栽培

ふたりの協力で 叶うだろ

一粒一粒の 小さな種が

綺麗な花を 咲かすんだ

俺とあの娘も ふたつの種さ

神の火の粉を 心に抱いて

遙かな人生 まつしぐら

裏窓

山さん
吾ご
充じゅう
六ろく

裏窓からは 裏町が見える

行き交う人も 行くあてがない

つかの間の 恋でいゝなら

一杯のワインと 引替えでいゝよ

この辺りでは 恋もくたびれて

誰もふり向きは しないけど

西日が燃えて 裏窓が赤い

気だるい午後が 黄昏れてゆく

あてもなく 今日も終るよ

お茶でもいゝから 奢ってよ坊や

この辺りでは 古い方だから

昔話でも してあげる

裏窓からは 裏町が見える

いろんな人の 生き様がある

いゝ星の 生まれだなんて

占いなんかは 当りっこないよ

この辺りでは 誰もしたゝかで

夢を追ったりは しないけど

戻ってきてよ

椎名 英威子

あなたの匂いの 残る部屋
抱いてほしいよ もういちど
しおれた花の 手入れさえ
できないほどに 寂しくて
戻ってきてよ

あなたなしでは 生きられないよ
あなたを奪って いった女ひと
きつといつかの あの女ね
いけないところ あるのなら
直すよきつと 直すから
戻ってきてよ

あなたなしでは 生きられないよ
夕べも夢見て 泣かされて
ぬれた枕が せつないよ
やさしい胸が 恋しくて
忘れるなんて できないよ
戻ってきてよ

あなたなしでは 生きられないよ

ムーンライト カフェロワイヤル

汐 咲 まどか

角砂糖にブランデー 一滴したたらせて

マッチで火を灯して 青い炎みつめている

熱いコーヒーを 銀のスプーンでかき回して

一杯目のコーヒー飲み干し あなたを想う

ムーンライト カフェロワイヤル

窓から映る 冬の大三角形 きらめく星達

U_{III} 今宵あなたは 何をしている

碧いタンザナイトの ネックレス飾って

あなたがくれた初夏の 贈り物に胸を焦がす

干満かんまんのように 心が揺れる 切ない時間とき

二杯目のコーヒー飲み干し あなたを想う

ムーンライト カフェロワイヤル

恋焦がれる 一日千秋の思い 気持を届けて

U_{III} 今でもあなたを 愛しているの

ムーンライト カフェロワイヤル

窓から映る 碧くかけた新月が 雲に隠れる

U_{III} 今宵あなたと 夢で逢いましょう

逢いたくて

紫香賢治

優しいあなたの愛情で

花咲き鳥鳴く 春陽はるでした

夕暮れ時には 身を寄せて

塙ねぐらへ帰る 雌雄めおとどり鳥

二人で寄り添い 見た夕日

遠いあの日が 懐かしい

冷たい夜風つめが 身に凍しみて

あなたの温もり 思い出す

今夜も切なく 身を屈かがめ

面影偲おもび 耐えてます

人肌恋しい 黄泉よみのひと

酒で癒して 夜が更ける

おまえが好きだと 肩に手を

優しい笑顔が 浮かびます

今夜も寂しい ひとり寝は

恋しさ募り 泣けてくる

夢見ゆめみであなたに 逢えるなら

強く抱だかれて 眠りたい

薄紅の恋

しば
ともなり

桜 薄紅 春霞み

貴方に恋した 花の夜

宴の後に 誘われて

忘れた恋に 巡り逢い

ああー 心は熱く

身は焦がれ

道に 露草 蟬しぐれ

貴方にゆるした 旅の宿

愛して燃えた ふたりでも

切ない灯り 消えるまで

ああー 限りの日々が

未練です

枯れた 銀杏に 石畳

貴方はたたずみ 横顔に

辛さを隠す 頬笑みを

心に私 しまいます

ああー で逢いと別れ

それが恋

鷺羽山慕情
わしゆうざん

島 勝 興

瀬戸の小島や 大橋の

眺め素晴らし 鷺羽山

旅の楽しみ 多い所

宿の宴も 心地好く

若き仲居の しとやかさ

ああ 黒髪に ほだされる

日の出かけ声 なぎ港

小船見送る 鷺羽山

羽をひろげた 母鷺か

ゆうべ見初めた あの仲居の

あさげ賄う くすり指

ああ 気にかかる 花指輪

かなうものなら 二三日

うしろ髪ひく 鷺羽山

仲居総出の 見送りに

別れ切なく 名を呼べば

バスの後追う いとしさよ

ああ その笑顔 いつまでも

哀しみの渚

嵐しま

馨きょう

子こ

哀しみの 渚なみに立てば

津波なみに消された 母さんの

やさしい笑顔が 呼ぶような……

くだけて散った 倅こせが

しぶきとなつて 泣かせます

哀しみの 渚なみに立てば

恨うらみみ心に つまされて

あしたを忘れて しまいそう……

さだめの糸の 儂はかなさを

結むすべる鍵かぎも 愛もなく

哀しみの 渚なみに立てば

いのち燃やして 生きよとの

あの日の言葉が 胸を打つ……

希望のぞみも夢も 母娘ふたりづれ

夕日に誓い 歩き出す

越前未練町

島 洗 一

北陸道に 積もつた雪は
こがれる思いで とけてくる
二人で暮らした 残り火が
胸の芯から 燃えてます
気ままに暮らした 年月を
海に流した 越前岬

あなたの愛が 心にしみて
東京暮らしに 幕を引く
なれない世間の 独り身に
自分を責めて みとせ過ぎ
港の灯りが やるせなく
季節来るたび 越前恋し

心寒い日 あなたが夢に
もう一度会いたい この街で
かもめ身をやく 夜に泣く
涙かれます 身も細る
命あげます 去る日まで
あなたに添いたい 越前の町

蓮れん如によう抄しよう

嶋 八郎

ともし灯ひに 抱いだかれて 生きる身ぞ
消すに消せない 煩惱ぼんのうゆへに
伏しても裁さけぬ もどかしさ
生きる迷いは 衆生しゆじやうのおきて
この身さらして 往ゆけばいい
阿弥陀あみだの本願 お念仏

人の世の 空むなしさは 避さけがたし
諸行無常しよぎやうむじやうに 押し流されて
己おのれの罪業ざいごう 断ち切れず
善人よきも悪人あしきも 諸人もろびとたりと
救ひたすりたいよと ひたすらに
悲願ひがんと説たまき給たまう 御文章ごぶんじやう

生かされる この命 見えずして
欲とねたみの 乱世うられを憂うれい
骨身をけずって 講こうの旅
限り知れない 真実まことのお慈悲じひ
そつと受け止め ありのまま
仏おんに任せと 合掌あてをあわす

※浄土真宗第八代宗主蓮如上人一代記より
(一四一五、一四九九) 八五歳 滅

櫓太鼓

清水たかし

櫓太鼓が お江戸の空に

鳴れば真摯な 大銀杏

今日の勝負に 命を燃やし

上る土俵は 男の舞台

勝った負けたは 時の運

四十八手の 思案に暮れて

ひとり眠れぬ 夜もある

明日の勝負も 精根込めて

勝った時には 驕りもせずに

負けて悔いない 相撲道

風も爽やか 両国橋の

西も東も 水入らず

土俵帰りの 着流し姿

お江戸雀の 噂を聴けば

朝の稽古に 気が入る

レンゲのブランコ

下野 登美子

レンゲの花を 仲良く摘んで

長く 長く 編みましよう

そして 大空 吊りさげて

ゆらり ブランコ ゆらゆらり

わたしの お願い 届くよに

あなたの お願い 届くよに

天まで 高く こぎましよう

ジャンケンポンで お次はだあれ

みんな みんな いらっしやい

ちぎれ雲さん 綿雲さん

ゆらり ブランコ ゆらゆらり

わたしの 涙が 散るよに

あなたの 涙が 散るよに

天まで 高く こぎましよう

ゆらり ブランコ ゆらゆらり

わたしの 心が 癒えるよに

あなたの 心が 癒えるよに

天まで 高く こぎましよう

乙女心巻き戻し

白石明仁

ときめきなんて 感情は

随分前に 忘れてた

葉書一枚 舞い込んで

タイムスリップ した気持ち

乙女心に 火を付ける

「お待ちします」 クラス会

返信期日 近付いて

乙女が揺れる 日暮れ前

青い季節の 忘れごと

メランコリック しています

言えずじまいの あの言葉

彼にぶつけて しまおうか

二ヶ月ぐらい 乙女して

出せないままの 葉書です

不意に出席 彼のように

サイドアタック 決めましょか

惰性暮しの 日常に

花が咲いたわ ありがとう

愛のいろ

白 旗 慶 子

薄紅色の花の下で見上げた空は

きらきらと光って目のなかに飛び込んできた

青さはあの日のままに私をつつむ

薄紅色の優しい花は淡さに揺れて

ひらひらと舞い落ち胸の上で泊まっている

果敢無さは哀しいだけではないのです

薄紅色の花の隙間に見えたあなたは

生き生きと笑ってそのまま花と空のなか

身体いっぱい暖かさ置いて行くから

桜の紅と空の海は近いのですか

ゆらゆらとあなたを乗せて近づき遠のく

悲しみ癒えたら心は重なるからね

会えると信じて生きていきますこれから

あなたの命は私のなかに笑ってる

心全部で命全てで生きていきます

だから…お願い

城岡れい

おまえを千年 愛するなんて

齒の浮くセリフは 言わずにいてね

あなたは誰より 優しくて

夢に走れば それでいい

だから だから…お願い

さりげなく 小さな言葉くれるなら

幸せ灯りを 絆につなぎ

一夜をあなたと 見つめていたい

あなたを万年 愛せる様な

魔性の女に なれないけれど

その分密ひそかに しなやかに

真実まことつくすわ 最期まで

※だから だから…お願い

迷わずに 煌く夢をさがすなら

微笑み教えて 明日につなぎ

百年あなたを 感じて生きる※

※リフレイン※

千年あなたを 信じて生きる

寝屋子の島

〔答志島〕

城山正志

俺には二人の親父がいるぜ
産みのお父と寝屋子の師匠だ

鳥羽の港を背にして行けば

古き慣習が息づく島よ

ここが故郷 故郷・答志

俺が生まれた島なのさ

寝屋子の宿から聞こえる笑い

路地に溢れる情けと涙

暖簾干しした若布の香り

島を離れたあの子に届け

ここが故郷 故郷・答志

俺を育てた島なのさ

肌身に染み込む漁場の掟

寝屋の師匠が授けてくれた

酒を交わして朋輩たちと

永久の絆を誓った契り

ここが故郷 故郷・答志

俺の愛する島なのさ

川越城下町

菅野政義

小江戸川越 小粋な露路に

灯るネオンよ なぜ淋し

一度出逢った 恋なのに

意地で別れて 心から泣いた

逢いたい女の 城下町

小江戸川越 伊佐沼さくら

浮ぶ夜霧よ なぜ恋し

伝うおんなの 真心を

抱いて抱かれて 憎めぬあなた

濡れた女の 城下町

小江戸川越 蔵町通り

心行きかう 幸福えくぼ

もえる心に 恋みれん

交す情けは あの日のあなた

逢いたい女の 城下町

坂の道

助田ひさお

茜雲 茜雲

夢にうつった 故郷は

夏もおわりと 蟬がなく

蒸れる草の香 坂の道

行けば木漏れ日 想い出ばかり

逢えぬ寂しさ 秋がゆく

あの女は あの女は

消えてしまった 故郷で

切れぬ未練に 振り向けば

髪の香の 坂の道

好きでいながら 添えないふたり

眠る目尻に 男の涙

好きだった 好きだった

山の彼方の 故郷は

想い寄せても とどかない

秋が舞い散る 坂の道

たとえ咲かずに 終るとしても

何処にいるのか 心の女よ

風の子守唄

鈴川信也

風さわぎたつ 戦乱の

天下は夢か幻か

馬上の背なを 雨が鞭打つ

桔梗ききょうの花舞 あの子守唄

我につづけよ 桶狭わたせ

空あかあかと 戦陣の

炎に討たん 比睿山ひえいざん

人生いつか 五十幾年

山河に流れる あの子守唄

安土そびゆる 天守閣

天肅てんしゆ々と 火の中に

恨みは永遠とわに 命散る

群雄割拠 栄華盛衰

鼓つづみも淋しい あの子守唄

さらば無念の 本能寺

なみだ橋

鈴木紀代

山間やまのの 川にかかる橋

肩を抱き寄せ 言った男ひと

「君が 好きだよ」

風にちぎれて 消えたさきり

あなたく 私のあなた

偲しのべば泣ける なみだ橋

想い出が 今もあざやかに

浮かぶあの雲 はぐれ雲

「どこに いるのよ」

たぐり寄せたい 糸もない

あなたく 逢いたいあなた

せつないつらい なみだ橋

いつの日か 二人出逢えたら

嬉し涙に 変わるのに

「今も 好きだよ」

言っ下さい 待ってます

あなたく 帰ってあなた

一人で渡る なみだ橋

人生ほどほど

鈴木信子

懐^{なご}寂^{じやく}しい そんな夜は

浮^うき世^よの辛^{から}さ 身^みに沁^しみる

無くても哀^{あは}しい 過^かぎるのも

禍^{わざわい}いおこす もとになる

人生^{じんせい}ほどほど 人生^{じんせい}ほどほど

そんな生^いきかた した^したいのさ

ギター^{ギター}の絃^{いしと}さえ 張^はりすぎりや

ぶつりと切^きれる こともある

緩^{ゆる}みを持たせりや 良^{ねい}い音^{いん}色^{しやく}

張^はり過^かぎないで 弛^なまずに

人生^{じんせい}ほどほど 人生^{じんせい}ほどほど

そんな生^いきかた した^したいのさ

浮^うき世^よの花^{はな}道^{みち} 歩^あいても

急^{いそ}いで行^いけば 躓^{つまず}くさ

のんびり歩^あけば 負^おけになる

頑^{がん}張^{ぱん}り過^かぎず あき^あくらめず

人生^{じんせい}ほどほど 人生^{じんせい}ほどほど

そんな生^いきかた した^したいのさ

ハートマークはピンクです

鈴木 はるか

青いデニムのシヨルダーバック

ちよつと気になる 可愛い娘^コ

夢をいっぱいいつめ込んで

街を風切りあるいてた

肩に幸せ あふれてた

バックマークは緑色

ハートマークのシヨルダーバック

いつものコース あの街を

揺れているのは 愛かしら

やがて緑の風ふいて

マークはピンクに染まります

愛がぎっしり あふれそう

あの街角を 消えていく

シヨルダーバックの女の子

フックラ クラクラふくらんで

このままずっと あるこうよ

やっと思つけた ラブマーク

夕焼け空は あかね色

宝くじだよ人生は

鈴木康正

インターネットを クリックすれば
たちまち買えるよ 宝くじ

ロトに BIGに ナンバーズ

一攫千金 濡れ手に泡と

今夜の夢は 億万長者とゆきましよう

買わなきゃ当たらぬ 宝くじ

当れば内緒の 宝くじ

グリーンジャンボに ドリームジャンボ

いつか御殿を 建ててやる

女房子供にや 笑われようと

小遣いはたいて 宝くじ

山と積まれた 札束を

枕がわりに 寝ころびながら

美女と一緒に 左団扇とゆきましよう

買っても当たらぬ 宝くじ

それでも買いたい 宝くじ

サマージャンボに オータムジャンボ

いまに見ている 俺だって

買わなきゃ当たらぬ 宝くじ

当れば内緒の 宝くじ

×は初夢 年末ジャンボ

きつと死ぬまで やめられねー あーあ

なにわトンボ

須田厚子

…トンボいうのはナ 前にしか飛べへんのや

前に飛ぶしか 能がない

下がりも戻りも 出来ぬひと

あんたの背中 追いかけて

ついて行きます どこまでも

ええの ええのよ 男意気地を

一途通して なにわトンボ

あかんたれやで 無茶しても

それこそ取り柄の 夢見人

世間の風に 揉まれたり

涙に濡れても 離れない

ええの ええのよ 雨は止むもの

目玉くるくる なにわトンボ

心・人情 明日も晴れ

通天閣まで 茜色

あんたの羽根の 奇麗さは

うちが知ってる 値打ちもの

ええの ええのよ ふたり気強く

飛んで行きますよ なにわトンボ

歌：その愛

捨^{すて}

大吉

笑顔の時には 離れていても

哀しみに 涙あふれる日

そつとより添って なぐさめる

歌：その愛 ひと時のやすらぎ

歌：その愛 はげましの言葉

ああ明日^{あす}に向かつて 歩いて行ける

歌はいつでも 旅の道連れ

流れる時代は 行く道知らず

人の世の 夢を彷徨^{さまよ}えば

歌はいつの日も 道しるべ

歌：その愛 ぬくもりの灯火^{ともしび}

歌：その愛 生きてゆく希望

ああ星のかがやき 灯台明かり

歌は私の 旅の道連れ

歌：その愛 母親のゆりかご

歌：その愛 父親の力

ああ胸に抱かれて 山河を越える

歌は恋しき 旅の道連れ

俺おれの道みち

首藤隆充

生まれ育そだった 故郷ふるさとを
離はなれて早はやくも 五十年ごじゅうねん
世間せけんの風かぜの 冷つめたさを
越こえて来きました 苦勞くろう坂さか
やっと思しつけた 幸しあせを
離はなすもんかと 俺おれの道みち

浮うき世よの波なみを 超こえて行ゆく
おまえと俺おれの ふたり旅たび
人ひとにバカだと 言いわれても
こころが決きめた 俺おれの道みち
酒さけでまぎらす 悔くやしさも
いたわる妻つまの 眼めに涙なみだ

今いまでは思おもう 懐なつかしく
幼おきなき頃ころの 故郷ふるさとを
回めぐ想くわるあの丘おか あの入江いりえ
安やすらぐ心こころが やさしさに
変かえて行ゆくのか 俺おれの道みち
人じん生せいまだまだ これからだ

洗い屋

砂川風子

何を 洗いましうか

涙 それとも 古傷

腕なら確かよ 年期が入ってるの

夜の片隅の 私 洗い屋

お任せなさい 全てを 委ねて

お任せなさい 赤子に なって

いつを 洗いましうか

昔 それとも あの夜

誰にもあるわよ 汚れたヒストリー

時の片隅の 私 洗い屋

脱ぎ捨てなさい 重たい 時計を

脱ぎ捨てなさい 古びた 日々を

どうぞ 使ってね 私 洗い屋

落としてあげる 隠れた しみ跡

包んであげる 極上の 泡で

ひまわりの花

春原茂幸

命をかけた 恋だから

真夏の太陽 灼けつく丘で

耐えて忍んで 待ってます

風よ運んで 海越えて

熱いくちづけ もう一度

燃えて咲いてる ひまわりの花

夜明けの海が 待ってなくて

なぎさの砂浜 かけぬけながら

あれはあなたの 船ですか

夢のつづきか 幻か

背のびしたまま 立ちつくし

燃えて咲いてる ひまわりの花

面影遠く 胸に抱き

星空仰げば 夜つゆにぬれて

変わる季節の 波の音

かんだくちびる 痛くとも

恋の色あい あせないで

燃えて咲いてる ひまわりの花

七丁目のおんな

せ
を
は
や
み

こんなに遅くなるなら

メールくれたらいいのに

あなたの好きなフルーツ

買っておいたのに

今夜はこれで終わりにしてね

もうすぐ日付も明日に変わる

最後に選んでくれたことが嬉しいの

最初の店でどんな

会話をしてきたの

次の店では何を

約束したの

今夜はここで終わりにしてね

もうすぐ駅のシャッターも下りる

忘れずに来てくれたことが嬉しいの

やりきれないことがあって

そんなに飲んできたの

忘れたいことがあって

ハシゴしてきたの

今夜はそれで終わりにしてね

ここがあなたの今日の終点

話し相手になれたことが嬉しいの

ピストンパンチ

関 せき

東 とう

西 さい

故郷に君を 待たせたままで
僕はリングの 勝負旅
東京皮切り ハワイでも
敵のふところ 食らいつき
ズイトズンズン
ピストンパンチが 走り出す

セリフ

(きよう日本橋のデパートで 和服を買い君に送った
臉に迫る君の顔・顔…)

離れていても ほどけぬ絆
恋が力を 漲らす
きわどい試合 決めるなら
打たれ強さの 首賭けて
ズイトズンズン
ラッシュの連打で 乱れ打つ

セリフ

(手紙では 出先から日光に戻り 君独りでイロハ坂の
燃えるような紅葉を眺めていると云う)

もうすぐなのさ 一緒になる日
いのち重ねて 生きようよ
勝利の女神は 君だから
僕のこの血が 沸き立って
ズイトズンズン
ピストンパンチが 夢咲かす

こころ歌

関口義明

他人どころか 親子でさえも

ままにならない 現まし世で

俺の持ち駒 意地ひとつ

やけに心が 冷えこむ夜は

捨てた故郷が 気にかかる

酒よお前と いつしか知らず

出来てしまった バチ当り

詫びを飲み干す このグラス

酔っちゃいるけど ぱらっちゃいない

窓にあの娘の 星が泣く

肩をすぼめた 男の影は

絵にもしゃれにも なりやせぬが

俺の立つ位置 向い風

嘘もお世辞も 苦手だけれど

誠一途に 生きている

この先急に雨が降る

瀬 端 健次郎

人生最初 ゆるやかで

だんだん急な 坂になる

故郷に錦 飾るまで

心はいつも 青い空

地図にない道 よそ見をすれば

この先急に 雨が降る

始めの一步 母の手へ

それから早く 歩く癖

時代の川に 流されて

感謝の言葉 知りました

勝った負けたが 富だとしたら

この先急に 雨が降る

努力はいつも 道半ば

諦めた時 終わります

背広のしわと 汗じみは

続きの夢を まだ見てる

他人を泣かせて ヒト いい子になると

この先急に 雨が降る

かつぼうぎ

仙 孝 緒

母さんや 苦劳かけたね

お茶を入れてる 私の肩に

そつと手をおく 笑い顔

湯気の茶碗の 向こう側

優しい顔が 微笑んで

昼のひと時 過ぎて行く

あの頃は 休む暇なく

朝に夕べに 働き詰めで

お茶の休みも 無かったね

土間の片隅 掛かったた

木綿もめんの白い かつぼうぎ

湯気の向こうに 思い出す

この頃はころ 昼の二人の

憩いの時に ほのほの浮かぶ

今もここに 架かかっている

生いきた二人の 目じるしの

苦劳の浸みた かつぼうぎ

湯気の向こうで 揺れている

☆かつぼうぎ(割烹着)

望郷情歌
ぼうきょうこいうた

曾我幸義

冴えた夜空の 月を視て

故郷に残した 一面影ひとつ

男の夢に 泣き顔を

背にして上りの あの汽車に

置いたおもいが 今もある

華の都と 言うけれど

何故か空しい 明け暮れよ

こころの涸れた 他人ばかり

うわべの飾りに 踊ってる

えくぼ一つが 懐しい

明日は祭りの 筈だけど

帰りたくなる 秋の月

あの娘も一人 両親と居る

噂をつたえた あの友が

故郷へ帰れと 俺を呼ぶ

それが母の愛なのか

田 浦 泰

眼を閉じれば 故郷と

母の面影 見えてくる

わたしが大人に なる日まで

すべてを支えて くれた母

与えるだけで 求めはしない

それが母の 愛なのか

わき目もふらずに 働いて

けれど笑顔を 忘れずに

誰にも負けない 優しさで

いつでもわたしを 見守った

与えるだけで 求めはしない

それが母の 愛なのか

わたしが故郷 捨てた頃

母は一人で 空の果て

出来ないまんまの 恩返し

悔やんでみたとして 遅すぎた

与えるだけで 求めはしない

それが母の 愛なのか

花ぼうろ　　ゝ霧氷の宿ゝ

たか　たかし

深山の霧の　冬化粧

誰が名付けた　花ぼうろ

あなたを愛した　歳月を

涙と一緒に　氷らせて

明日は別れる　霧氷の宿よ

さいごの旅に　しましようと

決めているから　なおつらい

女のよろこび　悲しみを

あなたは教えて　くれました

誓う忘却　霧氷の宿よ

眠れぬままに　刻ときがすぎ

白い吐息の　朝まだき

あなたを忘れる　ことなんて

やっぱりむりです　わたしには

うしろ髪ひく　霧氷の宿よ

親

高丘よしと

誰が見たってえ 親子だね
血というものは あらそえぬ
せがれは勝気で おやじ似にで
娘やまの優やさしさ 母は親仕込み
家の幸せ 子供から
親は鏡だ 子も映る

は二十路たち過ぎるにや まだ遠い
子供は二人 中学生
身体は丈夫が 一番だ
勉強できれば 文句ない
夢を見ながら 生きている
きつとこの先 楽しみだ

とし年令は七十才 ななじゅう越えたから
身体がいたみ 「ガタ」がくる
格好ばかりの 親だけど
死ぬまで支えに なるからな
家の宝だ 子供達
強く育てと 祈つてる

女浜唄：：わかれ唄

高城のぼる

網あみを干す手に 降りしきる

涙まじりの 通り雨

いくら呼んでも 戻ってこない

憎い愛しい あのひとは：

ひとり唄うの 恋ヶ浜

女浜唄：：わかれ唄

海が牙きばむく 時化しけの夜は

あなた偲しのんで 眠られぬ

花は散つても まだ散りそめぬ

今もやさしい 思い出よ：

月に唄うの 岩影つみかげで

女浜唄：：わかれ唄

未練心を たたんでみても

たたみきれない 面影が

五合徳利 手料理で

待つて長夜の 秋の暮れ：

酔って唄うの 番小屋で

女浜唄：：わかれ唄

夜想曲

高田 れい子

恋という言葉さえ、忘れていたぐらい
何だか分からず、あなたをおもっていた
有明の月、何度見たかしら
待っても、待っても、夢ばかり

あんなこともあったね、そうね、そうだったね
笑いながら、そんな風に
話せる日が来るのかしら
今は涙だけ、今はため息だけ
夜露のガウンに抱かれながら

君がそばにいただけで、心やすらぐんだ
あなたの言葉が、私に響きつづける
潮騒の音、何度聞いたかしら
目覚めても、目覚めても、風ばかり
あんなこともあったね、そうね、そうだったね
笑いながら、そんな風に
話せる日が来るのかしら
そして恋しい、あなたの吐息が
氷のシーツに抱かれながら

あんなこともあったね、そうね、そうだったね
笑いながら、そんな風に
話せる日が来るのかしら
涙のあとが、消えるその日から
新たなページを綴りましょう

夢 遍 路

高 塚 和 美

もしもあの日が 幻まぼろしならば
今夜も癒いやして あげられるのに
眠りつけずに 港に立てば
夢のかけらが ただようばかり
海よお願い 返しておくれ
ふたりの暮らしを あの人を

ひとり旅でも 同行どうぎょう二人
草鞋わらじを踏みしめ 寺から寺へ
道をたずねて 歩いていても
だめね女の 明日あしたに迷う
迷いながらも 生きてく事を
許して下さい 弘法だっぴ大師様

風に抱かれた 紅葉もみぢの宿で
湯舟につかれば あなたが浮かぶ
忘れられない 愛いとしい日々が
めぐりめぐって 涙を誘う
やせた心が この指先が
大きな背中を 恋しがる

海鳴りの町

高橋耕作

わずか二両の ローカル線の
さびれた駅舎は カメモ浜
ひとり暮らしの 寂しさに
いつか来ていた この町へ
海の香りが 恋しくなつて
面影重ねる 海鳴りの町

鞆ひとつに 身軽な服かりで
昔の想いで 連れに来た
旅で出会つて 恋をして
夢を語つた あの頃を
この眼閉じても 想いで探り
今でも帰れる 海鳴りの町

坂を下れば 海岸づたい
潮風冷たい 磯の宿
たった二年の 暮らしでも
忘れられない 幸福の
夢を断たれた 小さな家は
浜茄子揺れてる 海鳴りの町

おやし酒

高橋敏夫

おやし飲もうぜ 御苦勞酒を

俸はたらが一本 下げて来た

今日はおやじの 還曆かんれき祝い

苦勞人生 六十年を

家族かぞく揃うて 祝う酒

おやし囲んで 飲み干す酒に

娘と嫁女よめこが 踊り出す

村の若衆も 徳利を下げて

長い苦勞の 思い出話

一つ聞かせと 酒をつぐ

おやし一ちよこ 踊らんかいよ

やがては手拍子 足拍子

踊り踊らしや 若いもんじゃ負けん

ねじりハチマキ キリリとしめて

浮いたくの チドリ足

アカシアが泣いている

高 畠 じゅん子

歳が離れて いるせいだろうか

今日も言えない 愛していると

アカシアが 泣いている

銀の糸 雨の街

さみしげな横顔 みつめたら

抱きしめてしまう 俺だよ

やめてください 強めのたばこ

睨みながらも 可愛いく笑う

アカシアが 泣いている

細い肩 曲り角

最終に遅れて しまうのに

ひきとめてしまう 俺だよ

過去のうわさに こだわりもせず

逢える時間を 大事にしてる

アカシアが 泣いている

銀の糸 雨の街

幸せにしたいと 思うけど

古傷が痛む 俺だよ

渚なぎさの鎮魂歌レクイエム

多岐川 大介

あかつきの海風うみかぜは 肌につめたい

かすかにきみの 声を聴く

あの日大きな 波が来て

多くの生命いのちが 渦うず中なか

※ ザンザ ザザンザ ザンブラコ

ドンド ドドンド ドンブラコ

この海に ふかい思いを 馳はせながら

渚なぎさのはまなすの花 凜りんと咲け

幾いくひろの水底みずそこか 独りとどまり

そこからぼくが 見えますか

ちぎれとぎれた 仲だけど

忘れるはずない きみのこと

ザンザ ザザンザ ザンブラコ

ドンド ドドンド ドンブラコ

果てしない 夢のあとさき 弔ひびとって

渚なぎさのはまなすの花 波に散れ

※ リフレイン

紫陽花の歌

たきの えいじ

沢風嬉れし 紫陽花の

乙女の夢似し

窓に揺れ 薫る

時を迎え

赤い横顔心なくさめ

今はただ偲ぶ思いに

日の落ちる

幼き頃の 思影に

静かの裏山

指指し ながむ

橋に揺られ

白い姿の紫陽花は

誰の為花を結んで

咲くものと

たとえゴーストでも

たくわん

受入れ難い アクシデント

やり場のない気持ち どう受け止めて 乗り越えるのか

辛く悲しい時間は 忘れられない

それでもいつか 旅立ちは来る

心の糧 みつかる日まで

あなたとの想い出を よりどころにして生きたい

たとえゴーストでもいい

空っぽの身体の芯 暖めてくれれば…

降り止まぬ雨 マイレイン

帰省ラッシュの都会 走る車も無く 人影もまばら

身動きできない自分を ワイパーだけが

定期的に 視界広げる

シフトレバー 握った掌

気付けば僅かに動き あなたの温もり求めた

たとえゴーストでもいい

空っぽのサイドシート 暖めてくれれば…

過ぎ去った日々 ハッピーネス

ベランダ越しに二人 同じ息をして 見つめてた夜空

高速のイルミネーション 遙かかなたに

夢と希望 未来映した

土砂降りの 雨の時さえ

「天からの恵み」と笑った あなたの仕草消せない

たとえゴーストでもいい

空っぽの心の中 暖めてくれれば…

たとえゴーストでもいい

空っぽの心の中 暖めてくれれば…

九頭竜川

たけ美

九頭竜川よ あなたは父の川

とがった心 けずりながら

荒瀬 早瀬 越えて行く

やさしさは強さだと

時代ときにぶつかりながら教えてくれた

山水いすいの生命 集めて

日本海へと たどり着く

九頭竜川よ 時には母の川

清らかな水が 映し出した

まるい 笑顔 母の顔

ひだまりの暖かさ

季節ときに移ろいながら伝えてくれた

喜びの春を 追いかけて

心あふれて 流れ行く

九頭竜川よ あなたは愛の川

こぼれた涙 拾い集め

空へ 空へ 返してく

いくつもの星になり

愛にはぐれた心包んでくれる

永遠の時を つないで

今も豊かに 流れ行く

よされ津軽の俺わだの里

田 沢 庄 箒

寝ても覚めても じゃわめぐな

この眼のおくに ちらついで

心が逸る 気はおどる

版画ほろはみ仏 ありがたや

めぐるこの世の 花鳥風月びと女の肌

ねぶた囃子が じゃわめぐな

津軽の大地 ゆるがして

跳はね人にゆくか 俺わだもまた

この手やすめて 夏ひと夜

ねぶた見えるが お岩木山よ八甲田

春夏秋冬 じゃわめぐな

地吹雪じふゆき 嵐 吹かばふけ

版木もくめに浮かぶ いのち炎びが

俺に彫れよと 燃えさかる

ここは津軽の よされ津軽の俺の里

岬のマリア様

田島隆夫

岬の崖の 上に立つ

茜に染まる マリア様

天草漁師 心の灯台あかり

両手を合わす 船の上

授かり受ける 神の愛

大漁無事の 導きを

幸福しあわせ満ちた 港町

祖先の苦勞 あればこそ

天草漁師 心の灯台

忘れちゃならぬ 過去の傷痕きず

子供が走る 栈橋へ

平和の鐘が 鳴り響く

毎日漁場うしみで 舵をとる

あなたのおかげ マリア様

天草漁師 心の灯台

親子で仰ぎ 十字きる

我が家へ帰る 崎津港さきつへと

エンジン上げて 元氣よく

愛をありがとう

建石 一

一日が 終わる時

明日があるわと 眠るけど

一年が 終わる頃

何故だかあれこれ ふと想う

目指したことは 出来たかしら

少しは夢が 咲いたかしら

にがい痛みも あったけれど

私なりに 幸せだった

ありがとう みんな みんな

ありがとう 愛をありがとう

聖夜の夜 すぎたなら

今年も数えて あとわずか

年賀状 書きながら

あなたの名前で 手がとまる

ステキな人は 出来たかしら

一人のままです いるのかしら

愛と涙を 重ねながら

私らしく 歩いてみます

ありがとう みんな みんな

ありがとう 愛をありがとう

あなたとならば

田中いづき

雨音を聞きながら
欲張りな 私は思う
あなたとならば
もっと幸せに なれたかしらと
あなたとならば
もっと もっともっとならば

あの頃の 忘れ物
今更取りに 戻れない

ガラス窓 透明の
水玉が 流れて消える
あなたとならば
どんなおしゃべりを してるでしょうか
あなたとならば
どんな どんな…
この店は あのまま
あなたの声が 聞けそうで

雨の中 くちづけて
夢を見た 二人の未来
あなたとならば
きつと思ひ残す ことはないはず
あなたとならば
きつと きつと きつと…
その愛は 遠い過去
心の中に 眠らせよう

つれそい坂

田中なるみ

俺の女房に 来てくれるかと
言われたあの日を 忘れない
窓に明かりを 灯すよな

小さな幸せ 守る旅

あなたが頼り 連れ添い坂は
いつしか真ん中 過ぎました

昭和気質の あなたの女房

上手にこなせて 来たでしょか

苦楽一緒に 泣き笑い

迎えた平成 夢半ば

あなたと泣いた 連れ添い坂の

涙の苦さも 懐かしい

俺の女房で 良かったらどうか

暦を捲って 呟いた

巡る季節の 縁側で

思い出話を 辿る旅

あなたと一緒に 連れ添い坂は

天まで続いて いるのです

哀愁しぐれ

たなか ゆきをを

恋につまづき よろけて縋すがる

出合であいがしらの 古暖簾

幸せどこだ 夢どこだ

辛い思いを 枯れ葉のように

風にあずけて あゝ…ひとり酒

この手離はなせば 他人になると

尊たか気にして 抱いた肩

幸せどこだ 夢どこだ

水を差されて 運命さだめに負けて

逃げたあの夜も あゝ…秋しぐれ

雨が邪魔じゃまして 見えない絆

たぐり寄せても また切れる

幸せどこだ 夢どこだ

今日は泣いても 明日は笑う

望み肴さかなに あゝ…偲おもひ酒

麗良の湖

谷口文彦

朝靄^{もや}にけむる湖畔で
幼い夢を 呼んでみる
叶うと信じて 歩いてきたの
見えない未来^{あした}に 泣いたけど
あなたは 何も 教えてくれない
霧の摩周湖 それが現実
そこに想いを写すため
昨夜東京^{きのうまち}をたちました
教えて 水面^{みなも}よ 迷い晴らして
お願い 麗良^{れいらう}の湖

朝霧が揺れる湖畔で
大きな夢が 走り出す
出来ると信じて がんばり行こう
希望^{あした}の未来が 見えるはず
湖^{うみ}が 全てを 教えてくれる
明^{あした}けの摩周湖 それが眞実
ここで想いを誓うから
今夜東京^{まね}へ戻ります
ありがとう 水面よ 帰ってきます
さよなら 麗良^{れいらう}の湖

大きな希望が 朝靄^{あした}を晴らしたの
見えたわ 水面よ 迷い晴れたわ
ありがとう 麗良^{れいらう}の湖

みちのくの青空そら

たにはら
伸

海の 悪魔か 悪戯いたずらか
寄せて 返して 応えぬ津波なみよ

大事な人は 何処行なった

私の人生 プツツリ切れた

がんばって もう一度 がんばって 生きるのよ

冬を 越えれば

春の花咲く みちのくの青空そら

笑顔 寄り添う 思い出の

記念写真に 涙が落ちる

小鳥も 風も 聞こえない

みどりの清流みずも 途絶えたけれど

がんばって もう一度 がんばって 創るのよ

守る ふるさと

ごらん やさしい みちのくの青空そら

人の 生命いのちの 尊さを

きつと この子も 悟ったでしょう

はじける夏が きつと来る

祭りの太鼓 必らず響く

がんばって もう一度 がんばって 進むのよ

握る 拳に

朝日 眩しい みちのくの青空そら

雲

多野 亮

雲は悠々 大空かける
ひとりで我が道 俺はゆく
あま雲 うね雲 おぼろ雲
弱音はくなよ 男なら
変幻自在の 雲のよに
生きてゆくんだ 生きてみる

白い浮雲 おしえておくれ
そこから故郷 見えるかい
きり雲 つみ雲 なみだ雲
背中まるめた 母さんが
待つてるだろ うな 逢いたいな
帰りたいけど 帰れない

今はわた雲 沈んでいても
明日はてっぺん 走る雲
むら雲 うす雲 いわし雲
男ひと華 飾るまで
ふんばりどころだ ここいらが
流れ雲だよ 人生は

東京スカイツリーの詩

玉利 要

男 男の魂^{ミタマ}を 引き裂くような
墨田の花火が 胸こがす
女 別れの夜に ふさわしい
スカイツリーの すばらしさ
男 これが最後の 乾杯だ
女 これが人生 スタートよ
男 今夜の君は 綺麗だよ
女 今更くどいて
二人 どうするの…

男 女の可愛い 真っ赤な嘘で
染まる下町 恋ホテル
女 男の指と 背中には
スカイツリーが 良く似合う
男 君に恋人 出来たのか
女 それを今夜は 言わないで
男 大事にするんだ その男を
女 あなたに奪って
二人 欲しかった…

男 遠くにチラチラ 浅草あかり
想い出すだろ あの夜を
女 女はいつも 前向きに
スカイツリーを バネにする
男 君に命も くれてやる
女 嘘じゃないのね その言葉
男 二人の絆を 散りばめた
女 大きな花火を
二人 上げましょう…

遠花火とおはなび

田村忠雄

人生の坂で 一息つきながら
なにげなく見上げた空に 一番星
あの女ひとが浮かぶ いとしい眼差しが…
逢うたびに 確かめ合ったのに
手のひらを こぼれてしまった恋
ローカルの 畠 木立のその果てに
打ち上がる 音のない遠花火

人生の道が 平らなあの頃に
偶然が重なり合った 恋ひとつ
二人とも同じ 想いに舞い上がり
バラ色の 季節の変わり目を
気づかずに こわれてしまった恋
世間とは 月にむら雲 花に風
打ち上がる 音のない遠花火

人生の坂を 再び踏み出せば
吹く風にまじって女ひとの 声がする
あの女ひとが浮かぶ いとしい眼差しが…
もしかして どこかで見てるかも
叶わずに 終ってしまった恋
ローカルの 畠 木立のその果てに
打ち上がる 音のない遠花火

むさし野暮色

千秋かな

ここむさし野に 咲くという

白い可憐な ねむらさき

手折って髪に 飾ったら

「きれいだよ」 囁やいてくれますか

あなたの愛を まさぐりながら

そぞろ歩きの 夕まぐれ

玉川上水 むらさき橋

ただひたすらに 恋い慕う

すがる心を 振り捨てて

家路を急ぐ うしろ姿かけ

「帰さない」 追いかけて離さない

生命いのちを二つ 重ねて燃えて

堕ちて行きます 罪の淵

玉川上水 むらさき橋

あめ雨が降る 夜深く

闇を手探り 呼ぶ瀬音

逢瀬の証し 紅い腰紐ひも

「逝ゆきましよう」 絡みつく修羅地獄

黄泉路の果ての 果てまで一緒

悔いはしません 哭なきません

玉川上水 むらさき橋

ふたたびの男

千草三紀

不思議だわ あなたという男
別れたはずなのに

初めて会った 気がするわ

雨上がり 心の虹が ゆらめきながら

シャガール色の 空につながる

らせん階段 昇れば落ちる

この恋だけは なくしたくない

偶然を よそおう罪作り

あれからわたしなら

死ぬほど泣いて 暮らしたわ

白ワイン 真っ赤な薔薇の 花びら浮かべ

素肌が染まる ロゼの香りに

帰したくない いのちが痛い

この恋だけは なくしたくない

不思議だわ あなたという男

別れたはずなのに

過去なら何処か 置き忘れ

抱かれて 涙が染みる 幸せ行きの

シャガール色の 愛の夜明けよ

時は止まるの ふたりの世界

この恋だけは なくしたくない

わたし脇役 はまり役

ちくし 次郎

晴れ間つかの間 またすぐ曇り

あしたも読めない この浮世

あなたの苦勞が わかるから

柔な言葉は かけられませんが

夕餉ゆうげの支度 整うまでは

休んで下さい ゆつくりと

いつかおまえを 飾ってやると

変わらぬ温もり くれるひと

いいよ私は このままで

所帯しみこむ おんなでいいの

あなたの夢が 花咲くように

笑って泥んこ 土になる

我慢辛抱 そのうちきつと

あなたの値打ちに 値札ふだがつく

世に出るその日は その時は

声をかけたい 日本にっぽん一と

男とおんな 齒車はしぐるましだい

私は脇役 はまり役

あきらめながら

辻 正司

心の奥に しのばせて

いつも 笑顔を

よそおって いるけれど

本当の 私の 気持 わかるはずない

わかってほしい… 君想い

あきらめながら…

心を かくし 言えないで

わたし 泣きたい

泣きたいよ つらいのよ

なんにも ないよに ひとり 涙こらえて

わかってほしい… 逢いたくて

あきらめながら…

ひそかな 想い つのらせて

あなた 逢いたい

逢いたいよ 待ってるの

優しい あなたを 夢に 逢えるあてない

わかってほしい… 恋焦がれ

あきらめながら…

微笑^{ほほえ}み

つじ伸一

俺は一生 忘れない
老いぼれたって 忘れない
今もはつきり 思い出す
あの日のお前の 微笑を…

十年前の ことだ
死のうと決めた 俺が
汽車を降りたら そこは
風さえ凍てつく 岬
荒れる波音 だけが
聞こえる酒場に 寄って
これが最後の 酒と
ひと口飲んで … 哭いた
明日の朝には この海に
沈んでしまおう 俺なんだ
姉や弟 友の顔
浮かんできたっけ 目の奥に…

誰かが俺の 肩に
コートをそっと 掛けた
赤くストーヴ 炎えて
それでも震える 肩に
顔を上げたら 俺を
見つめてたのが お前
少し小首を 傾げ
微笑んでたね … お前
あの日お前に 出逢わなきゃ
とつくに死んだ 俺だった
消えた夢など もう二度と
戻りはしないと 思ってた…

どんな言葉を 聞くよりも
救われたのさ 微笑みに
俺は生きてる あの日から
お前に出逢った あの日から…

能登の浜唄 の と は ま う た

津田雅道

切り立つ断崖 吠えながら
波のしぶきが 駆けあがる

日本海に 色をそえ

咲いて散りゆく 波の花
冬を迎えた 曾々木の海は
窓岩砕いて 化粧する

御陣乗太鼓を 打ちならし

能登の男が 浜に舞う

日本海の 荒波に

負けてなるかと 汗が飛ぶ

意地と度胸の 心に惚れた

可愛いあの娘に 届くまで

禄剛崎から 見上げれば

立山連峰 陽が登る

日本海を 股にかけ

七ツ島へと 波を切る

越えて行きたい あの娘の許へ

情けが沁みるよ 佐渡の島

恋の華はな

つのかわ 圭介

帰るあたなの背せにすぎり
泣けば谷間のほととぎす
別れ惜んでもらい啼く
命はかない恋ならば
一層このまま あなたと二人
堕ちていいのよ —— どこまでも

夢のなごりをだきながら
時間ときを遅れて宿を出る
おんなごろの哀しさを
知るやしらずや雨が降る
ぬれた坂道 あなたのを
追えばつまづく —— 恋未練

いばら野ずえの草でさえ
春の息吹いぶきに咲くものを
花よ限りと咲くいのち
すべて儂はかない恋の華
死ぬも生きるも あなたと二人
耐へてまちます —— いつまでも

絆きずな

船ぶね

つわの
光路

天津波つなみに獵船りようせん 呑のまれた沖海うしみへ

決意おもいあらたに 銀婚船ぎんこんふな出で

祝いわいう陽ひの出でに 輝ひかる頬ほほ

嫌きらねしぶぎと ぬぐつたお前

ああー黄泉あのよまで ああー鳥山やま追おうぜ

「これでいいのか」「だからほれたの」

ザンプ、ザンブラ・ザンプ、ザンブラ 絆船

漁港みなとでいちばん うわさの美人

フラレ覚悟おとこで 好きだと告げた

海男冥利おとこの 大漁たいよに

すぎた嫁御よめと 仲間なかまもほめる

ああーきかん坊ぼの ああー子守役おもりやく

「これでいいのか」「だからほれたの」

ザンプ、ザンブラ・ザンプ、ザンブラ 絆船

名もなく貧しく きれいになんて

心かざれば 世間は笑う

鮪御殿まぐろごてんを どんと建て

お前泣かせた わがまま返す

ああーこの生命いのち ああー夢まみれ

「これでいいのか」「だからほれたの」

ザンプ、ザンブラ・ザンプ、ザンブラ 絆船

万葉忘れ路の旅

出口タツ香

北を背にして 乗り継いで
明日は何処の 駅泊まり
冷たい言葉 置いてきました
貴方次第で 心が泣いて
夢も途切れる 長の旅
遠くに霞んで 妹背の山が
道行きずりの 私を包む
夕暮れ金色 万葉忘れ路の旅

窓に重なる 横顔が
拗ねた貴方に 瓜二つ
おぼろ月夜の 悪戯だとして
どこか少しは 似ているものね
人にまぎれて 長の旅
淡嶋花月 加太の海から
小舟揺れます 流し雛として
心甲う 万葉忘れ路の旅

紀ノ川越えて 我が恋も
散って歌詠む 和歌の浦
優しい言葉 浮かんで消えて
入江景色に 心が和む
南紀の国 長の旅
遠くにそびえる 名倉の山が
時を重ねる 日の入りどきに
薄日紅色 万葉忘れ路の旅

恋時雨

てしがはらじろう

陽春はるひかりの陽射ひかりに 照てらされて

紅あかくひらいた 恋あひのはな

萌もえて焦こがれて ころの妻ひとに

一夜ひとよ花火ひなの 切きなさは

逢あいたい 逢あいたい 思おもい出での街

ああ おんなの 恋こしぐれ

幸さいせはこぶ この舟ふねに

あなた一人ひとりが 好すきだから

命いのちあずけて 追おいて行いきます

惚ほれているから 本ほん気きなの

逢あいたい 逢あいたい 愛あいしさ募もる

ああ おんなの 恋こしぐれ

季節ときを知らせる アサガオが

いろ鮮あざやかに 咲さきほこり

胸むね打うつ恋こに ころが篤あつい

あなたを今いまも 好すきなよ

逢あいたい 逢あいたい 泪なみだがおちる

ああ おんなの 恋こしぐれ

双振りすご

寺島幸生

あなたに似た人 見かけてしまい
溜息押し寄せ 瞳をとじた
悔やみきれない 別れた時の
私のわがまま よみがえるわ
もしも恋愛れんあいに
双六みたいな 振り出しあつたら
マス目戻つて 出逢う頃から
やり直したい

路地裏こぼれる 誰かの声が
幸せそうだわ 切なくなるわ
あれはいつの日 どれほど経つ
心の底から 笑えた日は
もしも幸せに
双六みたいな 振り出しあつたら
すぐに戻つて 感謝しながら
ほほ笑んでたい

あなたのケータイ 番号消け去して
いるのに頭が 覚えてるわ
二度と掛けない 強がりながら
指先うずいて ふるえてるの
もしも恋愛れんあいに
双六みたいな 振り出しあつても
やはり戻らず 今のここから
勇気を出すわ

酒と前金

天馬良

酒は仕事の 御用聞き

金は明日の 任の役

それが口癖 作曲家が逝った

五十路半ばの 作曲家が逝った

凄いメロデー 書く奴だった

酒と前金 大好きだった。バカヤロー

酒は病の 隠し立て

金の安めに 苦い笑み

気まま我がまま 作曲家が逝った

口下手職人 作曲家が逝った

苦し紛れを 書く奴だった

酒と前金 大好きだった。バカヤロー

酒は頭を 空にする

金は奇抜な 曲を呼ぶ

早朝だけ仕事の 作曲家が逝った

昼から酒積け 作曲家が逝った

歌手泣かせを 書く奴だった

酒と前金 大好きだった。バカヤロー

ツルの希望^{ゆめ}

戸川智砂子

なないろの風船を

くわえて翔^とんできた

ツルはみんなの人気者

あかい希望^{ゆめ}は女の子

あおい希望^{ゆめ}は男の子

もらってない子はだれだろう

ヤ ヤヤ ヤ レインボー

ヤ ヤヤ ヤ レインボー

心の橋をつくろうよ

ゆっくり ゆっくりと

つないだ両手は暖かい

なないろの幸せを

くばって翔^とんでゆく

つるのすがたは窓の外

しろい笑顔^{かお}がピエロなら

くろい笑顔^{かお}はマジシャンだ

くるりとまわって輪をえがく

ワ ワワ ワ レインボー

ワ ワワ ワ レインボー

生命^{いのち}の歌をうたおうよ

にっこり にっこりと

みんなの地球は美しい

送り火

飛田多恵子

ひとは悲しいものだから

山のむこうの空遠く

永遠とわの命をいただいて

生きる姿を希ねがいます

父よ 母よ 見えますか

京都五山の 送り火燃える

今も 心に抱いてる

遠いあの日の野辺のべの道

遊び疲れて おんぶした

広い背中の温もりを

兄よ 友よ 見えますか

送るこの世の 愛の火燃えろ

ひとははかなく過ぎゆけど

愛いとしい姿 今も在ある

右大文字 尽きる頃

左大文字 燃え盛さかる

山よ 風よ 大空よ

旅路はるかに 送り火照らせ

獅子の鬣しし たてがみ

富岡慶信

愛するおまえのためならば
牙ある虎の強さは、ないけれど
おまえを守ることが、出来るなら
世界を敵に、まわしても
牙ある虎の強さは、ないけれど
おまえだけが、判ってくれば
牙ある虎の強さは、ないけれど
おまえだけが、判ってくれば

愛する家族のためならば
角ある鹿の威厳は、ないけれど
家族を守ることが、出来るなら
この世の命、死するとも
角ある鹿の威厳は、ないけれど
おまえ達が、覚えてくれれば
角ある鹿の威厳は、ないけれど
おまえ達が、覚えてくれれば

愛する故郷こくにのためならば
鬣ある獅子の風格は、ないけれど
故郷こくにを守ることが、出来るなら
他人ひとに知られず、死するとも
鬣ある獅子の風格は、ないけれど
愛する故郷が、守れば
鬣ある獅子の風格は、ないけれど
愛する故郷が、守れば

詩うた
魂こころ

富松正義

決きめた魂こころの道みちならば

前まえに進すすんで行いく事ことが

弱よわ音ねはいたら負まけになる

火ひの粉こなの中なかに己おのれを賭かけて

くやし涙なみだも炎ほのうがはらう

歡かん喜きゆめみる大舞おおぶたい台

人ひとの愚痴ぐちなど聞きかずして

うしろ見みるなど匠しの言こと葉は

やると男おとこが一途ひとすじに

今いまは咲さかない名なも無ない花はなが

強つよい雨風あめかせ踏ふまれて耐たえて

みせろ咲さかせて華舞はなぶたい台

添そえず別わかれた女ひともいる

耐たえてよりそう影かげもある

つらい男おとこの涙雨なみだり

みせてならない心こころの内うち

いつかあびたい喝采かつさいの花はな

刻きざむ魂こころのゆめ舞ぶたい台

好きやねん大阪

外^と
山^{やま}
尚^{ひさ}
子^こ

赤い灯青い灯 川面を染めて

道頓堀に 夜が来る

みんなが集まる この町やから

好きやねん大阪 大阪好きやねん

小指と小指 からませながら

恋するふたりの 戎橋

思っていること 今夜もひとつ

聞かせて欲しい 法善寺

約束交した この町やから

好きやねん大阪 大阪好きやねん

昔も今も 恋人達が

水掛不動に 願いごと

逢っても逢っても 時間が欲しい

一緒にいたい 御堂筋

あなたと出逢った この町やから

好きやねん大阪 大阪好きやねん

明日もまたと 囁くように

いちよりの並木は 甘い風

今は このまま

鳥羽貞子

なくしたものは 戻らない
手も足も 昔のように動かない
それでも私は 生きている
おなかも空^すくし 声も出る
おかしい時は 笑い合う
いばらだらけの遠い道
のんびり ゆっくり歩こうよ

青いお空は まぶしいね
風が吹く 昨日も今日も 声かける
あなたは このまま それで良^よい
父^{ちち}さんも 母^{かあ}さんも
空の上から見ているよ
のんびり ゆっくり 歩こうよ

辛^{しん}抱^ぼづよさは 親^{おや}ゆずり
じっと我^がまん 明^あ日は晴^はれる 夕^ゆ焼^やけだ
みちのく ふるさと なつかしい
でこぼこだらけの遠い道
のんびり ゆっくり 歩こうよ

感謝

長澤 あきら

親にもらった このいのち
明日に生きるが 世のさだめ
人に出逢える うれしいえがお
友が友呼ぶ 夢を呼ぶ
あなたにいつも 感謝しています
あなたに私は 感謝しています

雨が降ったら 花は咲く
風が吹いたら 実花落ちる
人は生まれて つながる糸を
知らず知らずに 結び合う
あなたにいつも 感謝しています
あなたに私は 感謝しています

たった一度の 人生に
逢える幸せ 又別れ
人はここで いい汗かけば
きつといい他人 めぐりあう
あなたにいつも 感謝しています
あなたに私は 感謝しています
感謝しています

星になりたいブルース

ながた 恵 秋

あなたにいつも 抱かれて

星になりたいの

遠い銀河で二人きり 夢を見ていたい

口づけのたびきつと 星が流れるわ

星になりたいブルース

あなたに腕を からませて

星になりたいの

永遠の命を二人でと 指きりをするの

胸のときめききつと オーロラのせいね

星になりたいブルース

あなたにいつも 見つめられ

星になりたいの

愛の銀河で二人きり ささやき合うのよ

甘いため息きつと ほうき星になる

星になりたいブルース

薩摩杜氏

ながた じょうじ

故郷こくにを出るとき 親父が言った

石の上にも 三年だ

あれから数えりや 五十年

この道一筋 焼酎さけ造り

蔵子くらこつづけた 苦勞の日々が

薩摩杜氏の 目に浮かぶ

夢を仕込んだ こだわりの焼酎さけ

心つたわる ひと滴

味よしコクよし 香りよし

この道一筋 焼酎さけ造り

蔵子くらこ共々 喜び分かち

薩摩杜氏の むね躍る

俺おれもなりたい 親父のように

倅せがれいきがる 日本一

だったらお前も なってみる

この道一筋 焼酎さけ造り

蔵子くらこやらなきや 半人前だ

薩摩杜氏の 目が光る

京の夏

長塚京子

夏を迎える 水無月の

高雄は夕闇 京都の山中

源氏ほたるの 飛び交う舞も

わずか十日で 燃え尽きる

悲しいほどに 美しい

愛の光よ 届けとばかり

祇園ばやしに 誘われて

賑わい溢れる 京都の町

笛やかねの音 足元急かし

下駄を鳴らして 八坂まで

保昌山に 願ったら

恋の思いは 叶うでしょうか

夏の終りを 惜しむよに

山並み日暮れる 京都の空

映す妙法 船形鳥居

五山送り火 大文字

あの世にねむる 魂の

深い安らぎ 炎に祈る

おふくろ波止場

中村 勲

時間だよ おふくろが

そこまで送ると いいながら

私の後を ついてくる

そこまでよ そこまでよ

その角までと いいながら

船着き波止場 ついてきた

栈橋で お別れね

今度は今度は いつ帰る

次の帰りを まってるよ

きてくれて ありがとう

波止場の別れ 惜しむよに

寂しい顔で 笑ってた

元気でね 気をつけて

船が波止場を 離れると

両手いっぱい 手をふって

さようなら さようなら

波間に涙 流されて

母の姿が 遠ざかる

門かど 出で

那須野 巖

出雲いづもの神様 ありがとう

氏神うぢがみさまにも ありがとう

良き日に結ばれ 門出かどでの宴うたげ

祝いの言葉に つつまれて

一生一度の 華はなになる

真面目まじめな父ちちさん 泣いていた

明るい母かあさん にこにここと

笑顔がこぼれる 門出かどでの祝い

ご縁えんをいただき 神かみさまに

心の中から 感謝する

ふたりで漕こぎ出す 夫婦めおとごね舟

ご両家りょうけめでたい 宝舟たからぶね

雨の日風の日 乗り越のりこえながら

幸せ築つくいて 下さいね

一生一度の この道を。

人生舟

仁井谷 俊也

ふたりでこの世の 大海原おほうなばらに

船出したのが 昨日のようさ

苦勞は大波 涙は小波

それでも今日まで 耐えてきた

「頑張ろな… これからも…」

おれとおまえの 人生舟

頑固で一途で 世渡り下手べたで

それを裏から ささえてくれる

おまえのやさしさ ころの温ぬくみ

故郷のおふくろ 思いだす

「寄り添って… 何処までも…」

おれとおまえの 人生舟

苦しい時には おまえの笑顔

そうさ何度も 勇ちから気をくれた

嵐が過ぎれば 希望の夜明け

しあわせ港は もう近い

「これからも… 一緒だよ…」

おれとおまえの 人生舟

前を向いて歩こう

西井戸 学

澄みわたる この空の下
悔しさや悲しみは ため込まないで
昨日を忘れず 前を向いて歩こう
ゆずり合おう互いに 助け合おういつでも
明日に向かって 前を向いて歩こう
両手の中に 力を込めて
希望の光 見つけよう
悔しさや悲しみは ため込まないで
明るい笑顔で 前を向いて歩こう

*

(口笛……)

困難に まず一歩から
負けるなよ逃げるなよ あきらめないで
泣きたい時にも 前を向いて歩こう
子供たちの笑顔は 大人たちの励まし
命に感謝し 前を向いて歩こう
ひとりじゃないよ みんながいるさ
一つになって がんばろう
負けるなよ逃げるなよ あきらめないで
元気をもらって 前を向いて歩こう

一日を 日々積み重ね
雨の日も風の日も 曇りの時も
まっすぐ見つめて 前を向いて歩こう
いつの日にか思いは 花のように開くさ
新たなページへ 前を向いて歩こう
心はひろく 心は若く
いつでも夢は 先にある
雨の日も風の日も 曇りの時も
春夏秋冬 前を向いて歩こう
前を向いて歩こう

昭和の女

西田 ただすけ

わたしはやっぱり 昭和の女

生まれてくるのが 遅かったのね

駄目な男を ほっとけなくて

尽くして尽くして すてられた

それでも懲りない 世話やき女

義理と人情の 古い古い女です

苦勞もしてきた 昭和の女

してきた苦勞が 身につかないの

もって生まれた 姐さん氣質

ぐうたら男に つまずいた

騙され上手の 泣かされ上手

医者も治せぬ 馬鹿な馬鹿な女です

古風が取り柄の 昭和の女

居たっていいでしょ 一人や二人

独りよがりの 世渡り下手も

母さんゆずりの 女伊達

これでは幸せ 遠のくばかり

時代おくれの 野暮な野暮な女です

こころ花

西平としこ

浮世人生 永い旅

生きる試練も 耐え抜いた

あらたな春の日 巡る日を

明日へ夢を 追いかけてあしたながら

こころの花を 咲かそうよ

どんな時代の 流れにも

染まることなき この生命いのち

北風吹こうと 前向に

明日へ夢を あずけて祈る

いのちの花を 咲かせたい

広い世間の 片すみに

人のぬくみに 感謝する

くいなき我が道 歩こうよ

明日へ夢を この手の中へ

いのちの花を 咲かすとも

今夜の君は帰したくない

西村忠一

そつと 手をとり 寄り添えば

君の 温もり 伝わってくる

ヘッド ライトが 近ずいて

遠くへ 消える 海岸通り

ああ…あ ああ…あ

今夜の 君は とても可愛いよ

今夜の 君は 帰したくない

何も 言わずに 居るけれど

君の 心が 伝わってくる

出船 入り船 行き交いて

汽笛が むせぶ 夜霧の町よ

ああ…あ ああ…あ

今夜の 君は とても素敵だよ

今夜の 君は 帰したくない

二人 しっかりと 抱き合えば

君の 鼓動が 伝わってくる

時は すぎ行く 何時のまに

とぼりが 下りる 夜更けの町よ

ああ…あ ああ…あ

今夜の 君は とても愛しいよ

今夜の 君は 帰したくない

なでしこ夢花（応援歌）

西山和風

なにか この胸 ぶつけよう
でかい 夢追う 人絆
しぜん 喜ぶ 沢風に
こころ 鍛えた 土を練り
夢を 咲かせる 種をまく
花は なでしこ 夢の花
「咲かせ なでしこ 一ゴール」

なには なくとも 夢をもち
でかい 心で 育くんで
しれん 負けずに 乗り越えた
こころ 合わせる 一筋が
夢を 咲かせる 幸せの
花は なでしこ 夢の花
「咲かせ なでしこ 一ゴール」

ながい 穂波の 山郷に
でかい 月夜に 希かけ
しかり しかられ 励まされ
こころ 寄せあい 競いあい
夢を 咲かせて 日本晴れ
花は なでしこ 夢の花
「咲かせ なでしこ 一ゴール」

天の恋

西脇 求

一度だけでも いいのです

何にも言わずに あなたに抱かれ

女の嬉しき ほどよく掴み

生きる希望を いただく私

あなたに縋るは 天の恋

惚れた男と 夜明けまで

もおつといたい の あなたとならば

女の幸福 二人の絆

鶴が天まで 羽撃くように

この世に咲かせる 天の恋

好いたあなたに 護衛られて

身体を寄せ合い 一夜を過ごす

女の幸福 臉を濡らし

惚れて尽すわ あなたにだけと

この身を燃やすは 天の恋

私の子守歌（妻に捧げる歌……）

沼田落葉

ねんねんころりよ おころりよ

ねんねんころりよ おころりよ

ねんねんころりよ 抱いた子が

いつのまにやら 人の母

時の流れは 遠いもの

私も齡としを とりました

ねんねんころりよ おころりよ

ねんねんころりよ 孫の手が

私の杖と なりました

かわりばんこの 人生と

心のなかで 掌てを合あわす

ねんねんころりよ おころりよ

ねんねんころりの 人生は

嵐もあれば 晴れもある

妻と二人で 手をとって

枯れ木に花を 咲かせたい

枯れ木に花を 咲かせたい

養老桜

N
O
M
O
S
S

流れたおやか 養老川よ

先人様の 血汗川

次の時代に 繋ぎたい

そんな願いの 養老桜

里を愛する 兵達の

熱い思いの 絆花

見えない心 見えない苦勞

いつかはきつと 実るもの

人のご恩に 応えたい

感謝笑顔の 養老桜

川は知ってる すべてのことを

映えて穏やか 水鏡

根強い花は すぐには咲かぬ

雨風耐えて 春を待つ

人の思い出 抱きしめて

深く根おろす 養老桜

風を彩る 田園みどりに抱かれ

夢と希望の 晴れ姿

鍵 靴音

野 沢 冬 子

いつもの癖ね 鍵をバツクに
迷ったけど… 返しにきたの
よかった ドアが開いたわ
相変わらずね 吸殻 山ほど
あの頃 紫煙 嫌だった
☆でも いま なぜか 愛しい

ふるえていたの 鍵をさすとき
こわかったの ふたりのすべて
消された 部屋に 生け花が
でも そのままね 日焼けのカーテン
おもわず 胸に 抱きしめる
☆ぬくもり しみる あなたの…

時間がないわ 鍵をかけよう
なのに 椅子の 向こうに語る
あの時 あなた 白を切る
嘘つき 嫌い なじったけれど…
ひとりになって 気づいたの
☆いたわり 愛のやさしさ

☆あア あア 靴が 靴音
靴音が…

女の別れ旅

の
べ
ひろし

夜汽車の窓から 遠ざかる

あなたの想い出 町の灯よ

何も言わずに 置き手紙

そのままそつと 旅に出る

自分勝手な 女だと

今頃恨んで 見ているかしら

私と一緒に いることは

いつかあなたが つらくなる

ずっと馴染んだ 人だけど

別れることが いいのです

過去の想い出 振り返り

今まで過ごした 恋しさ募る

何処まで行こうか 悩むうち

涙が溢れて 止まらない

所詮わたしは 流れ花

今すぐこの身を 引くことを

ときが過ぎれば 分かれます

わたしを探さず 暮らしていてね

秋のしらべ

羽澤文子

淡い夕ぐれ 唄をまい

人を恋する 能舞台

季節の色に ぬられても

扇をかわず 裳裾まで

涙見せずに さよならと

風が奏でる 秋のしらべ

二度と戻らぬ 木の葉舟

流れ流れて 知らぬ町

愛する人の 面影と

川面にうつる 街灯り

思いだすほど 身を焦がし

水が奏でる 秋のしらべ

ススキ穂波が 闇にゆれ

集く虫の音 夜半の月

やさしく肩に 甘えたら

夜どうし鳴いて 宿近く

いつか夜明けが くるからと

琴が奏でる 秋のしらべ

望郷演歌

橋本和郎

出羽の山越え そのまた山の
雪に眠れる 羽後の国
根雪の中から 桜と梅が
それに負けじと 桃の花
咲いて競って 春となる
ここが古里 望郷演歌

出羽の山越え そのまた山の
緑豊かな 羽後の国
四方の山々 太鼓が響き
鹿島祭りの 幕が開く
先陣を競った 男伊達
あの娘恋しや 望郷演歌

出羽の山越え そのまた山の
黄金ささなみ 羽後の国
月に吼えてる 鳥海山に
崇く掲げた ころざし
今も競って 生きている
夢よひろがれ 望郷演歌

出羽の山越え そのまた山の
民謡が流れる 羽後の国
鯉の「タタキ」と 蔵の「タタキ」
誰が遺した 故郷の味
食べて競った 親子酒
心晴れ晴れ 望郷演歌

美術館の庭

橋 本 真寿美

駅からさほど 遠くないのに
こんなに静かな 美術館の庭
傍らに美大生のあなたが
居てくれた 青春時代あのころそのまま
ひとりで踏みしめる芝が
懐かしすぎる日々に
いとも容易く タイムスリップ

駅の人込みの中 手を振り
会えたら二人で 美術館の庭
その日の展覧会あの日の話を
してくれた 青春時代あのころのあなた
あなたの横顔と絵画えがきを
ぎこちない 足取りで
交互に眺めて いたわたし

あれから何故か 時の流れの中
気まずい別れになったふたり
時が経つ程 煌めきを増す
戻らない 青春時代あのころ あのころ
ひとりで描いてゆくには
人生は 描き辛い
今日はあなたの 個展です

独 路

ハチヤン・K

何処か遠くへ 行きたいな
そんな気がする 春の雨
何も不満は 無いけれど
独り旅路に 耽^{ふけ}りたい

何処か遠くへ 行きたいな
夏が来たのに 戻り梅雨
誰を捜して 不^{ほととぎす}如帰
濡れた翼^{じつばた}で 鳴いて飛ぶ

何処か遠くへ 行きたいな
日暮れ間近の 赤蜻蛉^{あかとんぼ}
幼昔の 初恋と
いつか来た道 歩きたい

何処か遠くへ 行きたいな
白い山茶花^{さざんか} 細い道
北に流れる 一つ星
独り夜空を 眺めたい

花の舞妓はん

華木 かおる

京の鴨川 河原町

お茶屋の軒先 ちようちん灯り

急ぐ舞妓の おこぼの姿

あゝ艶やかな 花のかんざし

だらりの帯は 京のおなごの花響

響く三味の音 花街の

格子の葉影を 遮りながら

歩く舞妓は 髪型おふく

あゝ哀愁の 石の畳に

花の香添える 京のおなごの立ち姿

祇園白川 巽橋

こぼれ灯揺らぐは すだれの座敷

踊る舞妓の 彩り舞台

あゝ艶やかな 花の館に

紅花咲かす 京のおなごの舞扇

幸福しあわせとんぼ

羽場 新一郎

好きやねん 好きやから

あんたにあげる この命

雨が降る日も 風の日も

苦勞笑顔の 登り坂

エンヤコラセと ついて行く

ふわりフワフワ 幸福とんぼ

ねえあんた ねえあんた

あんたと呼べば 傍にいる

母が選んだ 父のよに

真面目なんです 私うちの人

演歌なんかには なりません

路地の夕暮れ 幸福とんぼ

それぞれに 道がある

女の道も それぞれに

私うちは良かった この人で

夢はあんたの 風まかせ

この手離さず ついて行く

ふわりフワフワ 幸福とんぼ

津軽瞽女 つがるこせ

林 はやし

伸 しん

瞽女が弾く 三味の音は 口説き節

吹雪舞う街 かどずけ歩き

命の灯火 明日へと繋ぎ

よされ・よされと・撥ち打ち歩む

世間の冷たさ 凍れる身体

風が鳴き 荒れる海 波が飛ぶ

竜飛岬の 地吹雪受けて

七里の長浜 南へ下り

よされ・よされと・雪踏み進む

苦勞の道行 黒髪凍る

如月の 日本海 鱒ヶ沢

雪に埋もれる 御岩木山を

かすんだその眼が 心に映し

よされ・よされと・太棹抱いて

いつの日戻れる 故郷愛し

O K I N A W A

林 利 紀

O K I N A W A 遠いあこがれ

愛と平和が あった島

歴史がつけた 深い傷は

どうしたら 癒えるのか

蒼い月に 聞いてみる

六十数年 何ができたのか

立ちつくす 大地の上で

O K I N A W Aを 思う夜

O K I N A W A 花が溢れて

情と奇跡が 生きる島

おもろそうしは 愛の言葉

よみがえる 永遠よ

寄せる波に わびるほか

六十数年 何もできぬまま

ただ歌え 涙の歌を

O K I N A W Aに 寄せる歌

蒼い月に 聞いてみる

六十数年 何ができたのか

立ちつくす 大地の上で

O K I N A W Aを 思う夜

甌島郷士串良移住
こしきじまごうししくしらいじゆう

原 伸 二

天明四年春弥生

石より重い藩命に

四十七氏の武士が

甌手打を 立ち出でて

行くは串良の新天地

舞い散る花に訣別の

涙を流す 手打港

藩侯受命出郷関

(藩侯の命を受けて郷関を出ず)

決策完工拓殖顔

(策を決して完工拓殖の顔)

武士心情農芸志

(武士の心情は農芸の志)

多年忍耐築名山

(多年忍び耐えて名山を築く)

目指せし串良富ケ尾は

名ばかりのみの荒野原

しばし刀槍 棚に置き

握る鋤鋏 汗まみれ

偲ぶ先人 その辛苦

二百と二十(有余年)経し

輝く偉業 讃えなん

愛・まだ途中

原 文彦

すこしお仕事 長くなるけど

パパは帰って きますよと

今夜も悟さとしして 寝かせました

蝉鳴く夏か 祭りの秋か

それとも春の 桜のころか

わたしだって わたしだって 信じたい

あなたの帰りを 信じたい

星の夜には どれがあなたと

ひとつひとつに 問いかけて

あなたを探して 泣いてしまう

予約のままに おわったお店

はんぶん残る 焼酎ポトル

何もかもが 何もかもが まだ途中

愛する暮らしも まだ途中

蝉鳴く夏か 祭りの秋か

それとも春の 桜のころか

わたしだって わたしだって 信じたい

あなたの帰りを 信じたい

愛さずにいられない

美山明葉

まぶたの裏に 焼きついた悲しみ
大切なものすべて 無くしたんだ
虚しさをかかえ 祈りは届かなくて
泣いたりするもんかと 空を見上げた
苦しみや辛さなんか この世から消えればいい
たった一人 心閉ざした
だけど運命って奴は 気まぐれで曖昧さ
負けはしない 何があっても

過ぎた時など 振り返らなくていい
記憶の引き出しへと 仕舞い込んで
張り裂けるくらい ほんとは泣いたんだろう
闇の中で怯えた 日々は終わりさ
愛さずにいられないよ 真つすぐなその瞳
僕がそばに いてあげるから
心の中に燃える火を いつまでも消さないで
一度きりの 命のために

後悔はしたくないよ 魂が叫んでる
生まれ変わる あきらめないさ
澄んだ空を見上げれば 未来は微笑んでる
ありのままに 歩いてゆこう

自分を信じて 歩いてゆこう

この度の震災で辛い目にあっても、夢を捨てずに
笑顔で頑張っているたっくさんのこどもたちに捧げます。

命 ありがとう

平井歩果

泣きの幼な息子 胸に抱き
母と世別れ 儂なさに
辛さ幾く度 父の胸
貰い乳飲む 継る子よ……。
人の情けが 身に染みる。
…命… ありがとう。

セリフ // 坊よ“泣くんじゃねえ お前のお母さんは この世と別れた
// 寒いか“ 父ちゃんが胸であたためてやる。
明日は 人の情けで お前を預ける事に……。
「許しておくれ」。

辛い別れの 父と息子に
命預けて 拭く涙
胸に受け継ぐ 親方の
遠い昔に 似た俺か
震える肩で 胸で泣く
…命… ありがとう。

運命のこの男 親代り
十に五つの 春も過ぎ
辛い修行の 我慢坂
泣いて磨いた この腕に
未来に夢賭け 花と咲け
…命… ありがとう。

セリフ 碎の姿を 垣根越しで 幾度見つめる父
夜業の灯りで写る姿に 親の臉がぬれます。
一人前の職人に仕立下さいました親方さんに
本当にありがとうございました。

恋の花々

平井健一

着飾るように 艶やかに

咲いても花は 散るさだめ

短いのち それゆえに

はげしく燃えて 恋に泣く

目立たず白く さりげなく

花かんざしは 楚々と咲く

あこがれだけを 胸に秘め

夢みて忍ぶ 恋のよう

こころの人が 蝶ならば

わたしは待つの 花らしく

二人でひとつ 永遠の愛

一生誓う 恋もある

清姫・狂恋

安珍・清姫伝説より

平山 貴容子

熊野詣での その後で

必ず戻る 約束なのに

ひとり さらく 逃げてゆく

わたしを 捨てて 逃げてゆく

ええーい くやしい ゆるしませんぞ

髪は乱れて 袖ひき千切れ

胸が もえます 安珍さま

水かさ増した 日高川

川のむこうに 姿が見える

此の身 大蛇に 奪しても

命 大蛇に 捧げても

ええーい くやしい 逃がしませんぞ

川底這って 地の果てまでも

思い遂げます 安珍さま

― 数日後何かを口にくわえ、血の涙を流しつつ

日高川に沈む大蛇を見たと村人は云う。

La la la love in you

弘ひろ せりえ

もう疲れちゃったと つぶやいた君に
僕は何も答えられずにいた
でもね、僕でよければ いつでもそばにいてあげるから

大丈夫、君は 神様に愛されてるって
何度でも 何度でも 言ってあげるから

君の見せた涙が
僕の胸に突き刺さったまま
幾晩も 幾晩も 君を想い la la la

やっとできたこの詩うたが
君の胸に響いてくれよと
心から 心から 祈るばかり la la la

大丈夫、君は この僕が支えてあげると
本当に 本当に 思っているから

やっと言えた言葉が
君の胸に届いてくれよと
心から 心から 願うばかり la la la

心から 心から la la la love in you

おんな 春団治

廣澤孝彦

生れ河内かわちで 浪花ななわの育ち
下座げざの出囃子でばやし 子守唄
むすめ盛りでを 噺家はなしか修行
おんな身故みゆえの 不条理ふじょうりに
何んでなれない 高座こうざの華はなに
切れと云われりやこの黒髪も
切つて男に なりもしよう

(台詞)

好きで：好きでどないしよもない噺家の道：：女子おんなこや云うて なんで
高座こうざへ上げらしまへんのやあ ……こんな理不尽ふじんな事おまへんやろー
とうの昔むかしに文明開化ぶんめいかいの時代は過ぎてると云うのに：：

赤い灯ひ青い灯ひ 道頓堀どうとんぼりに
今日も聞える よせ太鼓たいこ
持つて生れた 女子おんなの性は
淀川よどがわの流れに 捨てました
ザンギリ頭に 晒さらを巻まいて
修業しゅうぎょう 修業しゅうぎょうの 明け暮あけぐれに
暦こよみはいつしか 昭和しやうわです

御代みよも昭和しやうわの 大典興行たいてんこうぎやう
あがる幟ぼしりに はためく名前
見せてやりたい 亡なき両親ふたおやに
聞かせやりたや この落語はなしばなし
現代げんたいの世までも 高座こうざの華はなは
おんな ながらのあの春団治
一生いっせい一代いちだい 夢舞台

ド根性いっぽん 松五郎

風^{ふう} 雅^{まき}也^や

屏風津波が 牙を剥く

足を踏ん張り 仁王立ち

伊達の殿様 お手植えの

忠義な松たち なぎ倒す

何の怨みか 許せねえ

大した野郎と 人が云う

ド根性いっぽん 松五郎

この手離すな 叫べども

哀れみんなは 波の果て

魚捌きは 日本一

玄人はだしの 腕の良さ

消えた母ちゃん 何処にいる

どうにもならねえ 夜が明ける

ド根性晒して 男哭き

たったひとりに なったとて

千年万年 生きてやる

ド根性いっぽん 松五郎

恋は陽炎

福山 しゅん

都会の街が 暮れるとき

モザイクネオンが 目を覚ます

甘い香りに さすらう蝶が

可愛い花を摘みに来る

愛は陽炎 恋も陽炎 俺の恋は夢の中

都会の街が 死んだとき

眩しい灯りも 消えていく

きれいな花も 楽しい夢も

時が過ぎればむなしくて

愛は陽炎 恋も陽炎 俺の恋は夢の中

都会の街が 消えたとき

見えない夜霧に つつまれて

狂った花に 蝶さえよらず

夜明けと共に飛んでいく

愛は陽炎 恋も陽炎 俺の恋は夢の中

円通寺 音頭

藤 浦 讓

さあー縁えんと縁えんと縁えんとサー

大垣おおがきよいところ 水みづの都まち

芭蕉ばしやうほそみち細道ほそみち 水門みずも川がわ

滝たきの養老ようろう 親孝行おやうこうぎやう

さて、天下てんか分け目の ゆかり所ところ

さあー垣えんと垣えんと垣えんとサー

大垣おおがきよいところ 城下町じやうげまち

心静まる 街並みは

面影残す 美しさ

さて、ロマンチックな 旧美濃路きゆうみのろじ

さあー円えんと円えんと円えんとサー

戸田家とくだいけ菩提寺ぼだいじ 円通寺えんつうじ

氏鐵うぢかね様の 由来ゆらいの地

厚あつき報恩ほうおんは 無む限道げんみち

さて、山門やまもん名刹めいさつ 円通寺えんつうじ

爺々のなみだ……ごころ

藤岡和子

津波うらんで 泣き叫けぼうと

諦め切れまい この辛さ

散歩途中で 婆っちゃん

どこに居るんだ 早よ戻れ

泣いちゃいけないか コータン……ヤーイ

爺々にや可愛い 可愛い盛りの

まだ三つ

カモメ見えたか お船も見たか

お父の夢見た 親子漁船

今じゃ魚市場も 家も無い

街は瓦礫の 山地獄

婆々も切なく 哀しか……ろうな

越えた苦勞も 賭けた愛情も

泥の泡

熱い他郷の 想いの丈に

泪をぬぐった 街の衆

負けちゃ子達の 明日も無い

時を掛けても 立ち上がれ

爺々も見せたい コータン……ヤーイ

生れ故郷の 生れ故郷の

青い海

夜汽車

藤崎 光

夜汽車に乗って 何処の町へ
想いの丈は 露と消えゆく
涙かくして 景色を見れば
レールの鼓動 背中をたたく
歩み進むは 棘の道か
暮れた空には 星も見えない
胸に佇む 愛しきあなた
万感深く 涙流るる
語る言葉も 今は見えずに
ひとり黙って 明日を思ふ
永く短し この世の春よ
車窓に映る 我見てわらう

大阪の女やもん

藤本純幸

銀杏色づく 御堂筋みどうすじ

あの日の別れが また疼くけどうず

舗道に踊る 落葉みたいに

ウチを乗かして 泣かせたことを

きつとアンタは 悔やんでる

あゝ ひとり あゝミナミへ歩く

泣かないわ 泣くもんか

ウチ 大阪の女やもん

時雨そぼ降る こんな夜はしぐれ

思いが頬を また濡らすけどほほ

宗右衛門町の ネオンみたいにそえもんぢやう

綺麗になった ウチを見つけて

きつとアンタは 悔しがる

あゝ ひとり あゝミナミへ歩く

泣かないわ 泣くもんか

ウチ 大阪の女やもん

あゝ ひとり あゝミナミへ歩く

泣かないわ 泣くもんか

ウチ 大阪の女やもん

恋のライセンス (Carmen Habanera 異訳)

藤本尚子

恋は野の鳥 気まぐれな妖精

時には天使 時には悪魔

誰もが墮ちる不思議な病

救いの知恵も薬もないのよ

ラムールラムール

ラムールラムール

何かを捨てなきや決して得られはしない

誰かを傷つけ血を流すもの

懼れと苦悩に磨かれるもの

甘美な夢ほど霧に迷うの

すべてを投げ出し与えられるの

命を賭けなきや手に入らない

禁じられても 許されなくても

真理の焰 胸を焦がすの

愛がなければ生きてても屍

冷たい床で死を待つだけよ

ラムールラムール

ラムールラムール

真紅の薔薇なら棘はつきものだけど

痛みも快樂よ手折らずにおれぬ

運命を生きてこそ価値があるのよ

逆らい老いても悔いがのこるよ

人の世の秩序 壊せるはずよ

自然の摂理に 燃え尽きましよう

手紙

藤安 五月男

好きな貴方の 夢をみた

ふたりで暮らした ひと間の部屋で

小さなスタンド 明かりの下で

想い出つづりを 手紙に書いてます

愛を無くした あの日から

寂しさしみじみ 知りました

元気ですかと びんせんに

添え書き何度も 書いては直し

ふたりで微笑む あの日の事を

今でも貴方と 暮らして居るようで

曇りガラスに 好きと書き

今夜も未練を 誘う夜

好きな貴方の 白百合と

世界にひとつの 指輪を抱いて

手紙に入れてた 押し花ひとつ

私の気持ちをも 貴方に届けたい

おんな心の はかなさを

暮らした想い出 ありがとう

芸人ぐらし

平 誠 三 朗

泣いて笑われ 芸人ぐらし

女泣かせの 戎顔えびす

セリフ言うのは 親ゆずり

田舎言葉に 夢がある

あああアー 〳 夢がある

(セリフ) 芸の道も唄の道も厳しいけれど

夢が有ります これからも宜しくね

惚れてすがって 芸人ぐらし

女泣かせの 捨てゼリフ

舞台どきようは 親ゆずり

とぼけ顔に 夢がある

あああアー 〳 夢がある

(セリフ) 人生の一年が七転び八起きでございませうから

これからも宜しくね

喉が自慢の 芸人ぐらし

女泣かせの 子守唄

涙ぐむのは 親ゆずり

明日の舞台に 夢がある

あああアー 〳 夢がある

女の舞台

星合節子

心の迷いを 断ち切りなさい

背中押すよに 幕が開く

しなる指先 追うのはあなた

つらさ叱って 舞い踊る

三味が泣かせる 女の舞台

あなたに添えたら 扇も櫛も

川へ投げます 流します

涙かくした ドーラン化粧

耳に拍手の 渦が涌く

作り笑顔の 女の舞台

この恋捨てたら 女が枯れる

芸を捨てたら 命が枯れる

恋と芸とで 揺れてる躰

意地で支えて 舞い踊る

明日を咲かせて 女の舞台

千島海峡

星川成一

船の舳先が 嘯みつく波に

命張つての 男船

獲物引く手に 荒波しぶき

情け容赦も あるものか

荒れてくれるな あゝ あゝあゝ

軀凍れる 千島海峡

こんな姿を おなごに見せりや

涙ぐむだろう オホーツク

遠く離れた 赤提灯が

寒いこの目に また浮かぶ

あいつ相手に あゝ あゝあゝ

酒に酔いたい 千島海峡

怒涛さかまく そこから地獄

それを承知の 男船

親父仕込みの この両腕で

銭を稼いで 笑いたい

負けてたまるか あゝ あゝあゝ

俺を育てる 千島海峡

きつと誰かが

堀内和香

人は 誰かの愛にささえられ
生き続けることができる

悔し泣きした あの日の
心の傷あとさえ

誰かの 微笑みで救われる
幸せは ある日突然

飛び去ることも あるけれど
追わないで 泣かないで

どんなときでも きつとそばに
誰かがいることを 忘れないで

人は 失くしたものの大きさに
気づかされた時は嘆き

悔し泣きする けれども
心の傷癒して

ふたたび 大空へはばたける
あなたなら きつと出来るよ

誰もが願う 信じてる
臆病に ならないで

どんなときでも きつとそばに
誰かがいることを 忘れないで

幸せさがし

堀江重吉

海鳥は鳴いても 男は泣けぬ

それでいながら 散る涙

長い人生 いろいろだけど

いつも浮世は

むかいかせ
逆風

背負う荷物が 違っても

明日もやるんだ 幸せさがし

仮の里でも 住んだら都

ここも小さな ふるさとさ

おなじ傷もつ 似たものどうし

こぼす涙は わかちあい

人の情けを 心底うけて

明日もやるんだ 幸せさがし

春はほのほの 桜が咲いて

秋はもみじの

からにしき
唐錦

四季を織りなす 草木も風雪に

耐えて忍んで 生きてきた

かぶる苦勞を はねのけながら

明日もやるんだ 幸せさがし

恋便り

梵 天丸

流れ流れて行く末は

夢をなくしたはぐれ鳥

港酒場の止り木で

霧笛の声を聞きながら

沖行く船見てまた涙

どこで躓きころんでも

生きてゆくのをよ人生を

甘い言葉も想い出よ

いいのよいいのこれからは

自分で信じた道を行く

はるか遠くのあの灯り

夢をくれそな灯りです

港酒場の止り木で

待ってたかいはありました

あなたが届けた恋便り

♪…良寛さん晩年の恋物語り！

本間正成

維あ馨いた尼にいけれど　ひとめにふれる
ひそかな恋を　俳うた句くにしるして
思いもつのも　こころをみだす
恋のあやとり　かけちがい
ひとり思いの　淡い恋
吾をわすれた　ひとりの和尚おとこ

待てど庵くらせ寺でど　届とかぬ文ふみに
板戸いたを引けば　陽ひざしがまねく
恋は盲目　まわりが見えず
信わた濃た川しを越えて　いつのまに
島崎とくて近い　恋の道
吾をわすれた　ひとりの貞心おんな尼な

♪…いまも昔も男と女
恋もはしかも　熱くなる
ひとは　愛して愛されて
恋は美しい　ひとの華

幾つになっても　年の差こえて
ほとけの道も　男と女
恋の逢引き　塩入峠
越えて与板よの　花その野の辺
命いのちつきるも　恋の華
吾をわすれた　和尚おとこと貞心おんな尼な

まんまる

楨 映 二

あんたがくれた 紛まがいの指輪

引き抜いて 転がせば

窓の向こうに 十五夜の月

はじめのつかん この恋を

笑わらてるみたいな まんまるの月

ネオンをひとつ ともしただけの

三丁目 裏通り

路地の小さな お地藏さんも

道にはずれた この恋を

笑てるみたいな まんまるの顔

化粧を落とし 鏡を見れば

しのび込む 初あき秋の風

部屋にいちりん 薄紅の花

終わりのみえん この恋を

笑てるみたいな まんまるの花

ちいさな白い花

牧野 おさみ

ちいさな ちいさな 白い花だけど

たしかに たしかに 君は今咲いてる

誰の目に止まることも なくていいのさ

春を告げてそっと やさしさを添えてる

ちいさな ちいさな 白い花だけど

とつても とつても 君は今かわいい

野辺の風めぐるように しべを揺らして

甘い香り遠く はこんでくれるよ

ちいさな ちいさな 白い花だけど

けなげに けなげに 君は今生きてる

誇ることもなくていいと それが素敵さ

自分らしくそこで 野原を彩る

冬物語

松井眞佐子

年は何才と訊いてみた

吐呆けて名前も訊いてみた

三年みなけりや親の顔

疾に忘れてく

他の男

幸福そうだねよかったよ

肩の荷半分おろそうか

二度と逢うまいそれがいい

二人にしてみりや邪魔なだけ

無邪気な笑顔が眸に刺さる

今度哭くのはく

俺の番

決して名乗りはしないから

写真を一枚くれないか

まるで昨日のことの様

出会いも別離も冬だった

御負けに子供が冬生まれ

なんの因果かく

悔やまれる

都会に紛れて冬ごもり

叶わぬ夢みてねむろうか

ふりだしの街

松尾 江里也

まぶたにひと刷毛 ネオンの色は
夢を映して また濡らす
哀しいくせに 我慢して
見えなくなるまで 手を振った
夜の真ん中 女がほつり
無言で佇む ふりだしの街

涙をぬぐえば 想い出さえも
ぬぐい去られて しまうよ
せつなさ隠す お化粧も
心のささくれ 騙せない
夜の真ん中 お酒を嘗めて
おもかげ着の ふりだしの街

朝明け待つ身を 片割れ月よ
せめて伽して 居ておくれ
死ぬほど好きと なぜ言えず
あなたの何を 愛したの
夜の真ん中 風さえ胸を
責めては過ぎてく ふりだしの街

人生音頭

松尾博之

はれて自由の 身になって
ながい人生 これからと
心うきうき 旅じたく
人生六十は 始発駅

元氣もりもり 血が騒ぐ
明日の望みの 種をまき
汗を流して 働いて
人生七十は 花盛り

花の盛りの そのあとは
ついに大きな 実がなつた
やっと思い が 叶えられ
人生八十は えびす顔

まだも異性が 気にかかり
腰をのばして 髪をなで
ここでもいちど 若返り
人生九十で 恋をして

またも咲かせた 大輪の
花もみごとな この種を
あとを頼むと 孫の手に
人生百歳で 万々歳
わっはは

ふたりの福寿草

松尾 ゆきをを

女 こんな私を みつけてくれた

あなたは私の 福の神

男 貧乏ぐらしを 笑ってたえた

お前がいたから 今がある

二人 春一番の 福寿草 福寿草

幸せはこんだ 二人の花です

女 どこへ行くにも いっしょに歩く

おしどりみたいと 言われます

男 たよりたよられ 雨風しのぎ

子育て終って 春がきた

二人 春一番の 福寿草 福寿草

よろこびあふれる 生命の花です

女 たまにゃ一杯 熱燗つけて

あなたに感謝の お酌です

男 口にゃ出さねど 想いは同じ

よろしくたのむよ いつまでも

二人 春一番の 福寿草 福寿草

明日を夢みる 愛しい花です

あなたのふるさと

松野捷夫

白い輝き きらきら踊る
山々は 南アルプス
雪解け水を 豊かに湛え
天竜の流れ とうとうと
ここが あなたのふるさと
ここが あなたのふるさと
山も雪も水も 眩しい
わが家を後に あなたとふたり
今日から この山河と生きてゆく

花 花花 紅淡く
白々と 桃はリングゴは
仰げば空に 白雲浮かび
頬過ぎる風が 春謳う
ここが あなたのふるさと
ここが あなたのふるさと
花も雲も風も 愛しい
廃墟を後に あなたとふたり
今日から この大地に生きてゆく

※住み慣れた街を追われ たどりついた
あなたのふるさととは 山も雪も水も眩しい
心交わした友と別れ たどりついた
あなたのふるさととは 花も雲も風も愛しい
あなたのふるさととは 美しい
あなたのふるさととは 果てなく美しい

※繰り返し

雪つり橋

松原 かおり

忘れはしない

忘れない

雪つり橋で

待ってます

二人で歩いた

思いで橋ね

寂しさつのるわ

胸のなか

きつと きつと

きつと会えるわね

気づいて早く

私のところに

どうしてなんで

待たせるの

雪つり橋も

泣いてます

貴方を待つ身の

切なさつらさ

身を切る想いで

待ってるの

いやよ いやよ

いやよつらすぎる

待つだけなのは

心がさけそう

終わりにしましよ

今日かぎり

雪つり橋も

泣いてます

貴方に貰った

指輪もはずし

お別れしましょう

さようなら

泣いて 泣いて

泣いていきるより

遠くでおもう

私にであうわ

はつ恋

松原高久

好きになった君に　すごく悩むと
トンボが小首を　傾けてた
十四の君は　初々しくて
ラムネのような　汗をかいていた
はじける笑顔　林間学校
恥ずかしいくらい恋を　恋をしてた
びびっていないで空へ　飛び立つときさ
楽しかった　はつ恋の夏休み　夏休み

幾万の星が　夜空にきらめき
ひととき眩しい　君がいた
山小屋の床が　軋んで誰か
寝息を止めて　ごろり寝返った
眠れぬ窓に　頬杖つけば
青春の時間がとても　苦しかった
あのとき全てが止まり　宇宙になった
楽しかった　はつ恋の夏休み　夏休み

あざみの蕾み　すくっと立って
純情な青い棘が　君に似てた
心に言い訳しない　大人になるさ
楽しかった　はつ恋の夏休み　夏休み

お前を探して札幌へ

松本 撰子

咽び哭くよな 夜更けの北風が

胸の未練を なぜ誘う

アカシア花散る 札幌は

お前を泣かせた 罪なのか

俺を恨んで いるような

泪まじりの 粉雪が

今日もはげしく 身を叩く

過去を引きずり 釧路の街へ

逃げた男の 裏切りを

許してくれとは 言わないが

ふたりで暮らした 三年の

愛の月日は 忘れない

夢を傷つけ 別れたが

逢って詫びたい ひと言を

肌をつき刺す 夜霧が染みる

今も一人で 居るのかい

「お前を探して」札幌へ

優しさ届けに 来た俺の

肩に吹雪が 舞う夜は

港小樽の 灯もにじむ

めぐり逢う日は いつなのか……

いそしぎ

円 まじか

恵 けい

介 すけ

蒼い波が雪となつて 岩肌を削り
いそしぎの哭く声が 空に響く
明日を求めて旅立つ 渡り鳥
翼傷めて一羽 うずくまる
少し寄り道してた それだけなのに
翔び立てる夢も 叶わず疾風が涙を
奪ってゆくわ

淡春の野風 雪を溶かし 陽炎萌やして
彷徨える影ひとつ 波に吞まれ
魂を限りに叫んで 愛を求め
心惑わす灯かり まぼろしか
少しやすらぎ欲しい それだけなのに
乳房に寄り添い 眠りにつく幼子が
むずかるように

少しやすらぎ欲しい それだけなのに
乳房にくちづけ 眠りにつく幼子が
夢みるように

※いそしぎ（磯嶋）

：磯辺に生息する渡り鳥（留まる鳥もいる）

体長20cmほどで腹が白く、背が灰色の鳥

出会いの中で

真矢とし子

歩いて見るさ 嫌な事でも

向き合う事が 大切だなんて

気づかなかった 意気地なしだよ

誰もがみんな つまづきながら

広がる夢を 掴み取るのさ

悩み続けて 泣き叫んでも

生きてく勇氣 忘れなければ

苦しい時も 笑顔になれる

強い絆に 膨らむ希望

きつと素敵な 出会いがあるさ

思い道理に ならないことが

悔しいほど 多過ぎるから

仲間を見つげ 口遊むのさ

広がる夢を 抱き締めたいから

広がる未来 出会いの中で

こころの始発駅

丸山 八留男

手紙ひとつを 置いてくなんて
あなたは言うでしょ 卑怯ひねくなやつと
恨んで下さい 思い切り
尽くし足りない私では
あなたの明日を 壊してしまう
一人旅する 列車の窓に
戸惑うあなたの 背中が映る
我がまま許して くれますか

知っていました あなたの胸に
私じゃない女ひと 棲すんでることは
憎まず静かに 身を引けば
幕が降ります 恋芝居
あなたの明日も 壊さず済むわ
あげて下さい 愛する人に
優しい笑顔と あふれる愛を
遠くで幸せ 祈ります

過去を忘れて 出直す旅は
降り立つ駅から また乗る列車
私のこころの 始発駅

ほれほれ浮かれ節

まんだ あつこ

東男と 浪速の女

惚れてしまえば 千里も一里

咲いたさくらも 恥らうほどに

月に一度が 十日に一度

通い通われ あゝ、近い仲

肩をやさしく つつんでくれる

東男にや 照れるやないの

啖呵きるほど いなせじゃないが

格好いいのよ 東京ことば

そんなあんたに あゝ、惚れちゃった

情にもろいは 浪速の女

惚れてしまえば なんにも見えぬ

つくしすぎたら 重荷でしようか

だけどあんたが いとしくて

ホッておけない あゝ、恋女

涙の地平線

三浦康照

果てなく続く どこまで続く

夢をさまよう 迷子のように

あなたを忘れる 愛の旅

眩野を走る 汽車の駅

ひとりたたずむ せつない胸を

風が切り裂く … 涙の地平線

幾夜を泣いて 諦めながら

ひと夜明ければ またいとしさが

未練をつれて 追いかける

もう戻れない おんな道

恋のまぼろし 眩野に抱けば

空は灰色 … 涙の地平線

地平の果ての 砂丘に埋もれ

赤い夕陽に 抱かれて永遠に

あなたの夢見て 眠りたい

命を賭けた さすらいの

ここが私の 終着駅ね

花も咲かない … 涙の地平線

親おや
父じ

美 貴 裕 子

無口で 頑固で 無愛想

どうして 親父の どこがいゝ

日溜りひだまり みたいないゝ男

ぼそっと おふくろ 云っていた

おまえも この頃 似て来たと

云われて 鏡を 二ど三ど

おふくろ 亡くした あの日から

脱げ殻 みたいなの うしろ影

ひと針 ひと針 おふくろの

おもいを 繫いだ 浴衣手に

ひろげて たゝんで またひろげ

握った こぶしが ふるえてた

背中を まるめて 鼻めがね

揃いの 湯のみに 茶を入れる

襦袢じゆばんの 下にも 浴衣着て

作った 煮ものに みそ汁は

おふくろ の味に そのまゝに

のみこむ 涙か みそ汁か

時雨しぐれの酒場さかば

三木政和

夕日が沈しずむ ネオンの町に
すすり泣くよな 雨が降る
吞のまればすまい 誓ちかってみても
面影おもかげせめて 詫わびる日々
酒に聞きかせる 俺おれらには
淋さみしすぎるぜ 時雨の酒場

暖簾のれんくぐって 後のちふり向けば
何処どこかそら似にの 人が行く
だまり通とじた 心の傷は
酒でうすまる 訳わけじやない
未練みれんぬくめる 俺おれらには
苦くるしすぎるぜ 時雨の酒場

霧きりにむせぶか 雨音あまおとさえも
何故なぜかこの身を 責せめている
息いきをはずませ 遅おそれたかしら
お前まへきそうな こんな夜は
酒も酔よえぬさ 俺おれらには
淋さみしすぎるぜ 時雨の酒場

平成説教節

美貴史
明子

それを言っちゃあ おしまいなのさ

腹が立ったら 呑み込んで

恨みつらみを トイレで流せ

水に流せば サッパリと

毒は溜めるな 毒を出せ

人にもまれて 世の泥水を

飲んで塗まれて 負けるなら

生まれ変わって 出直してきな

やるかやらぬか それだけさ

勝って咲かせる 人の花

神も菩薩ぼとけも 阿修羅も夜叉も

人の心に 住んでいる

敵は己の 甘える心

自分本尊 磨いてりや

うまく出来てる 世の中よ

ナミダのメモリー

三
岬
み
こ

ひと雨ごとに 季節が移り
キミは大人に なっていく
訳ありシングル 私的人生
付き合わせて ごめんね
寂しい夜の ララバイは
ナミダのメモリー キズナ歌
もうすぐキミは 旅立つね
自由な大空へ 羽ばたいて

思えばいつも 無邪気な笑顔
キミの気遣い だったのね
母娘ははこのぬかるみ 一緒に歩いた
頑張はつらせて ごめんね
寄り添う暮らし 振り向けば
ナミダのメモリー キズナ歌
今度はキミの 夢のため
輝く翼 あげるから

寂しい夜の ララバイは
ナミダのメモリー キズナ歌
もうすぐキミは 旅立つね
自由な大空へ 羽ばたいて
羽ばたいて…

諸行無常

岬坊真明

風は 吹く風は無常

明日の行方知れず

まして人の世の 心変わり

君は 誰を恨むや

浅い 川の瀬は騒ぎ

波は静かならず

つつみ隠さずに 心ひらく

花に 吾は及ばず

すべて 世はすべて無常

変わり往くがさだめ

せめてまた明日の 命在るや

今宵 星に祈らん

おんな恋挽歌

三里 こうじ

雨に打たれて 咲いている

真つ赤にもえる 彼岸花ひがなばな

あなたの腕を 離さずに

おんなじ夢を 見たかった

心さまよい 旅支度たびしだく

花が散る おんな恋挽歌

指輪はずした 左手の

優しい嘘うそが 辛つらすぎる

逢いたい気持ち 断ち切って

北行き列車 飛び乗った

うしろふりむく ことはない

風なが哭なく おんな恋挽歌

鉛色した この海は

あなたの姿 遠くする

凍える指で 拭く涙

もうすぐ冬の 北の町

いつかしあわせ 祈る月

星が舞う おんな恋挽歌

西国観音まいり

水嶋彩木

ここは熊野路 青岸渡寺の

一番札所に 散り桜

那智の滝へと 石の参道

支えてくれたわ あなた

あの手のぬくもり よみがえる

写真とみちづれ 再びの

おんな巡礼 西国観音まいり

ここは近江路 石山寺は

紫式部が綴った 恋草紙

光源氏に どこか似た

おもかげ偲んで あなた

あの日も咲いてた 杜若

かほそい鈴の音 ひびかせて

ひとり巡礼 西国観音まいり

ここは播州 清水寺の

山門くぐれば 雪もよう

座わる本堂 あたたかく

哀しみ溶けます あなた

観音菩薩に 手を合わせ

涙をおさめて また歩む

おんな巡礼 西国観音まいり

風が止やんだら

水野 鮎子

ああ 長いよるね あなたがいないと

ああ 深入り し過ぎたみたいね

風が止んだら 外は雨 雨

あなただけにしか 熱くなれない

もし もしもあの日 上着の口紅

もし とがめず 抱かれていたなら

風が止んだら 外は雨 雨

今もそばにいて くれたでしようか

なぜ 捨てる前に 優しくしたのよ

なぜ 捨てても いい子でいたいのか

風が止んだら 外は雨 雨

あなたを嫌いに させてほしかった

北切符

み
ず
み
隆

最終の 札幌発で

明日のわたし 探しに行きます

ああ北風よ 吹き消しておくれ

別れを誓った この恋だから

握りしめてる 北切符

誰ひとり 話す人なく

汽笛の音が 心を迷わす

ああ北風よ 舞い染めておくれ

初めて愛した あの人だから

願いを託す 宗谷線

優しさが 忘れられない

すべてはわたし 一人が悪いの

ああ北風よ 抱きしめておくれ

も一度咲きたい この恋だから

片道だけの 北切符

酒は お前と

美 手 けんじ

酒は 日本酒・ウイスキー

お前は何も 言わないけれど

黙って一口 ひとくち 飲むほどに

逢えてふたりの 語り合い

苦勞・辛さを 溶とかして沁しみみて

チビリ・グビリ又グビリ

春のぬくもり 連れて来る

酒は 焼酎・ブランデー

お前が傍そばに いなければ

俺は世間に 負けていた

心がわかる 母のよに

エールをいつも 送ってくれた

グビリ・チビリ又チビリ

明日の活かつりよく力 連れて来る

酒は 地ビール・赤ワイン

お前と友に 生きてきた

悲しい時の 涙酒

うれしい時の 笑顔酒

いつも寄り添い 見つめてくれる

チビリ・グビリ又グビリ

俺のしあわせ 連れて来る

絆は永遠に

南 早苗

すべては 蘇るよ

冬は 春となる

すべては 続いて行くよ

夜は 朝の始まり

愛する人を 抱き締める日が

時を超えて きつと来る

想い出も 面影も

温もりも 壊れない

絆は永遠に 繋がっているから

いのちは 蘇るよ

生きとし 生ける物

いのちは 続いて行くよ

過去も 現在いまも 未来まも

笑顔ふたたび 睦み会う日が

時を超えて 巡り来る

辛くても 負けないで

悲しみを 乗り越えて

絆は永遠に 繋がっているから

絆は永遠に 繋がっているから

相模の夜よ

み
ね
隆

雨が窓うつ 小さな部屋で

女の歎び 教えてくれた

惚れた貴男は 今頃どこに

ああ 愛しあの声 あの姿

恋の炎は 漁火よりも

もえて激しい 相模の夜よ

過ぎた年月 隔てていても

しん底躰に しみつく想い

忘れらりようと 忘れるものか

ああ 愛しあの声 あの姿

ヤミにまたたく ネオンの色も

泣いているよな 相模の夜よ

冷めた世間の 暮らしの中で

お人のいいのが 貴男のとりえ

ひとり寝る夜は 死ぬよりつらい

ああ 愛しあの声 あの姿

夢に聞こえる さざ波さえも

呼んでいるよな 相模の夜よ

伊那路の旅

峰
八
朗

千切れ雲流れて 山を越へ

何処へ行くのか 伊那路の空を

※ 秋はもうすぐ 木曾駒に

来ると哭くよな 蟬時雨

緑あふれる 山間に

湯煙ひとすじ なびく頃

夕日に染まる 伊那の空

夜の空見上げりや 流れ星

光り哀しく 尾を引き消える

※ じんと胸打つ 旅の夜は

背中につめたい 初秋の風

川の瀬音も 鳴く虫声も

谷間に淋しく 子守唄

汽笛も遠い 伊那の宿

※ 飛沫とび散る 天竜の

川の流れも きらきらと

水面に映した 赤石山脈に

名残りを惜しんだ 終夏旅

すすきも揺れる 伊那の里

恋悪魔

みね ゆきと

悪い奴だと わかっていたが
いきなりハートを 奪われた

恋悪魔 恋悪魔

ウオンウオン 恋悪魔

やさしさ装う 笑顔には

ジキルとハイドの 裏がある

ラメの化粧に ヒラヒラ衣装

好みの女に 変えられた

恋悪魔 恋悪魔

ウオンウオン 恋悪魔

ふた月一緒に いただけで

嘘まで上手に なっている

やっぱあきらめ 捨てられちゃった

今夜もひとりで 飲むお酒

恋悪魔 恋悪魔

ウオンウオン 恋悪魔

わたしを愛した あの腕で

今ごろどんな娘 抱いている

恋悪魔 恋悪魔

ウオンウオン 恋悪魔

やさしさ装う 笑顔には

ジキルとハイドの 裏がある

おんなの歲月

峰 よしを

俺おれの命いのちだ 逢あう人ひとごとに

そんな言葉ことばに 今日きょうまで来これた

やっと思みつけた 小ちいさな願ねがい

やつれた其その肩かた 涙なみだが落おちる

私わたしひとり

私わたしひとりに させないで

赤あかいホッぺと 可かわい愛あいいその手て

一人ひとり娘むすめの 花嫁はなよめ姿すがた

苦く勞ろう七なな坂さか あれからひとり

女おんなの人生じんせい ころんで起おきて

祝いわい言葉ことばに

祝いわい言葉ことばに 泣なきました

いつか歳とし月つき 写しゃ真しんのあなた

めぐる旅たび路じの 人じん生せいあかり

髪かみにチラホラ 白しろ髪がもまじり

鏡かがみに写うつした 昔むかしの苦く勞ろう

そつと湯ゆ舟ぶねに

そつと湯ゆ舟ぶねに 流ながします

ふたつのバトン

峰 崎 林二郎

冬の厳しさは 暖かな春を 連れてくる
悲しみは喜びを 気付けせる

もしもある日 風が立ち 海が泣いても

故郷に 鳥は飛び 魚は泳ぐ

友よ君に 勇気があれば

美しい故郷を守る

ひとりがひとつ 勇気のバトン

集まれば 大きなちから

伝えて行こう こころのバトン 未来へ

もしもある日 草が枯れ 山が泣いても

故郷の 空は青く 大地は芽吹く

友よ君に 希望があれば

美しい故郷を築く

ひとりがひとつ 希望のバトン

集まれば大きなちから

繋いで行こう こころのバトン 未来へ

勇気と希望 ふたつのバトン 未来へ

三陸エレジー

宮崎のぶを

帰らぬ人だと わかっている

戻って来るよな 気がします

津波に呑まれた あの主人ひとの

故郷はやっぱり ここだから

幼子おきなこ抱いて 今日もまた

浜辺に立って 待ってます

三月あ十一日ひを境に この海浴いは

昔はどこにも ありません

それでも貴方が 帰るとき

迷わぬようにと 忍冬すいかずら

夫婦ふたりの好きな 花だから

かならず植えて 待ってます

忘れることなど 出来ないけれど

忘れた振りして 生きてゆく

世間のやさしい 励ましに

元氣をもらった 母と子は

朝日の昇る 三陸で

夕日に感謝 しています

義兄弟かもめ

みやの舞

兄 俺は北国 北海育ち

おまえ薩摩の 火の国育ち

弟 初めて入った この居酒屋で

酔って絡んで 暴れた俺に

兄 おまえに飲ませる 酒などないと

弟 拳一発 骨身にしてみた

二人 旬の小料理 地酒が旨い

浜の居酒屋 義兄弟かもめ

兄 どこか憎めぬ やんちゃな奴が

荷物丸めて 転がり込んだ

弟 生れも育ちも 違うけど

俺の兄貴と 心に決めた

兄 包丁さばきは おぼつかないが

弟 客の相手は まかせてくれよ

二人 今日のお勧め しめ鯖あわび

浜の居酒屋 義兄弟かもめ

兄 惚れているなら はつきり言えよ

薩摩男子が らしくもないぜ

弟 まだまだこの俺 修業の身

恋を急かすな 節介やかな

兄 ほんやりしている おまえは邪魔だ

弟 いつも変わらぬ 口先喧嘩

二人 酒はぬるめで あてには白子

浜の居酒屋 義兄弟かもめ

生きものたちの愛

宮原哲夫

そりやわたしだつて 生身なまみのからだよ

お酒ものんだわ 抱かれもしたわ

生きものだから 生きるため

生きものだから 愛されたいの

かわいがられりや うれしいわ

オギヤ おぎやと この世に生れて

あんたと同じ 赤あかン坊ぼだつた

かわいかわいと 育てられ

生きものだから はしゃいでいたわ

小犬のように じゃれついて

そりや世の中 いろいろあるわよ

利口りこうに生きてる おバカもいたわ

生きものだから それも好き

生きものだから 愛していたわ

春夏秋冬 愛の花

春夏秋冬 花ざかり

葦が峠にら

美山香

季節はずれの 小雪が積もる

足をとられて 遅れた逢瀬おうせ

明日も温もり 欲しいのにあす

津野山神楽 太鼓が急かすせ

夜の橋原遠くて越せぬ 葦が峠にら

出逢い運命は 芽吹きさだめの山で

慣れぬ手つきで 山菜探し

優し過ぎます 国訛り

津野山城址 名残りのお酒じょうし

ほろり惹かれて帰れぬ越せぬ 葦が峠ひか
にら

障子軋むか 鶯啼くかき
うぐいすな

聞かす恋唄 こだまで返す

今日の温もり 消さないで

津野山神楽 振り向く鬼に

みだれ情が絡んで越せぬ 葦が峠しらゆ
にら

神代桜

深山大仁

山なみ深き 甲斐路の里を
優しくつつむ 春かすみ
芽吹く北柱は 屏風絵もよう
栄華をかざる さくらの並木
幾千年の 時を越え
武川に香る 神代桜

甲斐駒が岳 根雪も消えて
流れも清き 大武川
心まどろむ このひと時を
夢路にさそう 愛しき大地
めぐりし春を 忘れずに
花咲き競う 神代桜

尋ねし人の 心をいやす
三吹の里よ 牧が原
日本武尊の 形見の桜
孫子に夢の ぬくもり添えて
野道を染める 花吹雪
大和の心 神代桜

甲斐の国武川山高、実相寺境内にある
日本三代名桜と呼ばれている神代桜を作詩してみました。

新たな絆を育んで

武^む
笠^{かさ}
和
夫

こころ豊かに ふれあいを

感じて踊る 姿には

汗と涙の 味がする

子どもも大人も 手をつなぎ

あしたを見据え 人づくり

友との絆 強くして

あの日のことを 思い出す

一人ひとりが つながって

生きる力 描いてる

袖振る縁で 輪をつくり

知人を増やし まちづくり

地域の絆 広くして

早寝早起き 朝ごはん

生活の術^{すべ} 変えようよ

変化の中で 大切な

自分の居場所 探してる

礼儀あいさつ 思いやり

素直になって 愛づくり

家族の絆 太くして

寒 椿

村 上文 恵

お前がこぼした 涙の粒を
ひろえば悲しい 思い出ばかり
過去にしばらく 生きるより
運命預ける 花のよに
俺にふり向け 寒椿

お前が歩いた 涙の道は
心のやさしい 女に変える
今日の出逢いは 神様が
くれた最後の 恋だから
紅く咲け咲け 寒椿

お前と一緒に 涙を消して
人並幸せ 探してみたい
先は苦勞も あるけれど
雪に耐えてる その笑顔は
俺が惚れ抜く 寒椿

ゆりかもめ

茂木 けんじ

梅雨入りの空 灰色の街
光をなくした ビルの群
タイムスリップ トウキョウ新橋
漂泊人たち 何処まで行ったのか
再び歌など 生まれはしない
変えたのは誰？ 変わったのはなぜ？
ゆりかもめ ゆりかもめ ゆりかもめ
思わず乗ったよ 海が見たくて

忘れてた海 潮風の歌

車窓から見ている この街は
タイムスリップ トウキョウ竹芝
あいつの涙が 胸まで流れてる
戻れる時間など もうないけれど
変えたのは誰？ 変わったのはなぜ？
ゆりかもめ ゆりかもめ ゆりかもめ
過ぎさるまぼろし 恋と棧橋

ひと夏の恋 戯れの愛

それでもいいのと 言うあいつ
タイムスリップ トウキョウお台場
嘘などつくなど 夢中で追いかけた
いつ迄オレだけ メソメソするな
変えたのは誰？ 変わったのはなぜ？
ゆりかもめ ゆりかもめ ゆりかもめ
こんなに こんなに 時がいとしい

紅葉宿^{もみじ}

本橋夏蘭

湯船に写る 三日月を

掬って欲しいと ねだるやつ

わざとこの俺 困らせて

はしゃぐお前が 愛おしい

笑顔の裏を 見ぬふりしてる

男のずるさか 秋の宿

ごめんよ夢も やれなくて

それでもいいのと すぎるやつ

責めてくれたら いいものを

なおさらこの胸 痛むのさ

ぶつけておくれ 思いの丈を

燃えるふたりの しのび宿

朝湯に浮かぶ 紅葉^はを一枚

押し葉にするわと 笑うやつ

せせらぎさえも 泣くものを

涙ひとつも 落とさない

水に流せぬ ふたりの恋を

知るやいで湯の 紅葉宿

白い鉛筆

森 下 かおり

ランドセルより 欲しかった

二十四色 色鉛筆

一番好きな 色は何？

みんなに聞いて見せびらかした

全てが平和で楽しくて

ワルツの足音 虹色の影とステップ踏んで

何のためにあるのかと

一番長い 白鉛筆

描いても色が見えなくて

みんなに変だと尋ねました

いつかはわかると笑われて

大人は嫌い ごみ箱に白色捨てました

青い空を泳ぐ雲

幼い頃が よみがえる

一番好きな 色は白

何でも染まれる色だから

あなたに出会って気づいたの

心は画用紙 いくつもの絵を描いては消して

懐旧「仙台湾」

諸江一朗

君知るや 石巻なら 渡波みなと

人呼んで 浜木綿の丘 ながはま 長浜よ

牡鹿半島 遠くみて

松原近く 寄せる漣 さざなみ

「仙台湾」 加藤洋風作

一望洋々仙台湾 斜陽映処遊鷗群

回首山姿紅業華 漁獲満載喜宝船

君知るや 明神やしろの 宵灯り あか

洋風一門 太鼓たたいて 吟けいこ

あれから幾とせ 老いた身に

復興のニュース 涙とまらず

君知るや 千年一度 大津波

我慟哭す 年賀状が遺言と なりにけり

かわいい子らの 泣き声が

夢の間に間に きこえてくるよ

伝えたい願い

―アキナへメッセ―

矢坂秀司

秋晴れの 太陽みたいな

微笑みに 一目惚れ

名はアキナ 九月に生まれて

父さんが つけたのと

口ぐせは：

「起きたことはしょうがない」

「前に進むしかないわよ」

「楽しくやろう」

あなたと一緒に 生きてゆきたい

ふたりの勇気で 未来を創りたい…

それが僕の願いなんだ

雑誌から 抜け出たみたい

長い髪 細い脚

澄みきった 素直な瞳が

何よりも 美しい

口ぐせは…

「元気なのが取り柄だよ」

「新しいものが大好き」

「あなたのおかげ」

子供を抱えて あやす姿を

はじける笑顔を見つめていられたら…

それが僕の願いなんだ

焦がれて相模川さがみがわ

山上はるお

春の息吹きに 若鮎躍る

霞む山脈やまなみ 想いは巡る

岸のほとりで あなたを待てば

瀬音優しく 泪が泳ぐ

風よ伝えて 伝えてさがみ川

愛に迷れてはぐ 明日を訊けばあした き

真菰がくれに 葦切啼いて

夏の夜祭り 思い出花火

寄せるさざ波 帰らぬ恋に

尽きぬ想いの 想いのさがみ川

冷た過ぎます 川面の風がかわも

揺れて漂う 浮草子草

そつと浮かべて 春待つ女

影が空似の 道往く人に

炎えて焦がれて 焦がれてさがみ川

ふたりの人生五十年（金婚祝記念）

八卷 功

あなたと夫婦ふたり 憂き世の坂を

結んだ縁の 五十年

他人ひとに云えない 雨飛風吹雪うひかせゆきも

つらい時にも 離れずに

泣いたあの日 想い出も

今は話せる 泣き笑い

いつでもあなたの くちぐせでした

妻おまえの着物ものより 子育てと

喜怒と哀楽 重ねた暦

惚なれていっしょの 仲なだもの

美学人生 夢きずな

道は千里の ふたりづれ

あなたのいない 人生なんて

幸福しあわせかみしめ 分かち合う

余生よせいいのちを 夫婦ふたりで諭さとし

初孫まごに希望のぞみを 宝船

生まれかわれる 日があれば

やっぱりあなたに 決めました

愛娘「あき」

山里幸平

眩しいほどに 美しい

海に罪など ないものを

風に啼く 瓦礫が「死にたく

ないよ」の我が娘の あ：声になる

なみだの数では 計れない

命の重さと 別れの辛さ

浜辺に流れ 着いた靴

あきの名前が 滲んでる

「肩たたき 券よと」差し出す

笑顔がこの胸 あ：離れない

昔があつての 今なのに

影さえ抱けない 一面影恋し

苦しさを包む 微笑みは

明日を生きてく 証です

人ゆえに 後には戻れぬ

さだめが勇気を あ：連れてくる

わたしの分まで 生き抜いて

海鳥空舞う 見守るように

月の港

山田孝雄

夜の港は 波音ばかり

さざなみ ふなべり たたく音

船は小さく やさしく

子守唄 聞くように 揺れてます

月あかりの恋 追いかけてゆけば

あなたの暮しの 重荷になるでしょう

だから私は 椿の花でいい

赤い目をした 私がいます

遙かな 潮路の 西の果て

あの日あなたは 旅人

逢いたくて 背伸びする 波兎なみうさぎ

月あかりの影 見えますか都会まちで

ゆきずりだったら 忘れてしまうけど

そっと漕ぎ出す 恋舟何処いふところへと

月あかりの恋 追いかけてゆけば

あなたの暮しの 重荷になるでしょう

だから私は 椿の花でいい

ありがとう友よ

山田 那津子

ふりしぼる声が いまでも耳に残る

別れは 突然 おとずれるものですね

たった ひとりの友よ

出逢えてよかった ありがとう

あの青空のもと かけ巡った縁の大地

そして雲の流れを 追いかけた友はもういない

何処へいく時も 離れずそばにいたね

何にも 言わずに 足並をそろえてた

たった ひとりの友よ

甘えてくれたね いつまでも

あの星空のもと 輝やかせていますか今も

まして夢をみさせて くれたのは友の証です

こみあげる涙 悲しみさそうけれど

も一度 想い出 抱いてゆくつもりです

風が 背を押すように

勇気をくれたね ありがとう

あの青空のもと 清すがしい朝あさ眩くらしい今

まるで桜散るよに 眠りつく友は幸せね

しぐれ宿

山田博康

命つないで 追いすぎる

愛しいあなたの 後ろ影

別れた辛さを かき消すしぐれ

風の便りに 湯の里尋ね

癒やす一夜の 旅の宿

添えぬ運命の 糸の先

切れたらつなげぬ ものですか

湯舟に浸かれば 柔肌染まる

しぐれ雨音 静かに聞いて

燃えたあの日を 恋しがる

熱い情の ふところに

この身をゆだねて 眠りたい

小窓に吊るした お守り袋

晴れて明日は 逢えますように

祈る一夜の しぐれ宿

故郷よ

大和正雄

花が咲き 鳥が鳴き

人々はたわむれる

ぼんやりと ひとりたたずむ

土手の上

ああー故郷よ ああー俺の町

川の流れも 春の色

恋に酔い 愛に揺れ

年月は過ぎて行く

思い出は 遠いあの人

あの笑顔

ああー故郷よ ああー俺の町

路地の香りに 目を閉じる

山を見る 海を見る

人生はそれでいい

都会でも 思い出せるさ

この気持ち

ああー故郷よ ああー俺の町

久しぶりだな ありがとう

大阪の夜

山本 ユリエ

街の灯りが
揺れている

風に吹かれて
愛が去り

一人佇む^{たえず}
日本橋

息を殺して
抜け殻のように

皺^{しわ}くちやハンカチ
置き土産

優しさ悲しい
大阪の夜

肩を寄せ合う
人影に

あの日懐かし
中之島

二人歩いた
公園に

涙雨降る
情熱の雨が

恋しい人の名
つい呼べば

枯れ葉が頬打つ
大阪の夜

私一人が
身を引いて

残り火だけが
燃えている

未練重いと
梅田駅

二人旅した
摩周湖に行くの

想い出隠すわ
霧の中

明日からるんるん
大阪の夜

僕だけの宝物

Y
u
k
a

昔の思い出 引き出し 開けたら
手編みの マフラー 色褪せてるけど
はつきり 記憶が よみがえってきたよ
遠くへ 引越した あの子の 笑顔が

スキと言う 勇気がなかった
あの頃の 僕には
今 もし 君に 出会ったら
スキだったと 言えるよ
たぶん あれが 僕の 初恋

道草しながら 帰った あの道
晴れの日 雨の日 みんなで楽しく
いたずらして 君 泣かせたことあった
ゴメンと 言えずに あわてて 帰った

あの時の 思い出 辿りに
故郷へ 帰ろう
今 もし 君を 見つけたら
なつかしきで いっぱい
そうさ あれが 僕の 初恋

初めてもらった 女子からのプレゼント
色褪せてるけど 大事な 大事な
僕だけの 宝物
大事な 大事な 僕だけの 宝物

月桃の花

湯川 れい子

ソーラン 北の岬から

南に向いて 吹く風に

乗って行きたや 君住む島へ

あの島へ

三線さんしんの音に合わせて 踊るたび

束ねた長い黒髪に

ゆれていた月桃の花 サネン花よ

※同じ日本の空の下

今宵も心は風になり雲になり

ウタキの浜で あの娘と

エイサーを 踊るよ

恥じらいの 薄紅うすくれなひに染まる花

金波銀波の 月の道

くちづけた月桃の花 サネン花よ

島ふくろうが 呼ぶ声に

恋する想いは笛になり鳥になり

月夜の浜で あの娘と

夜明けまで 踊るよ

※(リフレイン)

手をつなごう 前を見て歩こう！

ゆき ちかげ

悪魔が地獄を 連れてきた

瓦礫の姿に 変われども

土の中には 故郷ふるさとがある

ひとりぼっちに なったって

手と手をつなぐ 温もりが

心の絆を 伝えてくれる

頑張る力の ギリギリで

力強く 生きるから

もうこれ以上は

頑張れなんて 言わないで

大丈夫だよ 負けないよ

挫けていては 明日がない

両手をつなごう しっかりと

一歩が駄目なら 半歩でいいさ

俯かないで 歩いて行こう

みんなで守ろう 前を見て

守ろう日本 がんばろう日本

守ろう日本 がんばろう日本

みんなで守ろう 前を見て歩こう

おんな…湯の里 かじか橋

ゆら悦子

泣いて別れる 運命なら

曇る冬空 あゝ 三朝の川よ

ため息ついて 遠くを見れば

風に雪舞う 三徳山

ひとり暮しの 寂しさかくし

口紅をひいても 白い顔

里は山陰 かくれ恋

湯の香悲しい あゝ 心に沁みる

惹かれて熱く 抱かれた宿よ

やっとなつかんだ 幸せも

一夜限りの はかない夢と

背中合わせで 消えた人

多羅の葉手紙 枝先で

書いて浮かべて あゝ 流れるままに

届くあてない 未練の文字よ

月のあかりに かじか橋

そんな女を 見あげる影は

首をかしげた 川がらす

あしたは晴れる

由 梨 恵 子

何もかも 何もかも 失くしたけれど

夢はこころに 抱いている

こんな災い はやく忘れて

もとに戻そう ふるさとを

星がきれいだ あしたは晴れる

前よりも 前よりも すてきな街に

するさ させるさ つくりたい

泣いてばかりじゃ 花も咲かない

つらい時こそ 笑おうよ

星がきれいだ あしたは晴れる

何もかも 何もかも 失くしたけれど

青い空だけ あればよい

明日を信じて 力よせあい

笑顔あふれる ふるさとに

星がきれいだ あしたは晴れる

サンセット ラブ

横 森 葉 子

風が吹き靡く あなたの呼び声
風が揺する ビブラート
振り向けば その微笑み 走り来る シルエット
砂漠よ 遙か 果てなし アラビア
吹き荒れ語る このプロローグ
ラーラ ラーラ ラー

砂のメモリー 風紋の調らべ
芽生える想い 寄せ合えば
悲しめたくない 黙っていたい 過ぎた事
昨日の事は 明日を呼ぶ草笛だから
コーランに捧ぐ 清き誓いを
ラーラ ラーラ ラー

行こう助け合い どこまでもいつも
きらめく夕陽 大地踏み
緑の憩い オアシスの辺りへ
堪える渇き 我等に恵みを
染まる二人の サンセットラブ 茜色砂に溶けゆく
ラーラ ラーラ ラー ラー

電話帳

吉川徳子

外はしとしと 雨降りつづき
何する気にも なれずにごろね
届いたばかりの 電話帳
たいくつしのぎに めくつてた
素適な女性の 名が目にとまり
指先なんども なんどもなぞる
よろしかったら お返事ほしい
前おき記し 手紙を書いた
浪人ぐらしの ふがいなさ
他愛のないこと ぐちを書く
不躰ですがと わびしたためて
ためらうことなく ポストに入れた
ある日陽ざしの まぶしい中を
涼しい顔の 女性が見えた
生前残した 母親の
お返事届けに 来たと言う
それからかれこれ 数年が過ぎ
彼女は現在 私の女房

ふたりの旅路

吉田静江

登りくだりの この俺に
灯りついたよ おんな華
苦勞みちずれ 来たけれど
おまえと出会った 居酒屋で
今夜は飲みたい ふたり酒

愛の深さと 絆川

人は誰かと めぐり会う
口じゃ言えない 苦勞坂
笑顔でいつか 語りたい
幸せ求めて 咲かす華

もみじ色づく 山里に
連れて行きたい 女性ひとがいる
お前のささえを 生きがいに
明日を信じ 歩きたい

二人の旅路の 恋あかり

おんな川

連 達人

宿命さだめの川に 流されて

この儘まま 死んでしまいたい

一度は切れた 糸だけど

縋すがるあなたの その胸に

おんなの涙 捨てました

明日に夢を ああふたり連れ

苦勞の川に 泣かされて

涙の数かずも 二度三度

耐えて忍んだ おんな道

いのちときめた 男おとこだから

おんなの恋を かけました

明日に命 ああふたり連れ

情の川に 包つつまれて

生きて行きたい 二人です

どうせ短い 命なら

離しはしないで この私

おんなの心 きめました

明日にのぞみ ああふたり連れ

土の華

若松 かつ子

野良着姿が 花嫁衣裳

好きで来たのよ あなたの元へ

会津磐梯山の 嶺を背に

雀一緒に 畑仕事

此処が私の 故郷と

決めて咲かせる 土の華

春はどっさり 山菜採れて

秋は黄金の 稲穂が重い

かわい赤児の寝床を 作るよに

土を耕やし 種を蒔く

汗を拭き拭き 見上げれば

空にぼっかり 母の顔

嫁に来てから 初めて今日は

待ちに待ってた 舟引き祭

米の俵を三俵 木の舟に

乗せて引き合う 西東

これで私も 村の仲間ひと

明日も咲かせる 土の華

母さんの手のひら

綿木義昭

長い線路に 星屑がふる
冷たい夜空に 流れる星よ
ひとつふたつと 流れて行くの
母の笑顔は 月見草
優しく肩に 手をかけて
歩く夜道の 思い出を
忍ぶ男の にかい酒

苦労かさねた 母の手のひら
優しく俺を 包んでくれた
涙見せるな 見せないものと
母は笑って 抱きしめて
男はつよく 生きるのと
母の香りの 胸のなか
夢の語りは 屋台酒

夜のテラスに 流れる星は
四十路の道に 灯りをともす
心の隅で 恨んで泣いた
母の面影 今いずこ
親父のような 母さんに
わびる男の 子守唄
つらく悲しい おとこ節

淡墨桜

渡辺 蛍雪

春まだ浅い 山の麓に

鳥は囀り せせらぎの音

昔風の…… 薫りほのかに

男ごころを 奮い立たせる

あゝ勇壯の 淡墨桜

満ちては欠ける 月の定め

山は紫 満天の星

昔風の…… 道を辿れば

辛い憂き世を 時に優しく

あゝ麗しの 淡墨桜

移りて変わる 人の心に

深く根を張り 動かぬ大地

昔風の…… 生命育くむ

芯の強さを 胸に抱いて

あゝ悠久の 淡墨桜

ちよつと ちよつと

渡辺久士

ちよつと ちよつと ねえ ちよつと
素敵な男性^{かた}ね 惚れ惚れしちやう
銀座の灯^{あかり}も 魅惑のムード
私と^あいい夢 見ませんか
ちよつと ちよつと 酔わせちやだめよ
お酒は私を じゃじゃ馬にするわ
午前零時に 私^あは帰る
送らないでね 一人で帰る

野暮な詮索 よしましよ
心の奥は のぞいちゃ嫌よ
恋の扉は しつかり閉めて
可愛い悪女を したいだけ
ちよつと ちよつと 本気はだめよ
二人で地獄に 落ちたくはないの
籠^{かご}に飼われた 小鳥^{こどり}のような
明日^{あす}の暮^あらしが 私^あを待^まってる

ちよつと ちよつと 接吻^{くちづけ}はよして
さよなら有り難う 夢^あで逢^あいましよ
星^{ほし}が消えたら 気分^{きぶん}もかわる
忘れ^わましようね 知^しらないどうし

東京新宿なみだ街

わたなべ 泰彦

あなたと暮らした あの角部屋は
終日西日の 裏通り

今ごろどうして いるかしら

尽きないおんなが 今夜またひとり

酔って止まり木 あかい酒

あゝ東京・ 東京新宿なみだ街

お店に疲れた からだを抱いて

苦勞を勞して くれた人

今ごろどうして いるかしら

おもいでさがして 今夜またひとり

酔って裏町 あかい酒

あゝ東京・ 東京新宿なみだ街

それでもよかった もう少しだけ

あなたの私で いたかった

今ごろどうして いるかしら

懲りないおんなが 今夜またひとり

酔って路地裏 あかい酒

あゝ東京・ 東京新宿なみだ街

編集後記

たきの えいじ

今年は昨年を上回る応募作品があり、私達のこの詩謡集は熱気で満ちています。ありがとうございます。

ふるさとへの思い。友への思い。父や母への思い。心をゆらす愛しい人への思いと、1作1作に込められた言葉達に、編集に携わった委員共々感動しています。

これから、メロディーを付けられて、自分の歌の空の上に飛び立っていきますようお願いしています。それぞれの詩が、それぞれの空の上を…。

この詩謡集の編集の為、頑張って下さいました委員のみなさん、ありがとうございます。そして、たくさんの参加を呼びかけて下さいました事務局スタッフに、重ねてお礼申し上げます。

編 纂 委 員

津	甲	建	石	茜	片	た
田	斐	石	原		桐	きの
雅			信	ま	和	え
道	新	一	一	さ	子	い
				お		じ

= 編纂に関しては出来るかぎり原稿に準じました。 =

◆おねがい

この詩謡集に掲載の作品を、付曲及び使用される場合は、お手数でも、当協会事務局と掲載著作者との承認を得てください。当該作品の会員には、事務局からご連絡申し上げ付曲及び使用の可、不可をご回答申し上げます。

きよらの詩あしたの詩

— 日本作詩家協会年刊詩謡集 —

(二〇一二年版)

平成二十三年十二月二十五日発行

発行者 湯 川 れい子

編纂者 日本作詩家協会
年刊詩謡集編纂委員会

印刷所 前田印刷株式会社

発行所 一般社団法人 日本作詩家協会

〒160-0004 東京都新宿区四谷三丁目二番地

T R II ビル四階

T E L 〇三・五三六三・六一五一

F A X 〇三・五三六三・六一五四

掲載作品を付曲される場合は事務局宛にご一報下さい。

